

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

昭和三十五年九月二十日印刷 第一巻 第十一号
昭和三十五年十月一日発行 (毎月一回一日発行)

風俗奇譚

恋虐呪縛特集

風俗奇譚

昭和三十五年九月二十日印刷 第一巻 第十一号
昭和三十五年十月一日発行 (毎月一回一日発行)



サド小説 特集・サディストの群れ
裏切りの決算

10

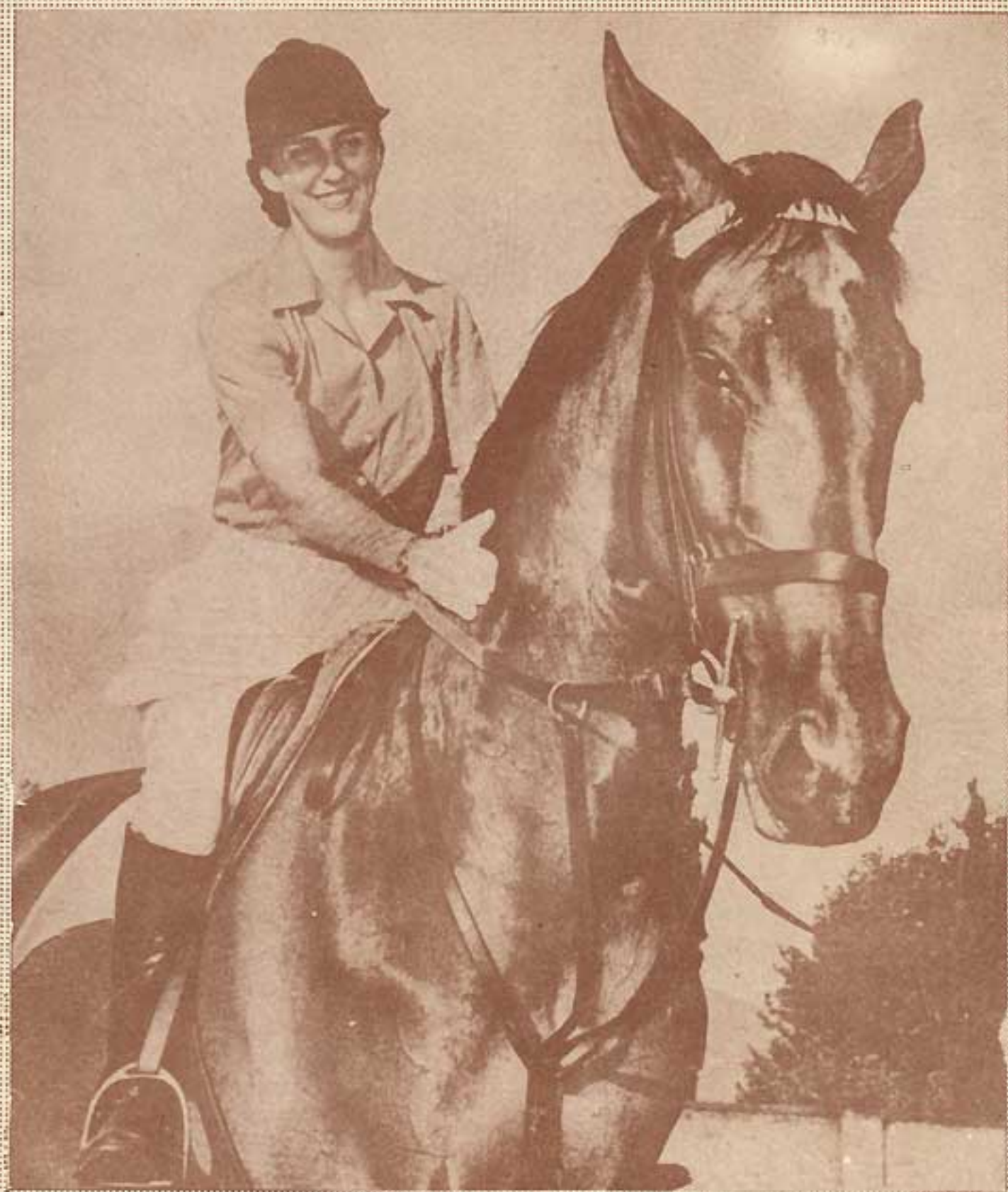
恋虐呪縛特集

10

定価 1 4 0 円



長靴をはいた女(その4)



長靴をはいた女(その1)

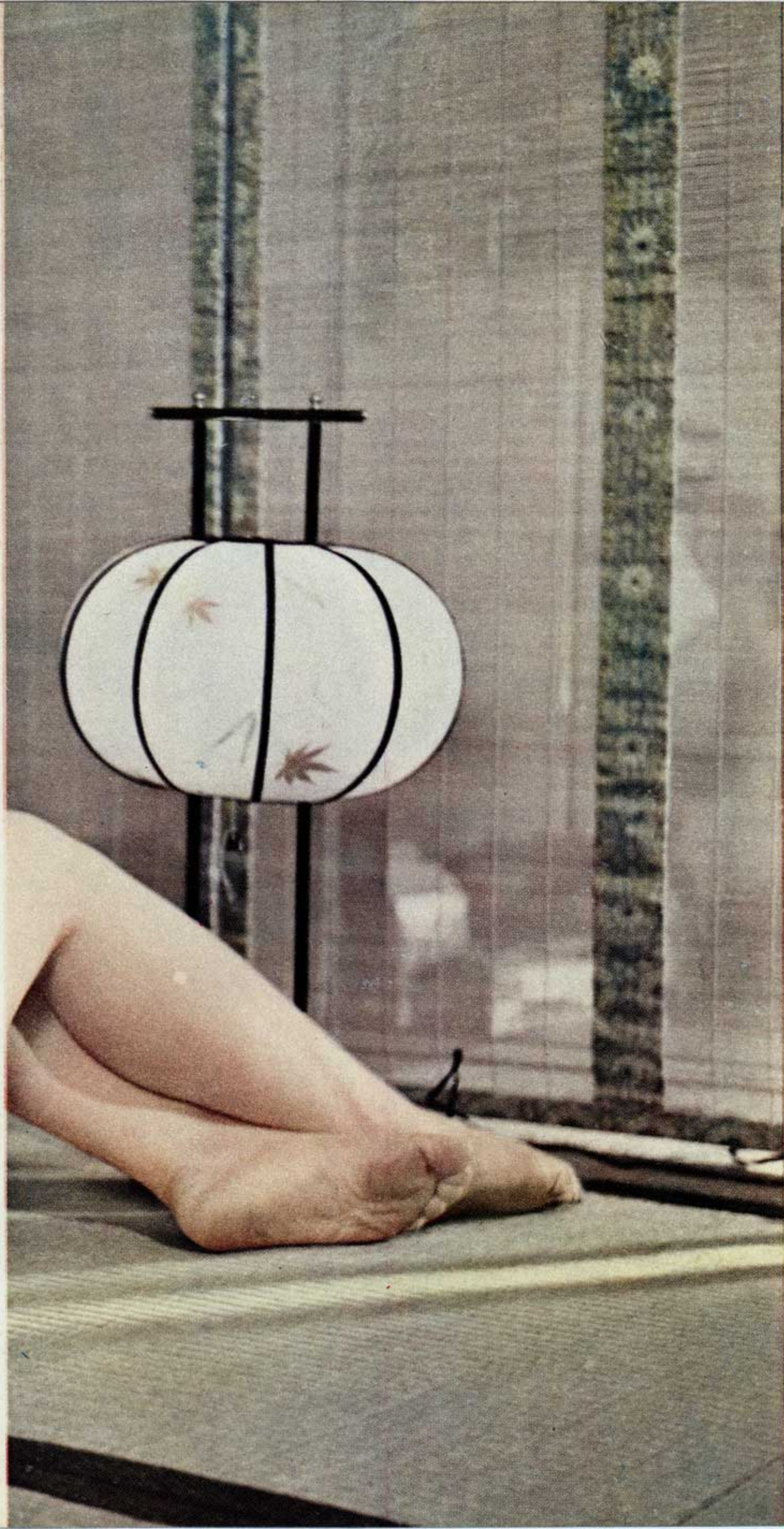
美しき囚虜

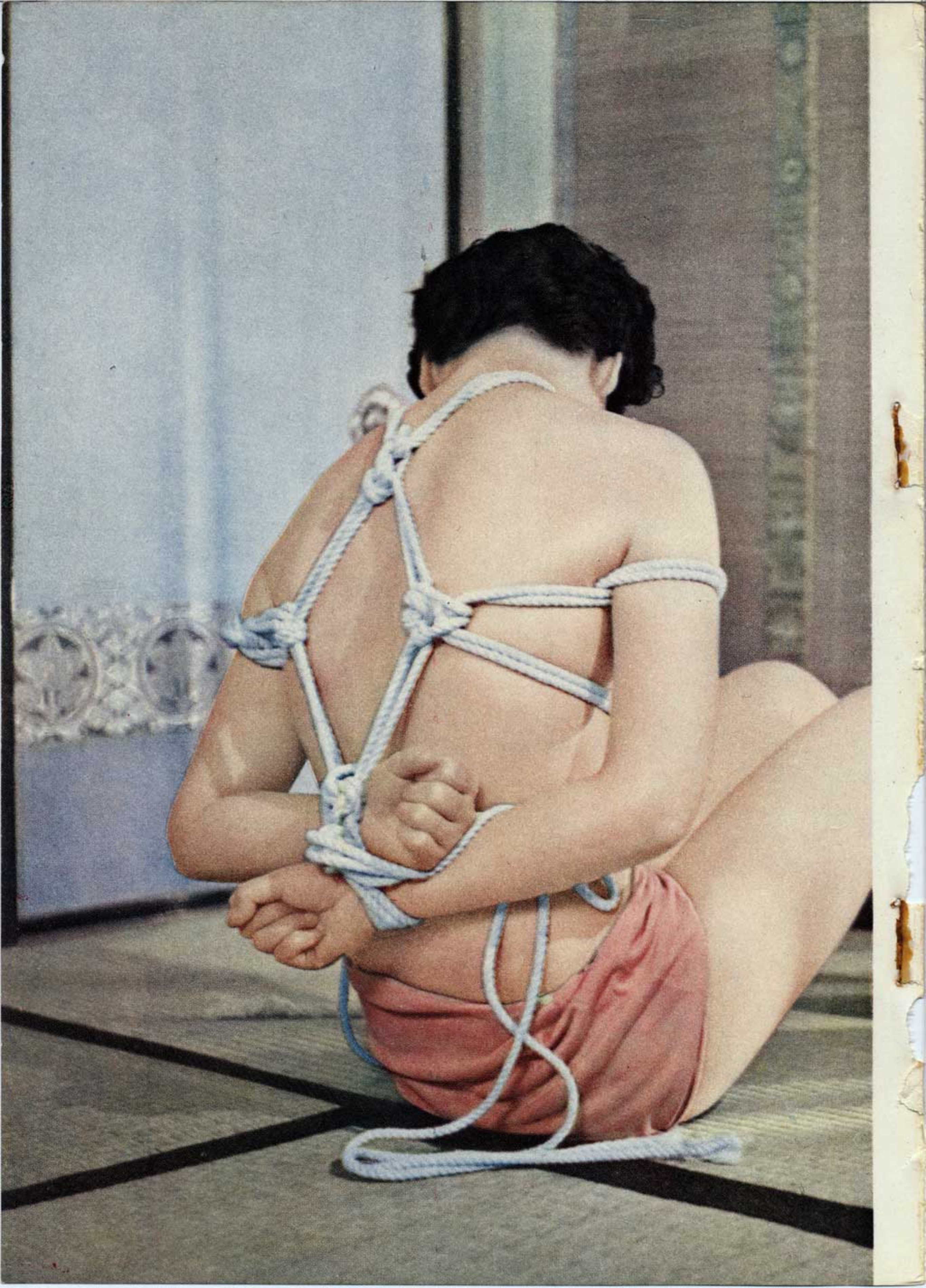
白衣がよくうつるひと きらびやかな和
室にしっとり落ち着くひと ほのぼのと
肌のおうひと——そのひとがいました
られて ああ ひっそりと置かれている



あかりも淡く

みすのうちに あんどんのあかりも淡く 白い肌を やわらかく照らす 縛られた女は 何を思うのか じっと うずくまった姿勢をくずさない うす明かりの部屋の 静かな緊縛よ

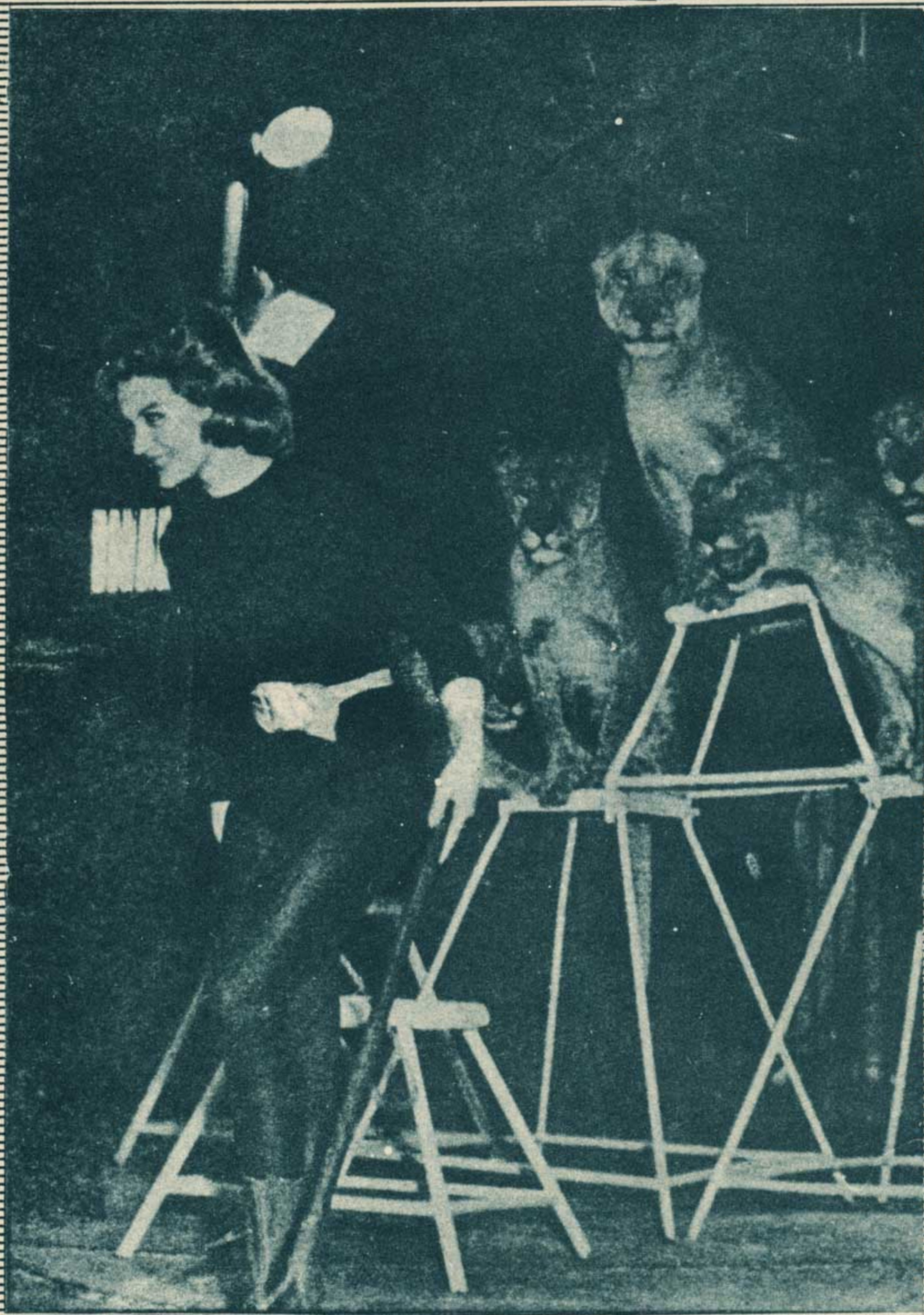




はなやかな受縄

あでやかな肌に ハデなしごきが巻
きつき この姿態の なんと艶なる
ことよ 着物の柄の元祿模様が似合
って 痛ましくもはなやかな受縛よ





はねをはいた女(その2)



風俗奇譚 十月号 目次

美しき囚虜……………(三)
あかりも淡く……………(四)
はなやかな受縛……………(六)

〔多色口絵〕女体知恵の輪……………田上恵子(折込み)

白衣の佳人……………(一五) 浮世絵風……………(二八)
石だたみの無残絵図……………(一八) 禪をした男……………(三〇)
長椅子と女……………(二〇) 受縛の憂愁……………(三二)
浴衣も乱れて……………(二二) 長じゅばん緊縛姿態……………(三三)
亀甲にしばられて……………(二四) ローソクが肌を焼く……………(三六)
欄間づり……………(二六) きれをかまされて……………(三八)

〔扉のことば〕セックスをはかる計器……………西尾年丸(五五)

特集サディストの群れ

残虐なるサディスト達……………大達欣治(五六)
あるサドやくざの告白……………本郷寅夫(六〇)
ネクロファイリーの男……………荒川太郎(七〇)
私の緊縛の記録……………佐藤重雄(七六)
犯罪から見たサディスト……………小森初男(八三)

〈アブチック秘画展〉
今やスリル第3世紀……………(三九)
最近の外国雑誌から……………(四六)
のぞき……………(五二)
あたしのペット……………(五三)
油ランブ……………(五四)
長靴をはく女……………(表紙二)
★女体緊縛群像……………江馬美久(折込裏)

小説 復讐鬼

地下室の吊り責め……………鶴藤恵(二六)
日本光道教潜入記……………黒坂弘明(二五)
生きながら焼かれる女……………目黒俊二(三三)

マゾヒストの手紙から④……………谷貫太(二〇〇)

男性に加えられた「珍刑」……………声立鋭吉(二二)
全身くまなく刺青した男……………千石仙太郎(二八)
明治性的珍聞史(9)……………(九七)
刺激遊戯のあそび方……………真野麗(二八)

★読者サロン……………(二四六)

小説 裏切りの決算

野々村 裕(三三)



長靴をはいた女(第3)



女体知恵の輪

こんがらかった知恵の輪のように どこをどう縛られたのか 二人の女が入り組んで
転がされている この縄は。とけるのだろうか それとも永遠にとけないのだろうか

裸女緊縛群像



白衣の佳人



白衣をまとして 彼女は しっとりと美しく
はだけた白い肌に 縄が巻きついて 凄艶！



あわれ 白衣の人よ おん
みは 縛られた上に 暗黒
の世界に とじ込められた

眼帯で片目をふさがれ
このイケニエは 次に
どこを責められるのか



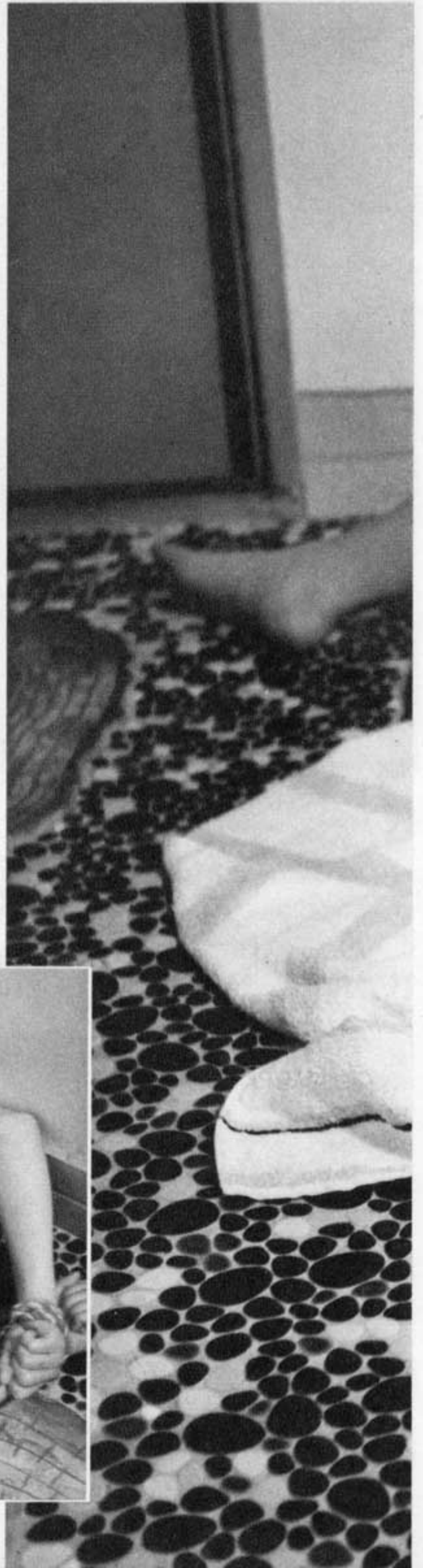
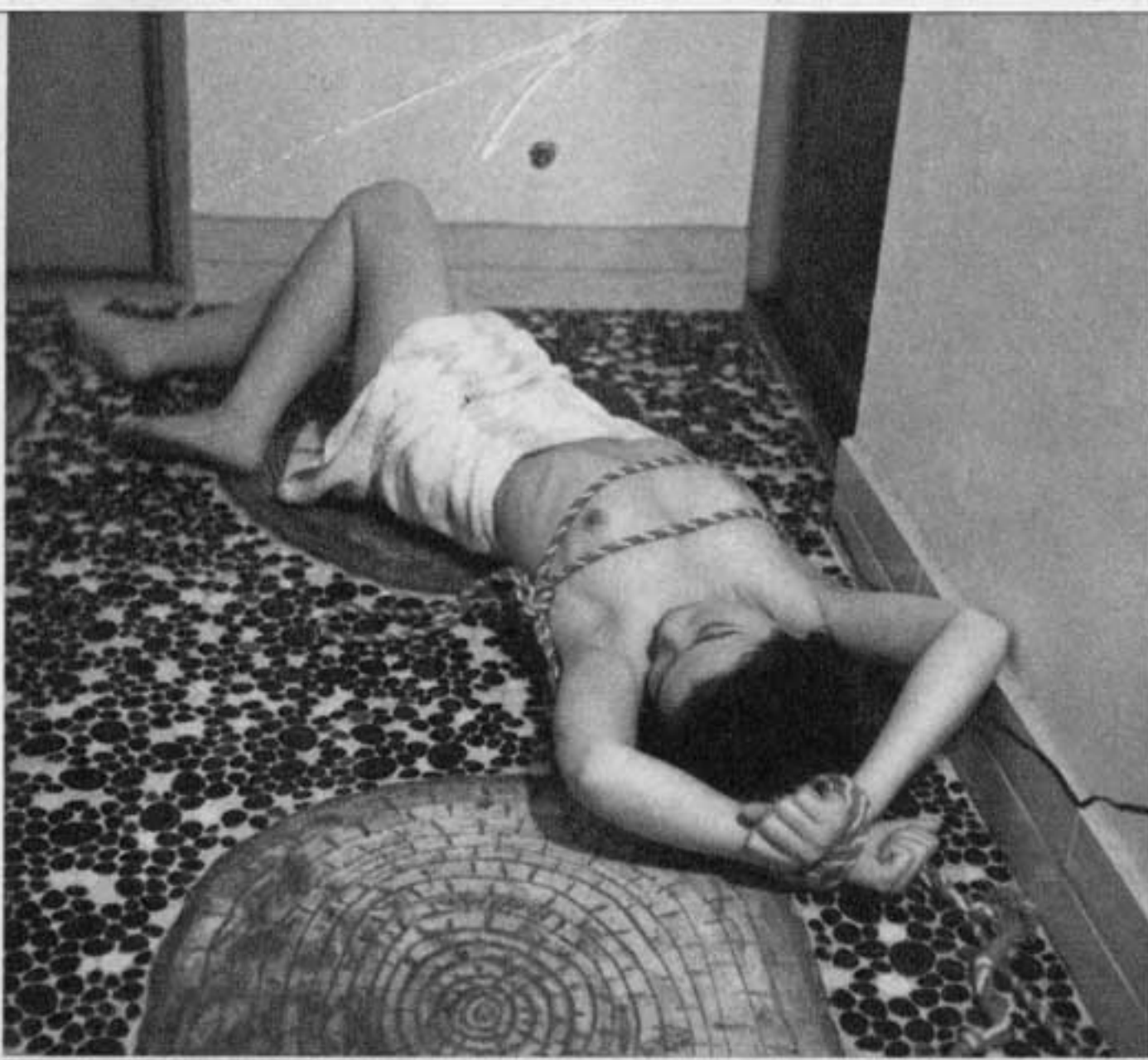


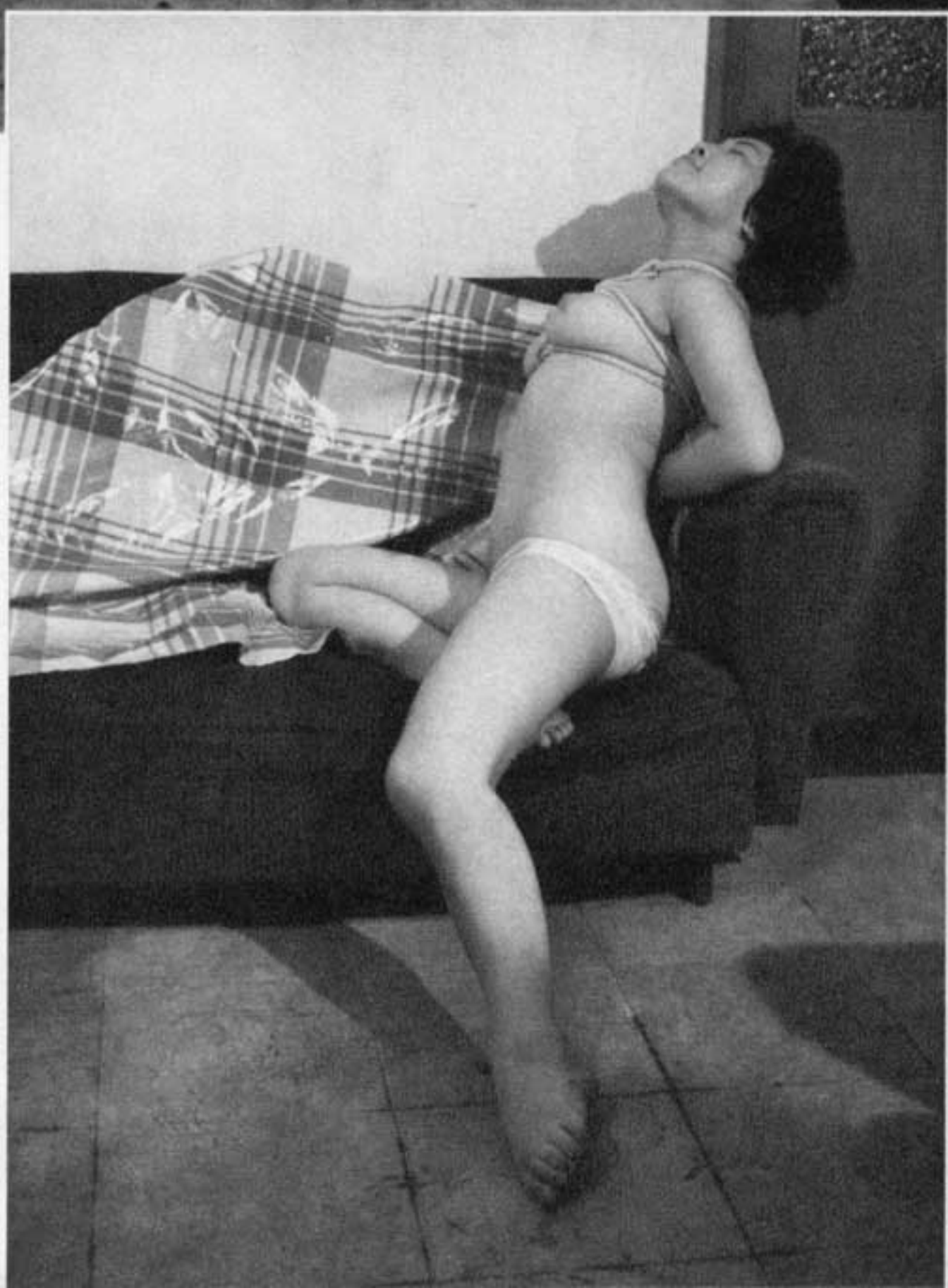
無残絵図

石だたみは 冷たいだけでなく 痛い 縛られた
女が転がされて 次の仕置きを待っている この
静けさのなかで 彼女は 不思議な戦慄を感じる



石だたみの





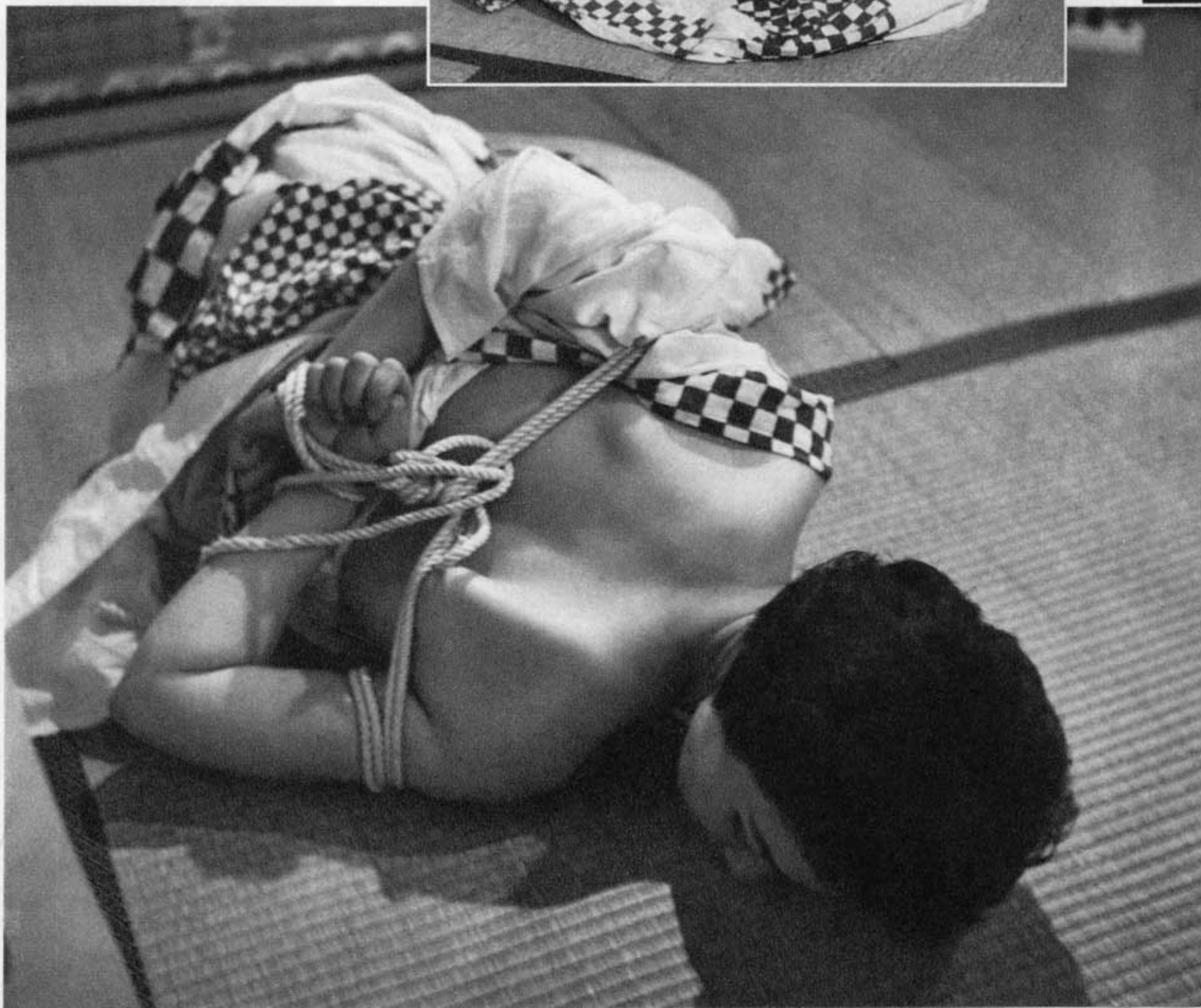
長椅子と女

長椅子の上で 女は 縛られ いろいろな姿
態をしいられる だが こうしていいじめられ
ると 奇妙なことに からだの奥から ほの
ぼのと燃えあがるものがある 泉のようにこ
んこんと湧きいでるものがある 嗜虐の魔術
のマカ不思議さ 女の業の避けられぬ運命！



浴衣も乱れて

浴衣を乱して 乳房をしばらく 後ろ手にく
くりあげられて ひとときを 放っておかれ
て 女は 異虐の世界に遊ぶ からだじゅう
を 電流のようなものが流れ しぶれが走り
一散に 陶醉の境地に 運びさられる ああ





首と 腕と 手首とを軸にして 亀甲型に 上半身を
縛られ 全裸の女は あえぎ もだえ そして溜め息
をつく いったい誰が この美しいエモノを料るのか



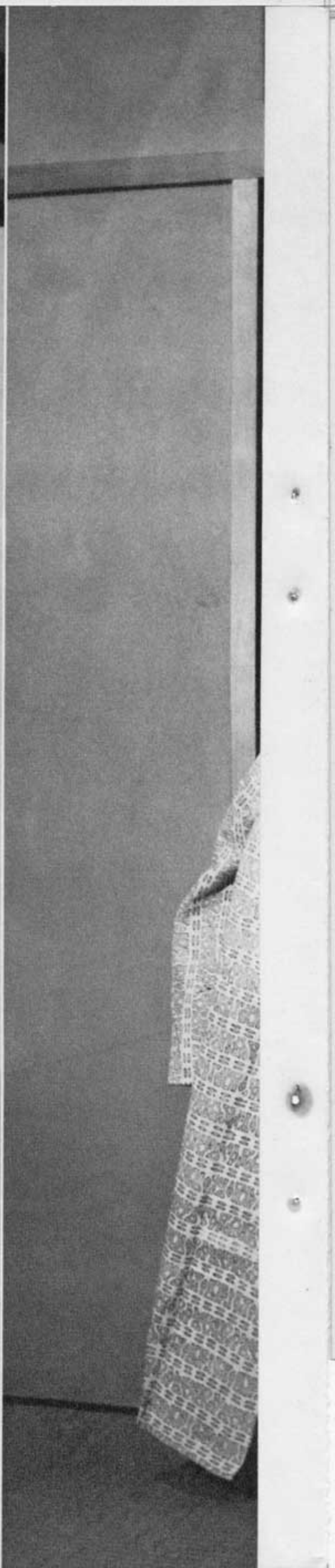
亀甲にしばられて

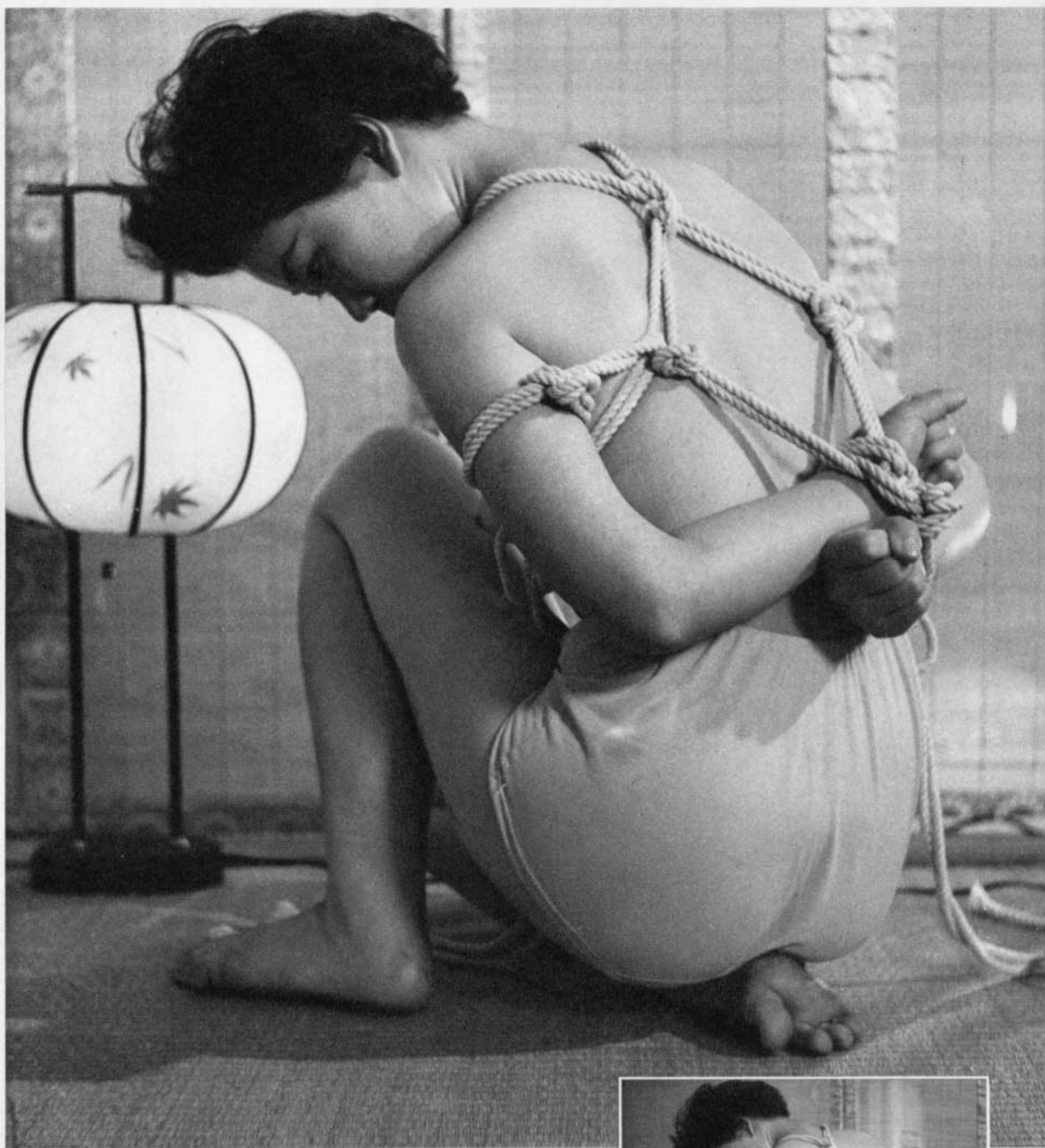


欄間づり

手首をそろえて 欄間につられて
彼女は とらわれの小鳥 泣こうが
わめこうが 助けにくるものはいな
い この寝室に 夜は 静かにふけ
ていき 女のあえぎと それを見つ
める男の さし迫った呼吸だけが
静寂を縫って流れている 無残な絵
巻がひもとかれるのを 待つのは誰

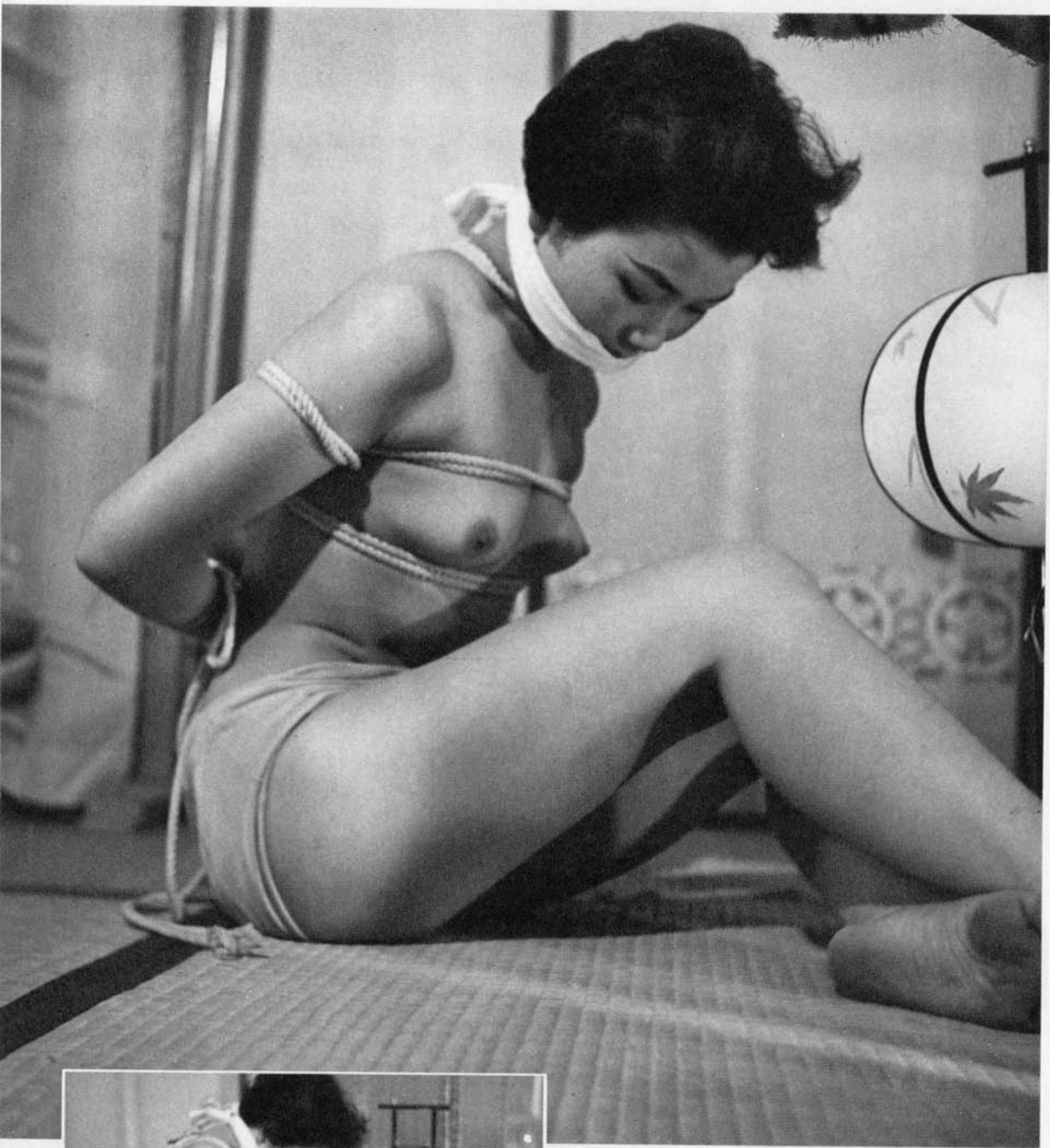






あんどん 行灯があって きちょう 几帳があって ミス
 が垂れていて この部屋は 浮世絵
 の世界だ ひっそりとした女のたた
 ずまいにも 日本の女が匂っている

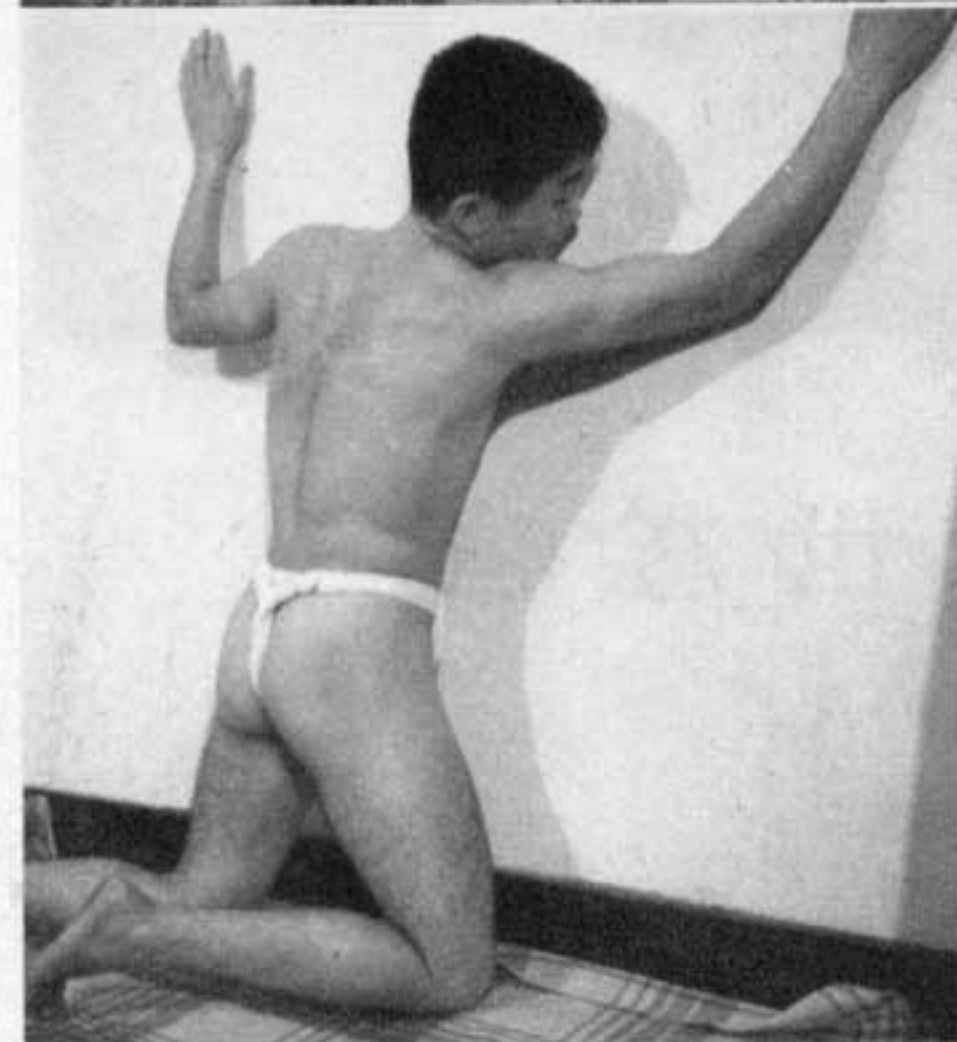




浮世絵風

禪をした男

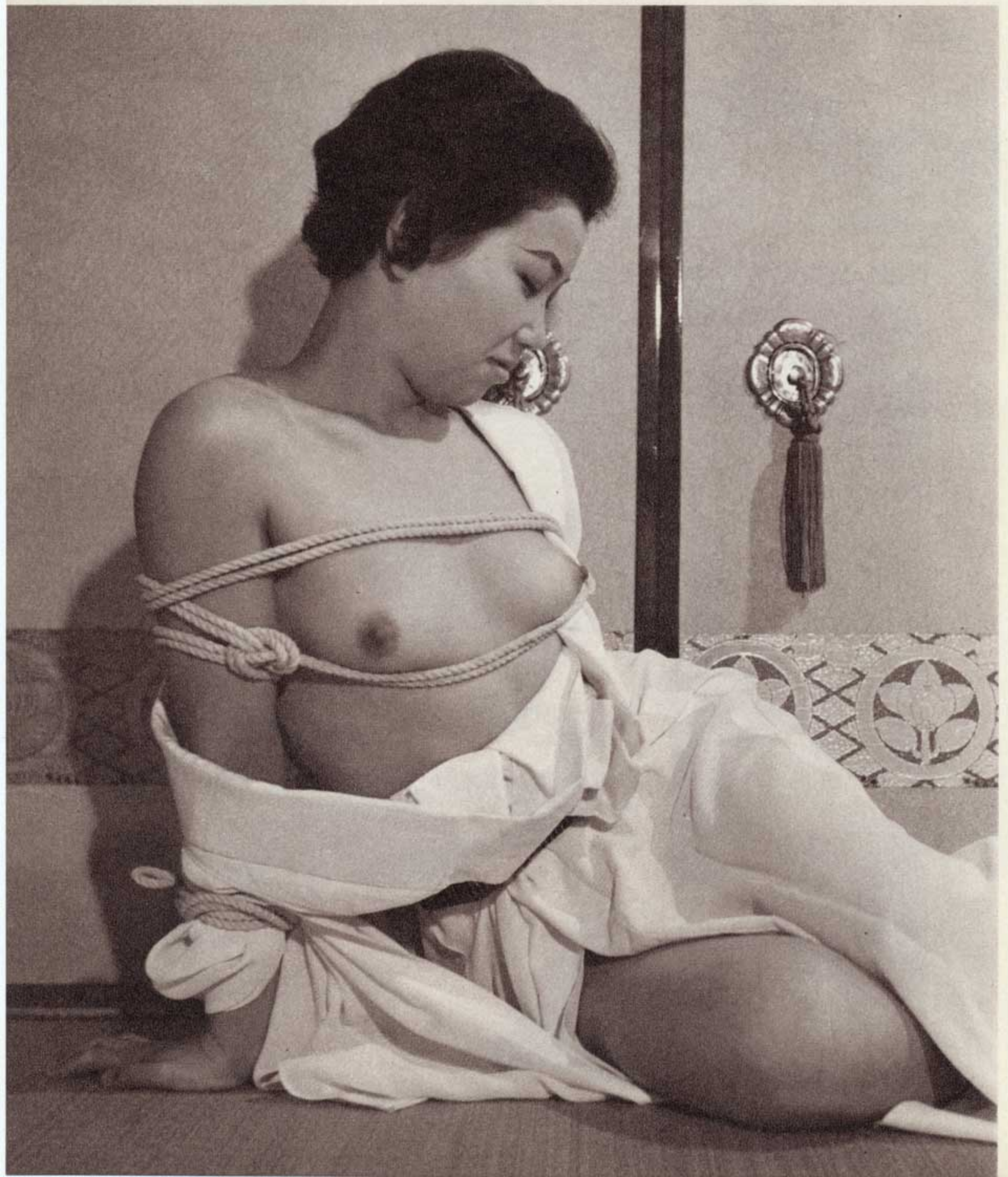
緊禪一番とは 男が発奮したときのことばだが キリッと締めた禪は それだけに 男をシャッキリと見せる そこがいいのだ それが美しいのだ 本人もまたそこに喜びを見いだし 法悦の境地に ひたるわけだ



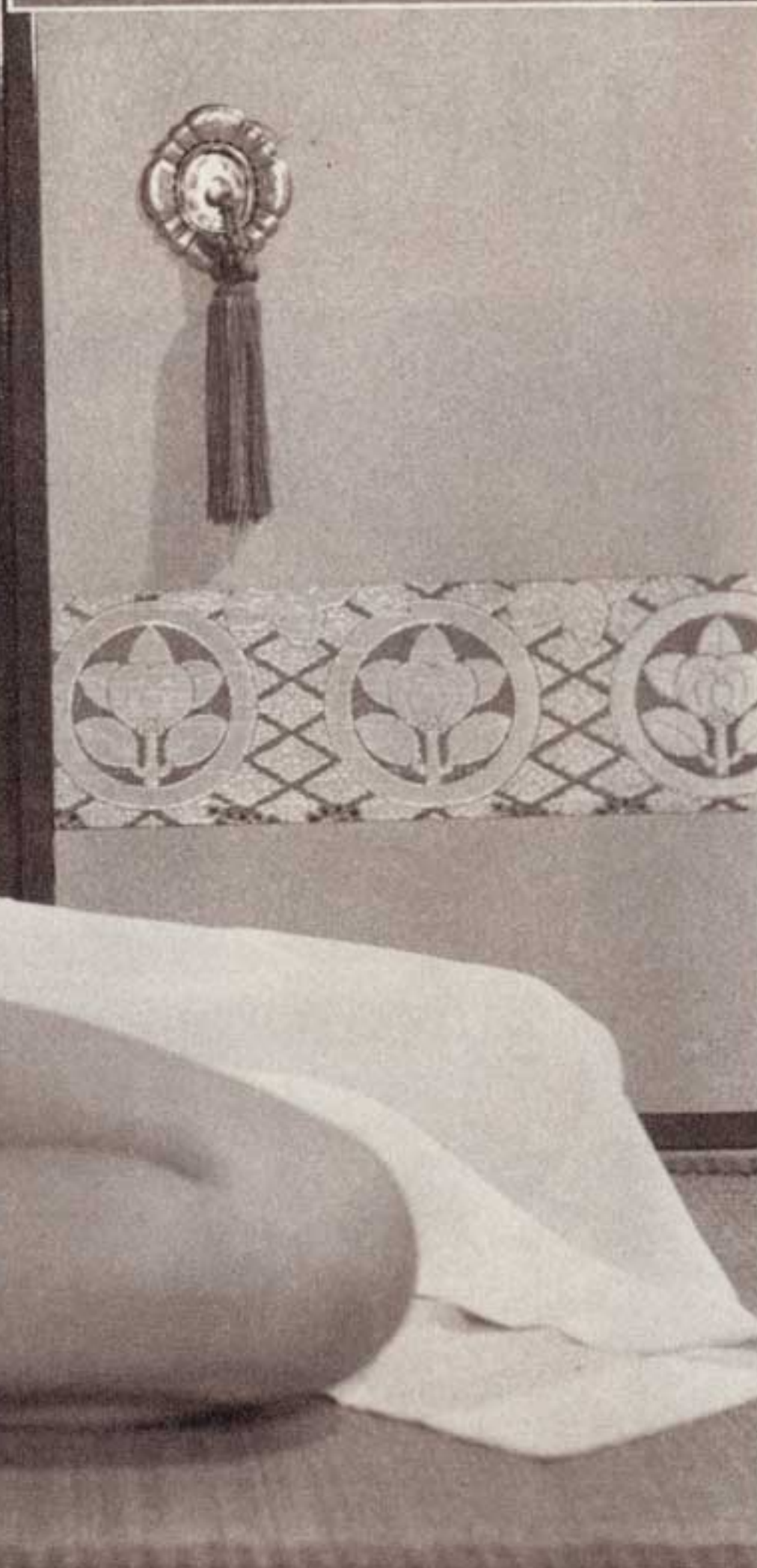
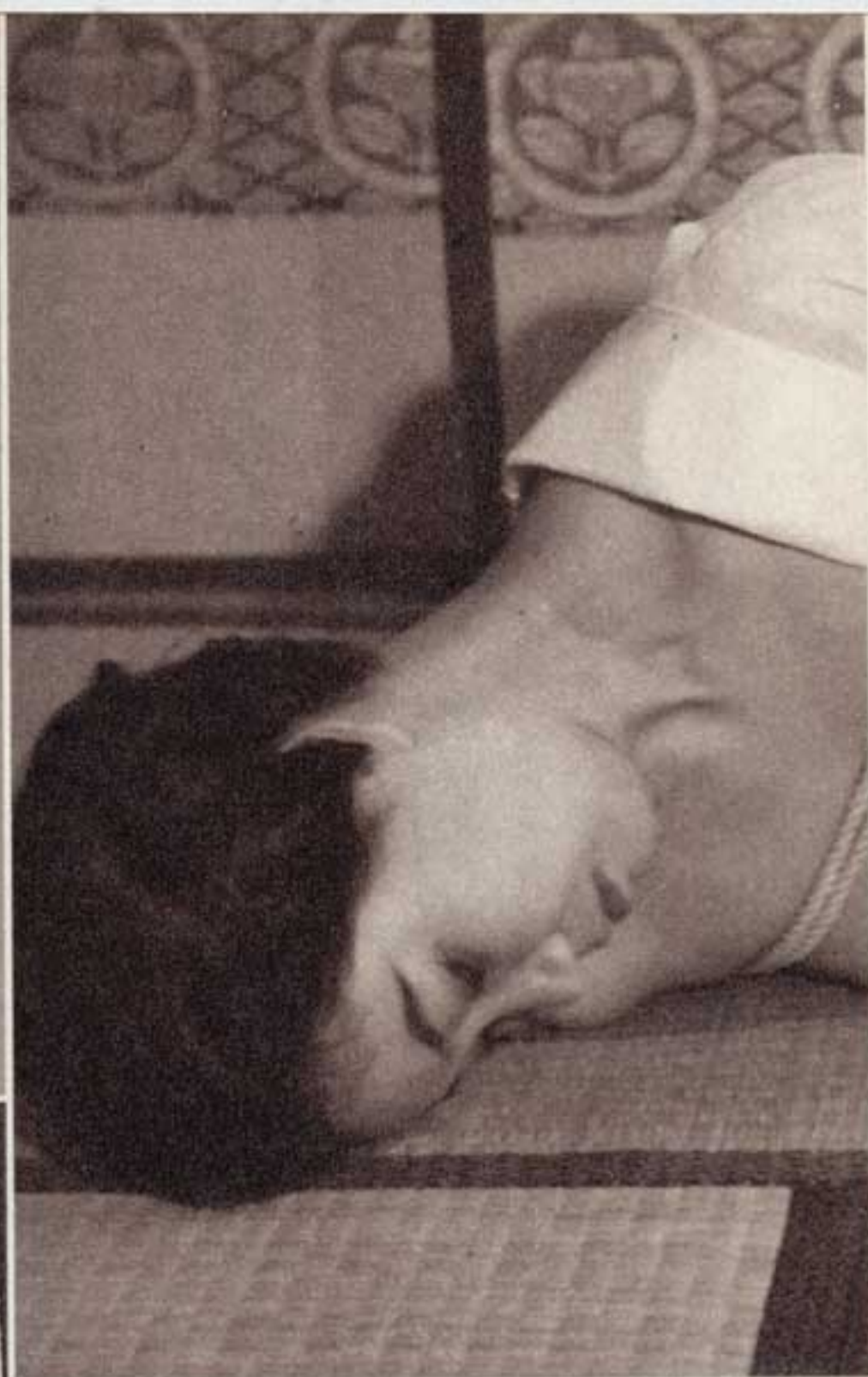


長じゅばん緊縛姿態

この豪華な部屋で 花のような美女が 縄をうけたた
たずまい 長じゅばんから 乳房がこぼれ 裾が乱れ
て 膝がしらが むきたての卵のように 白く 丸い







女の肌が 縄を恋う
縄の魅力に いのちをかける

女のいのちが 縄を恋う
からだの奥から そくそくと
湧いてくるのは 女のよろこび

女のよろこびは 縛られて
手足の自由を奪われても
炎のように 燃えあがる

だから
女の肌が 縄を恋う
縄の魅力に いのちをかける

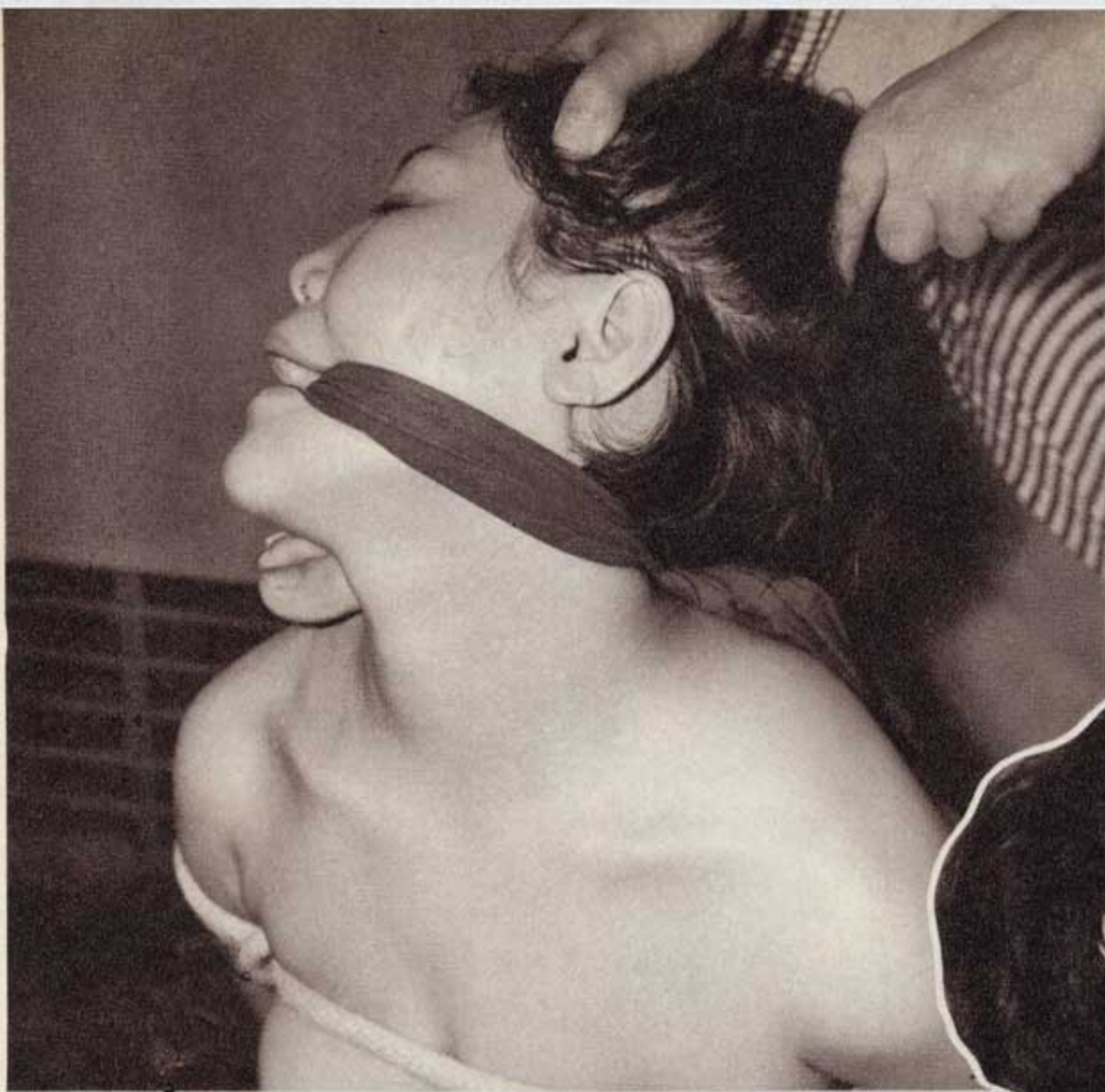
ローソクが肌を焼く

ローソクのほのおが 赤々と 白い肌に映えるとき
女は ただひたすらに念ずる この呵責かじくのなかから生
まれでる新しい生命を じっとして願う 女の宿命の
果てにひたる陶酔を 女にとっては 一本のローソク
の小さなほのおも 万物生成の太陽のように 偉大だ





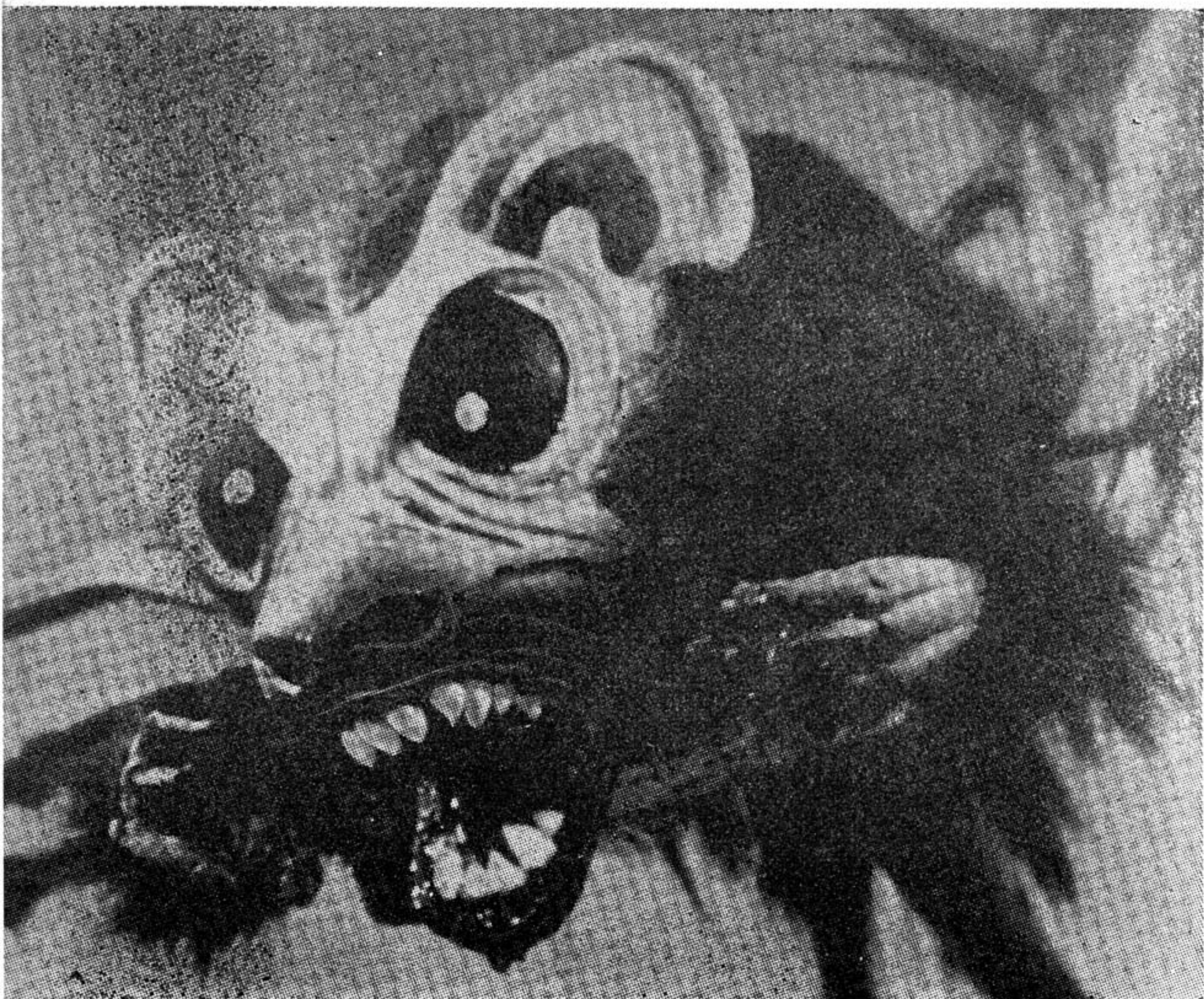
きれを
かまされて



苦は楽のタネといふから
苛酷なサルグツワからも
喜びが湧きでるのだらう

今やスリル第3世紀

なまじっかなスリルでは、もう誰も驚きはしない。アッと意表をつき、心胆を寒からしめるところに、このごろのスリルの真価がある。スリル第3世紀といわれるゆえん。



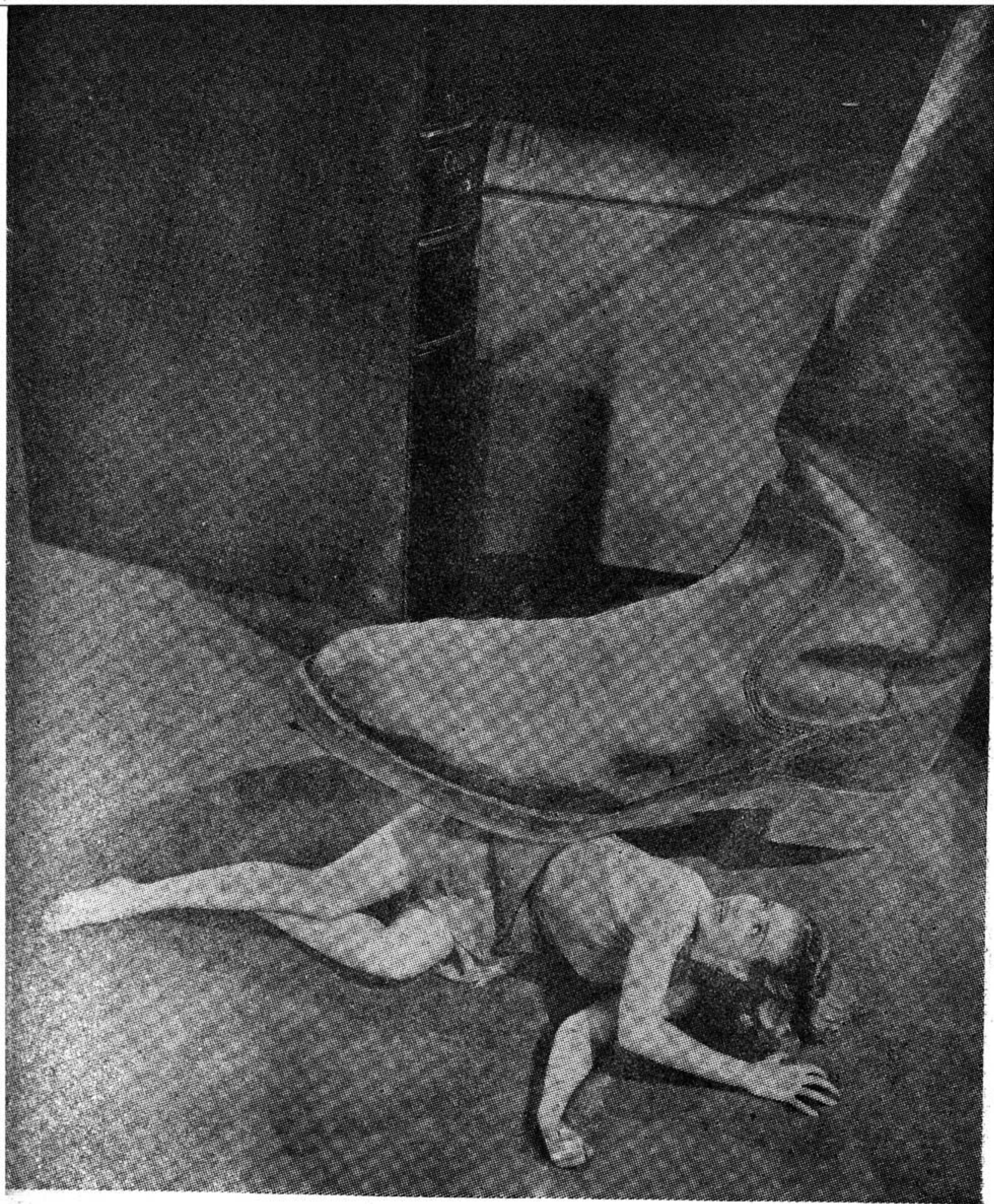
火星の怪物

ネズミ、コウモリ、クモ、カニの4つの動物をミックスした長さが40フィートもある怪物



巨人ににぎり
つぶされる人間

「あたしを手づかみにして、どうするつもりだ！」
——人間を捕えて手でにぎりしめ、巨人は、この、
か弱く、哀れな生き物をイケニエとしようとする。



巨人の足に押し
つぶされる女性

一つ目の巨人は、この可憐な女性を、グニャグニャに押しつぶして、ご馳走になろうというわけだ。彼女の運命は、まさに風前のともしびというところ。



墓場から来た男

生き埋めにされたミスカトニックの共同墓地の棺のなかから這い出した男。風化作用で、昔の面影はない！



アフリカの巨人

羊飼いだビデに殺された毛むくじゃらのペリシテの
巨人は、アフリカ中を暴れまわる凶暴な生き物だ！



イカサマ潜水夫か？

「とにかく無作法だが、着たままで、つかっていた
ただこう、この硫酸という、おいしい液に……」



いや、ガイコツだよ

「お帰りなさい。おお、キレイさっぱりと
しましたなあ。ご気分は、いかがです？」

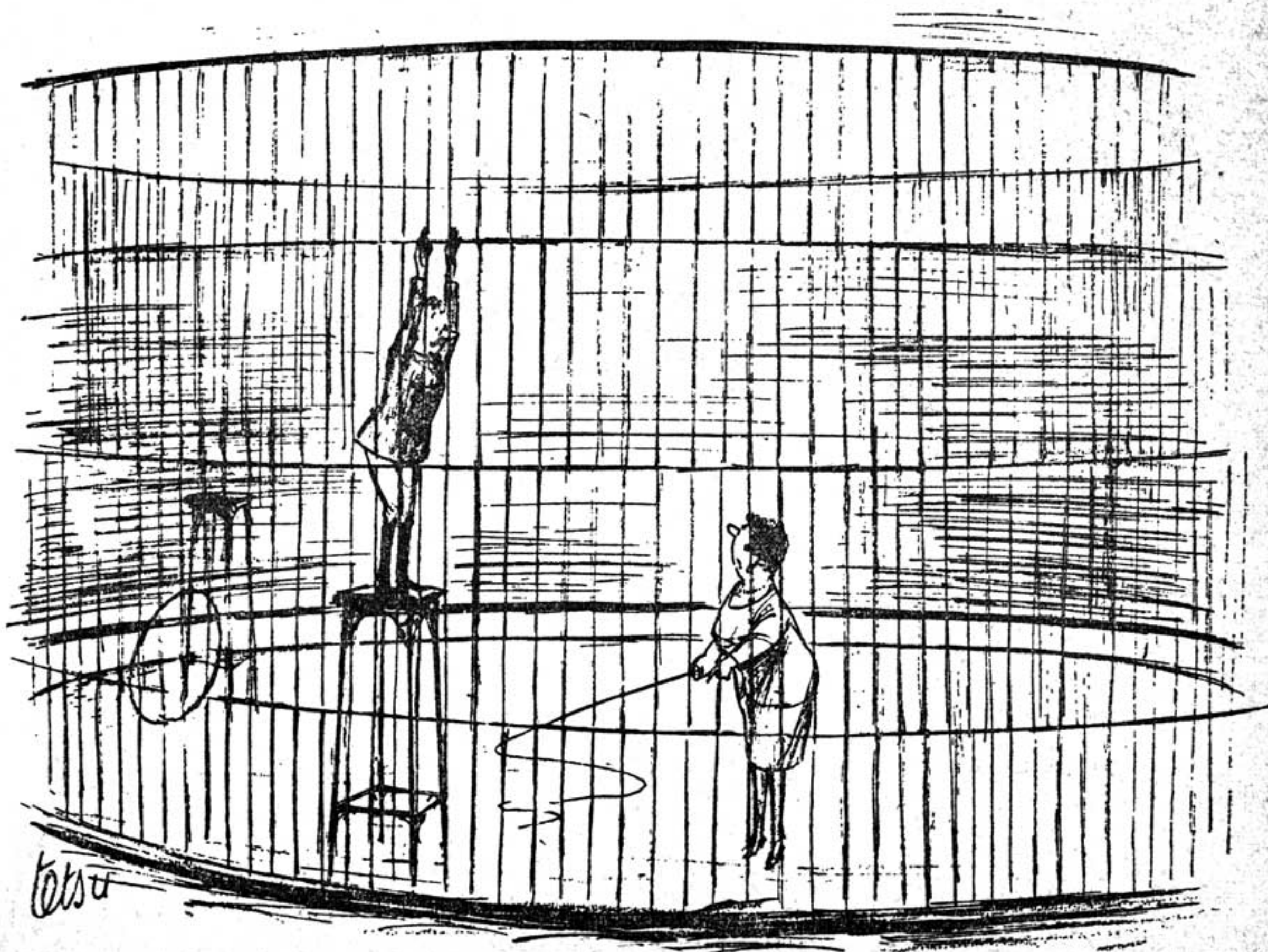
最近の外国雑誌から

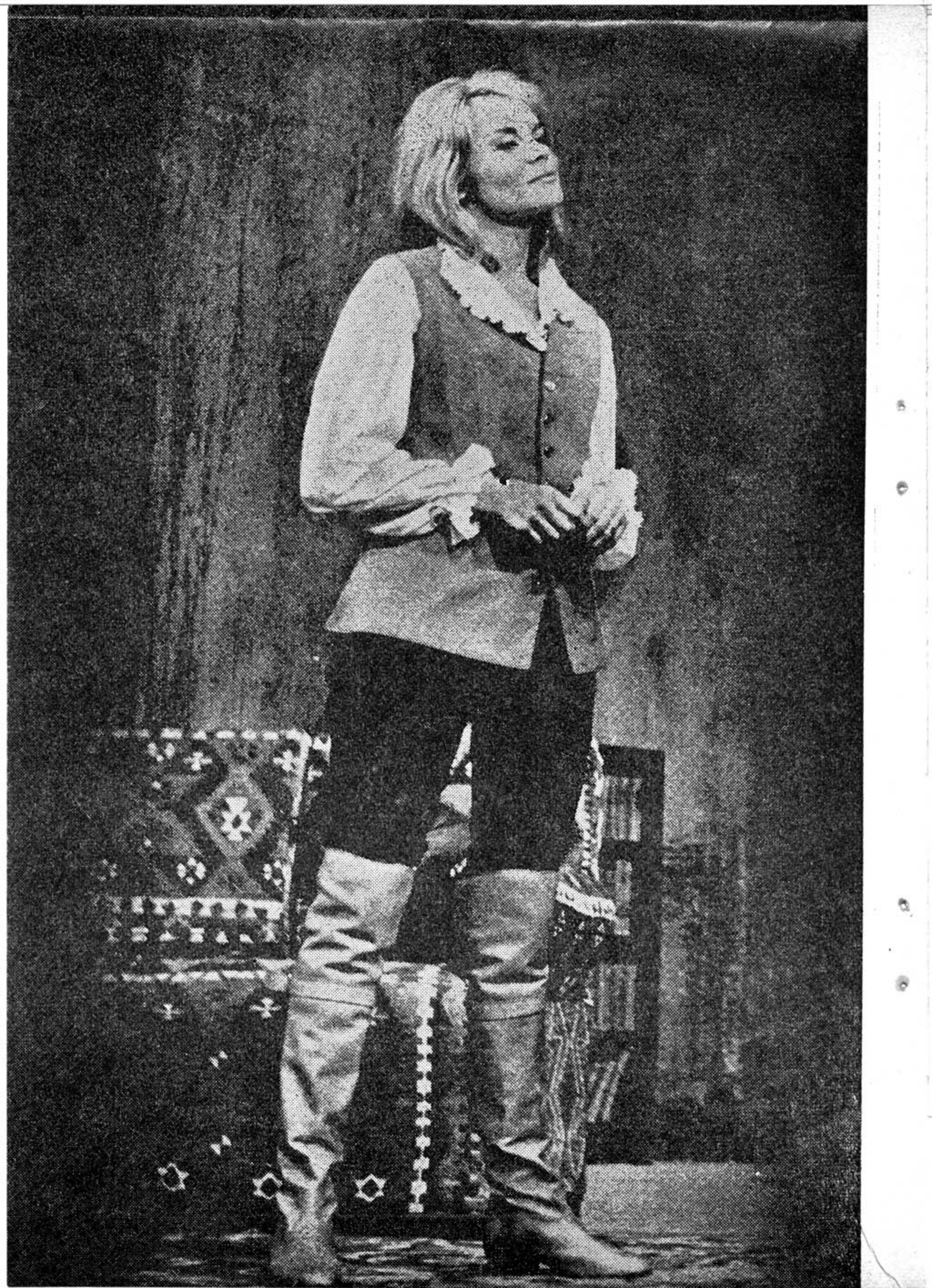
外国雑誌の何気ない記事や写真のなかに、ずいぶん、たくさんさんのマゾヒズムやフェチズムを刺激する記事やさし絵を発見します。ここに挙げたのは、最近の、ふつうの雑誌に掲載されたものばかりです。

まず、「ジュウル・ド・フランス」という、フランスの週刊誌の三月二十六日号から、第一は、その第四ページの漫画です(下図)。調教師と、怒った細君を題材とした曲馬団ものです。作者はテツという名前。恐らく、邦人かその親類または親日家の一人でしょうが、詳しいことはわかりません。現在では、ムチを使う職業自体が、きわめて少ないので、これは、マゾ派の人々にはちょっとギクリとさせる作品です。

第二は、その三十ページごろにある、女優のフランソワーズ・ブリオンの写真です(左ページの写真)。この写真は、太腿までの長靴を示しています。かつて、「すべての旗に背いて」や「剣豪ダルタニアン」で、モーリン・オハラがはいっていた、あの魅惑的な長靴と同様のものです。

ただ、モーリン・オハラの着けたものは、ヒザの折り返しが入り側から縫い付けられていましたが、これは、外側から縫い付けられております。したがって、主としてヒザから上の部分を折り返してはくように作られたものであることがわかります。放逸な表情を見せているブリオンが、じゅうぶんにこうした長靴愛好者に対する魅力を表わしています。





この二ページは、米誌「スタグ」に掲載された「シベリアの女性捕虜収容所に抑留されたアメリカ人」という体験記に付けたさし絵です。強制収容所といえば、ナチス・ドイツ

と思われますが、史実は、同様の施設が帝政ロシア、



ソビエト・ロシア、アメリカ、南米諸国、中国および日本にも厳存していた事実を示しています。これは、帝制ロシアにあった強制労役キャンプに追い込まれた米人アレックス・ステイガーが、所内の女囚アンナとともに脱出し、アメリカに帰った事件を扱っています。彼らは一九〇四年ニューヨークで結婚しました。一九三九年にアンナは病死し、一九四二年ステイガー



は、リバティ型船舶の船長として、軍事物資を輸送中に、ナチス海軍のため撃沈され、船と運命をともにしました。

上の写真は、手カセ足カセをはめられたステイガー。彼は、この格好でトムスクまで八〇〇マイルを歩かされたと書いています。下図は、看守に怒鳴りつけられながら、粉白をひかされるアレックスとアンナ。左上は、看守たちにムチ打たれるアレックス。その下はモンゴルの逞しい男とムチの叩き合いをさせられるアレックス。彼らは、一九〇二年五月一日、ウラジヴォストック港外まで泳いで日本船アオイ丸に救われたのでした。



このページは、同じく米誌「バートルフィールド」に掲載された、ソビエトの女士官キーラ・ペトロフスカヤの手記に付けられた写真です。
「ロシア女兵の戦場日記」と題したこの短い手記は、写真として大変珍しいものを挿入しています。

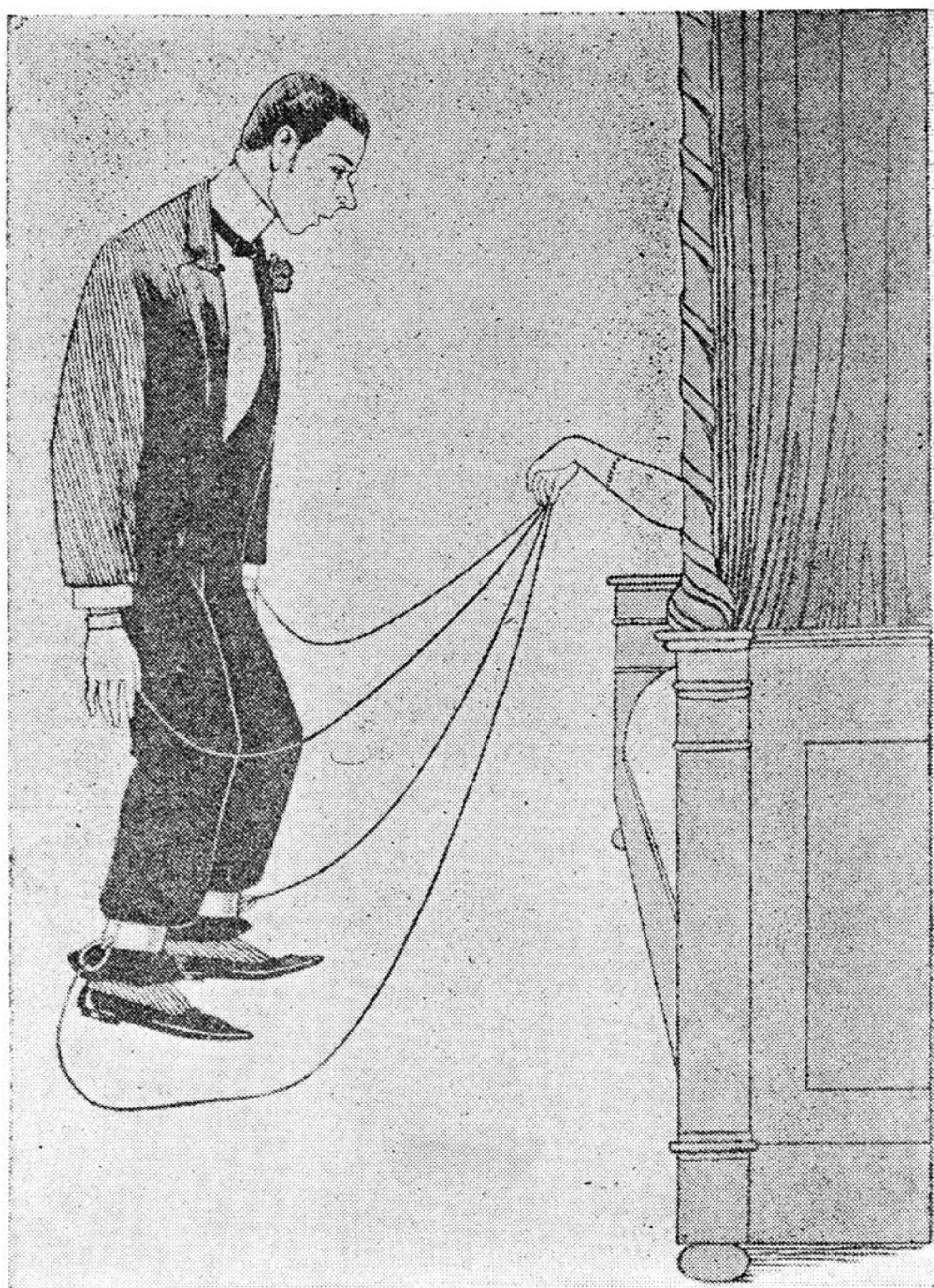
は、一〇〇人のドイツ兵を殺してロシアの村に突入する女兵（上と中の左端、下の中央）です。
下の写真は、筆者キーラの普通写真と、その上は軍服姿です。
女兵、女士官が、マゾヒストの憧れの的になるというケースは、割合に多いのです。







の ぞ き——「ちょいとした眺めじゃわい」



あたしのペット——「こっちへいらっしゃい」



油ランプ (ドイツのルネッサンスの銅器)

譚奇俗風

恋虐呪縛特集・10月号

セックスをはかる計器

西尾年丸

“愛の中毒”ということばがある。麻薬中毒のように、愛に中毒したということである。それは、自由な雰囲気からかけ離れて、なにか苦行といったようなものを考えないでは成り立たないというニュアンスを持っている。

だが、愛情が強いか、欲望が激しいとかいっても、それは、どこまでが正常で、どこから先が病的であるかを決めるとなると、なかなか容易なことではない。それは、愛情の方向が、異性に向かっているか、同性に向かっているかを判断することさえ、時によっては、むずかしいように、その程度を決めるのは、まことに容易でない。

性欲過剰者を例にとってみよう。彼らは、いつも性欲が高まっている状態にある。つまり、性的緊張が解けたあと、すぐまた性的欲望が燃えだす性質をもっている。だが、この場合でも、相手が、それに応じられる体質のものであれば、トラブルは起こるまい。となれば、これを正常でないと一概にきめつけることには、若干の問題が残される。

メッサリーナやファウスティナのように、生涯を性の波にたどった女性もいれば、ドン・ファンやカザノヴァのように、生まれつきの好色家もある。

そうかと思うと、画家のアドルフ・メンツェルは、一生涯ただの一度も女に接したことがなく、それどころか、性的な愛情というものを、かつて感じたことがなかったと、その遺言状で明らかにしている。

こうなると、体温計で体温をはかり、血圧計で血圧を測定するように、性欲の強さをはかるメーターがあったら、正常、異常が一目でわかって、さぞ便利なことであろう。



特集 サディストの群れ

サディズムとは・言うまでもなく、フランスのマルキ・ド・サド侯爵の生活や著書の傾向から、クラフト・エービングが名づけたものである。そして、性欲の相手方に、精神的または肉体的な苦痛を与えないと、じゅうぶんな性的興奮を満足できないものがサディストである。家庭などでよくいう「暴君」ということばも、それが日常生活のマンネリズムを打破する意味合いの程度なら好ましいが、他人にまで迷惑を及ぼすにおいては論外である。だが、世の中には、もっと害毒を流すサディストもいる。社会秩序を守るためには、それらの実態を極める必要もあるう。

残虐なるサディストたち

大 達 欣 治



モーレツの筆のサディスト

キリストの像に興奮する

度はずれて強い性的情熱をもった人は、積極的で、ある場合は荒しい言動に出ることが多いが、いつもそうとは限らない。むしろ、自分の愛する人の前に出ると、仕掛けられた器械のように、一挙手一投足、その意のままになるものもある。ここに、サディズムとマゾヒズムが生まれるわけだ。

つまり、性的な感じが、いつも、からだの苦痛を伴わないと起らない状態をサディズムとマゾヒズムの名でよぶようになったのである。命名者はクラフト・エービングであった。

だが、これに対して、この名称は、合理的でないとして、シュレック・ノットツェンクは、アルゴラグニーという名をつけた。これは、ギリシャ語で、痛みと快感をつないだことばからきたものである。そして、積極的アルゴラグニーと消極的アルゴラグニーとに分けて、それぞれを、サディズム、マゾヒズムに相当させた。

元来、男性が女性を独占するということは、彼らにとっては、いつでも、肉体的な迫害を意味する性的行動にほかならない。これを先祖返りの暴力の名残りとしたのはロンブローゾだが、ロベルト・ミュツラーは、内分泌の異常な亢進によるとしている。

たしかに、性欲の方向の問題は別として、その強さが、ホルモンの多い少ないによるという解釈は、常識である。

ところで、それが、病的であるということは、性的行為に伴って残酷とか、肉体のしいたげとか、苦痛とかが与えられる場合をいうのである。キッスして相手を食いやぶる、つねる、ひっかく、首をしめる、それが高ずると、相手に重い傷を負わせるようになり、果ては、淫殺つまり淫楽殺人という結果にもなりかねない。

また、実際にそこまで達しなくとも、残酷な場面を頭に思い浮かべて、そこにだけ性的なゆきすぎの満足を見ようとすることも、よくある。観念的なサディズムである。これが、エレクトションやエジヤクレーションにまで達するのが特色である。

本人自身にとっても、どうしてそうなるのか、まるっきり説明することが出来ないが、キリストの十字架の像を見ただけで射精するものもあるし、残酷な戦争の場面や屠殺のシーンを見て、いきなりそうなるものもある。もちろん、小説とか、手紙とか、絵画、写真、彫刻などによって、欲望を高められるものも少なくない。

淫殺者の素質

だが、最も残酷な最後の形は、淫殺つまり殺人淫乱症であることは、いうまでもあるまい。そのなかには、本来の意味でのサディズムの極致からきたものと、そうでないものがある。いいかえると、殺人の動機が別なところにある場合である。

ベルリンの子供殺しとして知られたハイデルとリッテル、ちっちゃいルチー殺しの男、大戦の直前に起こって、今もって身元のわからない婦人が、シュプレー河を渡る小さな汽船のなかで殺された事件など、淫殺とは思えない節が多分にある。

すなわち、相手を殺したり、死体を細かくしたりしたからといって、必ずしも本当の淫殺とは言えないことがあるのだ。被害者に顔を見られたとか、あとで訴えられるのを恐れて殺人を行なうものもあるからである。

だから、淫殺とは、殺人の直接の動機が異常な性欲に基づく場合だけを言うので、性行為の代償としての殺人ということになる。だから、本来の淫殺とは、多くの場合、性行為を伴わず、そのかわりとして、殺人したり、死体を切りきざんだりするわけである。

彼らは、もともと、淫殺を行なう素質を持っているものが多く、素質を持っていないものが行なうのは、まず考えられない。

そこに見られるのは、いつでも、病的精神であり、性格の破産であり、人間性の逆を行く退行精神にほかならない。とくに淫殺者には、テンカン、ないしはその素質をもったものの多いことは、精神病理学で指摘している点である。

血を見て燃えあがる

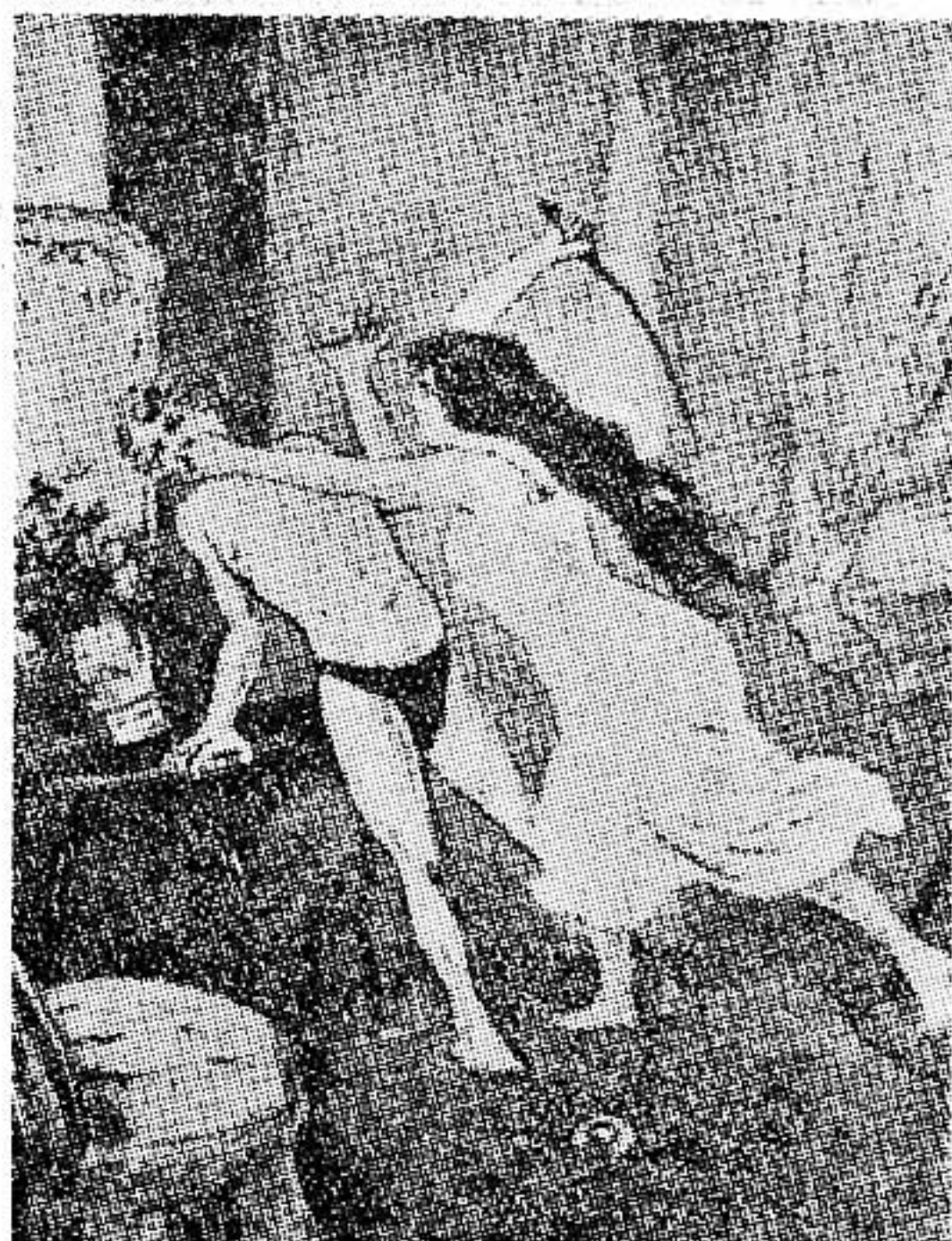
ルードウィッヒ・クラークという男があった。評判のいい、おとなしい工員であった。だが彼は、倒錯した性欲の持ち主であったのだ。一九〇〇年の八月から、翌年の四月にかけて、十人の女性を毒牙にかけ、小刀その他の凶器で、主として彼女たちの下半身に重傷を負わせた。しかし、殺人は一回もなかったという。

また、ある女に殺された男は、くびをカミソリで深く切られたうえに、陰茎、陰嚢をひっくりくるめて鋭くえぐり取られていたという。だが、そういった性的器官にはなんの変化も与えることなく、それ以外の場所がねらわれることもある。血を見て絶頂感を覚えるサディストたちである。

だから彼らは、いつも、相手のくびをカミソリでねらうクセがあるのだ。

また、相手のくびをしめて、その苦しむ有様を見たとき、突然、燃えあがる絶頂感に襲われ、いつまでも、その状態をつづけようとして、ヒモとかオビのようなもので、窒息死に至らしめるものもある。

また、こういう例もある。客が帰ったあとで、ある売春婦が窒息して死んでいた。見ると、性器が焼かれている。犯人が、偶然、マッチに火をつけたためであるか、それとも、邪魔になるものを焼きはらって内部をうかがおうとしたのか、はっきりしなかった。これは、動機がわからないので、淫楽殺人とは決め難いが、残酷なことではある。



女のサディスト

あの人がこんなことを

性病理学的にみると、こういった連中のやることには、だいたいい、決まった一つの型がある。たとえば、メスなどで刺すものは、たいていこの方法を使って、相手をなぐるようなことはしない。また、靴で蹴る人間は、メスで切るような真似はしない。

彼らは、どうも、はじめに決まった型が使われると、それに固定するようである。それが、この世界に住む異常性格者の常であるようだ。

サディストには、ふだんの言動にそれらしいところがあると思うのは、認識が足りない。彼らは、性以外のことでは、たいていはあ

たりまえの人間である。おとなしい人もあるし、無口でやさしい人もある。いたって朗らかな人もある。

だから、あの人があんなことをするなんて想像もできない、ということが、よくある。

いわば彼らは、セックスということだけが、一般の正常な人とつり合いがとれないのである。この点だけで、彼らは、社会に適応することができないのだ。

こういった反面、彼らが、自分でも知らないうちに、ある一つの方向に向かって、その性向を、不当に補っていることのあるのを、われわれは知らねばならない。これを過剰代償というのだが、こういった人々は、やさしい面を、残酷な面で清算し、あるいは、その反対の意味での清算を試みる人々である。

つまり、その性向を、政治的とか宗教的な暴力行為をすることに向けかねないのである。そしてまた一面、性的な破壊行為は、いろいろな対象に向けられる。あるときは死んだものに、あるときは彫刻などに、そしてまたあるときは着物の一部というふうに、限りなく相手を求める。人体の彫刻をこわすのは、たいていは、性的な動機から来たもので、サディスチックな興奮を伴ったアンチ・フェチシスチックな場合が多い。

それは、性的な不快の観念が、暴力で、それらの対象を取り除こうとする欲求ないし願望と結びついた結果である。

だから、立像のものに対する破壊行為は、単純な彫刻フェチシズムというより、より深い身体的、心理的なサディズムと結びついていると考えるべきであろう。だから、ひと口にサディストといっても、種類は多いものである。



あるサドやぐざの告白

本郷寅夫

猫殺の章

この稿の談話者本郷寅夫（仮名）君は、私と親交のある人で、かつては神田界限で名の通った不良少年と青年であり、いくたびか傷害沙汰など起こしたが、今では、その社会から足を洗って、素っ堅気になっていることを、まずおことわりしておく。

私が、本郷君を買っていることは、彼はサドではあるが、「サドの美学」ともいうべきものを、知っていることだ。また、ヤクザではあったが、「ヤクザの哲理」——へんな言葉だが——ともいうべきものを、一本筋をとおしていたことだ。そのことは、この編を読めばおわかりになることと思う。この稿は、私が、彼から酒間のうちに断片的にきいた話や、この目で見たことを、記憶をたよりに一つにまとめたもので、そのため文章的の粉飾はあるが、骨子はナマの事実である。

（かびや・かずひこ付記）

おれが今のようなサドになったのは、考えてみれば、おれが人並みはずれた「怪力」に生まれついたことが、一つの因子となっているようだ。これはけっして自慢でいうのじゃない。事実おれが十歳前後のころ、M新聞が、

「希代の怪力児童現わる」

というような大みだしで、おれのことを記事にしたことを、記憶している人があるかもしれない。

だが、こんな「怪力」は、幼少時から、おれを幸福にするよりも、不幸な立場におとしいる場合が多かった。

家の近所でも、小学校でも、同年配の子どもたちが、おれを恐れて遊ばないのだ。もっともおれは悪童だったから、友達たちをさかにいじめまわしたことも、その原因だったのだろう。

遊び友達のないおれは、しだいに、自分のまわりに、みずから檻をつくるようになった。そして、ひとりきりで遊び楽しむことをおぼえるようになった。絵をかくことを好きになったのも、そのころからだ。

たしかおれが九歳の時のことと覚えている。季節は忘れたが、ある日の夕方、庭の隅で、立ち木に石を投げて遊んでいたおれは、ノドの渇きを覚えて、母屋の前の井戸端へかけていった。

と、井戸のわきに、見たことのない一匹の野良猫が、とらえたドブズミをもてあそんでいたが、走って来たおれを見るより、さっとネズミの背をくわえながら、首を低くして、おれに睨むような目を据えた。

おれはそれまで、ネコがネズミをいじめ殺すさまを、たびたび見たことがある。

半死半生にしたネズミを、ネコは足うらのさきでちょいとつついて転がしたり、噛みついてみたり、じっとようすをうかがってみたい、好きほうだいに玩弄しながら、あいてが全く息の根をとめてしまふまで、遊び戯れる。そのときの、いかにも恍惚とした、たのしげなネコのひとつひとつの表情。

そうしたさまを見るのが、おれはひどく好きだった。ネコというけものは、人間の顔色を読みとるのが巧みで、おれがやつらの楽しみ、邪魔をしないと知ると、ゆっくりと自分の嗜虐にふけるのだ。おれもじっくりと尻をおちつけて見物することができたわけだ。

ところが、いま、このうすぎたないドラ猫が、おれのそうしたところも知らず、スワといえは逃げる態勢を構えながら、おれの様子をうかがう金いろに光る目玉を見たとき、おれはムラムラとした。

「こいつッ」

いきなり、おれは、掌ににぎっていた数コの小石を、ネコ目に向けて投げつけた。

その一つ二つがネコの軀に当たった。ネコはちょっとひるんだかにみえたが、それでもくわえたネズミをはなさず、さっと逃げだした。おれはすぐ追いかけた。追いかけるがらおれは、路上の小石を拾ってはネコに投げた。ついに一つが、ネコの頭の鉢のあたりに当たったらしく、ネコはそのままうずくまった。

ちかよってみると、ネコは死んでいなかった。軀が動けなくなっただけにもかかわらず、ネコは、おれに向かって、ふっと脅しの息を吐き、歯をむきだした。

おれは怖れを感じた。が、怖れよりも、あいてにとびかかっていた衝動のほうが強かった。おれはネコの上に覆いかぶさるようにして、その柔らかい軀を両手でつかみあげた。ネコは抵抗し、おれの手を引っ掻きまわした。

が、おれは掴んだ手をはなさず、ネコの軀をドンと下にずりすべらした。手がネコの頸のところにとまった。おれはその手に満身の力をこめて握りしめた。

瞬間、おれは、背筋を走る異様な快感に、おもわずぶるぶると身震いした。おれの手から、ネコの死体がどすんと地におちた。

尻打ちの章

親父とは早く死に別れ、気丈なおふくろがひとりで神田の店（料理屋）を切り回していた。庭が広く、青いものがあるので、この東

京の下真ン中にも、田舎でしかみられないような、いろいろの虫ケラが舞いこんで来た。

それでおれは、それまでにも、カマキリをこなごなに寸断したり、ヘビを口から真二つに引き裂いたり、カエルに石をぶつけて打ち砕いたり等々、そんなことをしばしば行なっていた。

このくらいは、ふつうの悪童でも、誰でもやることだが、家でのおれのこうした悪戯は、温和な兄との対照上、いっそう目立つようであった。

おれの破壊欲は、猫殺しのあたりから、同じとしごろの悪童たちのそれとは違ったかたちになって、ひととき残酷味をおびたまま野立っていった。

その対象も、虫ケラよりは図体もあり、量感もある家畜類に向けられ、近所隣のニワトリを引くとらえて、生きながらにその首を振じ切ったり、犬やウサギを捕えて来て、くびり殺したうえ、目玉をえぐりとったり、——そんなことをするようになったのだ。

そしてそのたびに、おれの身内に瞬間的な異様な快感が伴った。

こうしたいずらを、おれは人に知られないようにやったつもりなのだが、いつか誰かに目撃されたとみえ、たちまち近隣の評判となった。殺された家畜の飼主たちが、おれの家にねじこんで来た。女丈夫といわれたおふくろも、さすがにおれの乱暴には手を焼いたとみえ、男の監督者がいる家庭におかなくてはだめだと思ったのか、代々木の親戚の家におれを預けることになった。

おれの十三歳の時だった。

預けられた家の主人は、病院勤めの医師で、そのころ四十がらみ、二十数貫からある大きな軀の人であった。また主婦はそれと対蹠的

に五尺足らずの小柄、しかしおれのおふくろのように、人一倍気の強い人だった。おれはかれらを「おじさん」「おばさん」と呼んだ。

おじさん夫婦には、おれより三つ年下のひとり娘があった。フミコといって、色白の可愛い顔であったが、なかなか茶目だった。フミコは初対面から、おれに親しんで来た。友達のないおれは、彼女を唯一の遊び相手とするようになった。

生まれてはじめて、自分に親しくちかづいて来る友達、しかも異性の友達を得て、おれの破壊欲もだんだんと鎮まって来るかのようにみえた。

すると、その年の夏のある日のこと、フミコがなにかのいたずらをして、母親に折檻された。

その場に居合わせていたおれは、その折檻のさまを見てしまったのだが、それはフミコのスカートのうしろをまくりあげ、パンティ―をずりおろして、はだかの臀を平手で打ち叩く、スパンクなのだ。後年おれが好きになった詩に、ハイネの「チトロニア」というのがある。

むじゃきのつもりで悪いことをして

泣いている可愛い娘よ

裾はうしろにつりあげられて

そこにちいさい

なんともいえず可愛く

バラのようにもみえるし

ユリのようにもみえる

黄色いスミレのようにもみえる

それが茶色に



青く

ぶっているのが婆さんだ

老婆が少女の臀をスパンクしている図だが、こんなことを詩って
も、さすがに抒情詩人といわれるハイネだけに、美しい少女の、い
みじくもまた美しいヨーニの見えかくれする瞬間々々の印象が、じ
つに鮮かに捉えられている。

が、それは大人になってからの後年の感懐で、そのとき十三歳の
おれの目をとらえたのは、ヨーニのなんのとうののではなく、フミ
コの真っ白な臀の肉塊そのものだった。その肉塊が打ち叩かれてい
ること、そのことだった。

おれはおもわず息をのんで、その体部^{からだ}を凝視した。自分もあの臀
にふれてみたい、あの臀をおもいきり撲^{たた}ってみたいという、激しい
衝動に駆られながら……。

そしてその機会は、思いのほか早く来た。

精の虫の章

それは、それから十日ほど経った日の暑い盛りの午過ぎ、三時こ
ろでもあったろうか、おれがセミ捕りから帰ってみると、家の内
におばさんもフミコも姿が見えない。

おれがそこらじゅうをドタドタと歩いていると、

「寅ちゃん、ここよ。お風呂場よ」

とおれを呼ぶフミコの声が聞こえた。

おれは浴室へ走って、その扉を開いた。フミコが水風呂の中で、
バチャバチャと水いたずらをしていた。

「お婆さんは？」とおれはきいた。

「ご用達し。夕方に帰って来るわ。……だから、あんたはいんなさいよ」

そういつて、フミコは小さい妖婦のように、ひみつごとを誘うような微笑い方をした。

「よし、はいる」

おれはその場で裸になって、浴室へとびこんだ。

「さあ、はいんなさい。気もちがいいわよ」

フミコが浴槽をまたいで、出て来た。瞬間、彼女のまるっこい臀の双丘が、おれの目を強く射抜いた。

もう矢も楯もなかった。

おれはいきなり、フミコの上体を横抱きに脇の下にかかえると、上に向けたその臀を、空いている手でぎゅっと握んだ。

「いやよ、寅ちゃんたら……」

フミコはしきりに身をもがく。

が、おれはかまわず、ゴムマリのような堅く柔らかい彼女のでん部を、ピシャピシャと音をたてて平手打ちをした。

と、突如、じつに突如、激しい勢いと速さで、おれのからだから迸り出たものがあった。と見るや、そのものは浴槽をこえて、三メートルほど先の窓ガラスにとび、ひらたい虫のようにはりついたのだ。

おれはびくくりした。なにがなにやらわからなかった。おれはただあっけにとられて、そのほうをみまもるばかりであった。

おれの体内にはこのときすでに、男としての機能が、生々躍動しはじめていたのだ。後年、この一瞬の出来事を思いだしたとき、お

れは厳肅な性の事実で脱帽せざるを得なかった。

おれが手をやすめているうちに、フミコはすばやくおれの軀からすりぬけると、

「バカ！ バカ！」といいながら、おれのからだじゅうを無茶苦茶に打ち叩いて来た。

が、おれはもう、すこしも彼女に抗わなかった。

このことがあってから、意外にも、フミコのほうから、お婆の不在をみはからっては、おれにいっしょに風呂にはいることを誘うようになった。そして自分のからだをスパンクしろというように、おれに水を向ける。

このような、おれとフミコとの秘密のスパンク遊びは、その翌年の春、つまりおれが小学校をおわって、神田の家へ戻るまで、かわることなくつづけられた。

そしてその間、ただの一度もそのことを家人に発見されることがなかったのは、茶目だがかしいフミコが、平素そんなけぶりを露ほども見せなかったゆえもあるうが、そうした大人のうかつさかげんというものが、おれにはひどく嗤われてならなかった。

あべつく責めの章

一足とびに六年後にとぼろ。二十歳の時、おれはM大を中退して、いわゆるヤクザの社会に足をふみ入れた。

その二、三年前から、神田界隈の不良っ子とはつきあいがあり、かれらの溜まりの喫茶店などを根城に遊んでいたが、その年にこの土地で名うてのヤクザ荒井慶次（仮名）通り名荒慶の弟分となって、

本格的に——もおかしいが——この世界に首をつっこんだわけだ。

おれのサドと反抗性、それがヤクザの世界で生きるに適當していると思つて、フワフワとはいってしまったのだが……。

それからまもなく、このサド性から、おれは殺人未遂を犯してしまった。それは、なにか気のおちつかない生ま暖かい夜の十一時過ぎ、おれは、救世軍本部の横の通りを九段下の下宿のほうへ向かつて、よろよろと千鳥足で歩いていった。

首から下は酔^{キスグレ}っていたが、頭は冴えていた。両側の家々はほとんど灯が消え、街路にもチラリホラリしか人影がない。

と、東洋キネマの前あたりまで来たとき、すれちがった若い男女連れがあったが、瞬間、ちらっとおれの顔を見た女の口から、くすくすと失笑の音が洩れたのを、おれはきいた。

二人はそのまま行き過ぎながら、なにかひそひそと耳打ちしあっている風だったが、いきなり二人同時に爆笑の声をあげた。

——やつら、たしかにおれの顔を嗤^{わら}やがった。

と思つたとき、おれは、総身の毛孔という毛孔から、忿^{いかり}りの炎が一時にふきだすのを覚えた。

「おい、待て！」

叫びざまに、おれはそのアベックの背後によろめいたが、はやくも二人のえりがみをむずと掴んだ。

「なにすんのよ」

スケのほうが、きかぬ氣らしい調子でそう言いながら、おれの手を払おうとしたが、おれの忿りに震える形相に気づくや、ひい——と悲鳴に似た叫び声をあげた。

おれは二人をずるずるとひきよせると、力いっぱい二、三度鉢合

わせさせた。もうおれの身内には、嗜虐欲が湧きたっていた。

フラフラとしている二人。その男のほうの腰のあたりを、おれはドンと蹴上げた。男はよろよろとよろめくと、そこにあったゴミ箱にぶつかり、いっしょに音をたててひっくりかえった。

おれはぐいとスケをひきよせた。十八、九にもなるのだろうか、ひ弱な感じのからだつきだ。

細い頸はしわ一つなく、みずみずと脂^{あぶら}がのっていた。おれの手は、憑^つかれたもののように、その頸にかかっていた。火を点けられた破壊欲が、嗤^{わら}われたことの報復の念とからみあって、音をたてんばかりに燃えあがった。

「はなして……くるしい……」

女はからだをバタバタさせながら、おれの手をふりほどこうとする。が、弱々とした女の抵抗など、おれにはもののかずでもない。あいてのノドを扼^ぎしていた腕にぐいっと力をいれた。

もがき苦しむスケ。おれはぐいぐいっと締める手に力を加えていく。目はあいての苦しみ悶える表情を、じい——とむさぼりなめながら……。

女の抵抗がだんだんと弱まり、ついにその軀から全く力が脱けた。おれの手から、女のからだがぐらぐらっと崩折^{くずれ}れおちた。

——殺^やってしまった。

はじめてそう気づき、おれははっとなった。

殺すつもりではなかったのだ。おれはたしかに破壊欲は強いが、けっして快樂殺人^{ルストキル}ではない。いままでいくたびかの喧嘩でも、あいてに傷害を加えたことはあったが、殺したことはない。人を殺すことは、おれの本義に反するのだ。

おれはあわてて、女の上にまたがって人工呼吸をした。まもなく、さいわいに女が息を吹きかえした。ひょいとかたわらを見ると、いつのまに逃げたのか、連れの男の姿がみえない。

——野郎がガチャ公でも呼んで来ると、事めんどろだ。

そう感じたおれは、女をそのままに、急いでその場を立ち去った。

強 吻 の 章

おれの嗜虐の対象は、もちろん女がよく、そして体部的にいえば、女の頸部かでん部にしぼられるが、その時の状態で、ほかの部分に向けられることもある。

戦後二、三年経ったところのある冬の夜、おれは総武線上り電車の客となっていた。あのころの電車だから、小岩から乗るときから混んでいたが、秋葉原からまた下カドカとおおぜい乗りこんで来たので、押すも引くもできぬくらいの混雑。

おれの鼻の下に、手入れのゆき屈いた女の髪があった。ぷんと香油の匂い、はでなチェックのマフラー、洒落たシヨルダー・バッグ。女が顔を上げた。甘くへりオトロップの香、綺麗な顔だ。二十二、三。肉付きのいい細面。かなり太い眉。切れ長の目が魚のように光る。薄い鼻が冷酷そうだが、しかし、鼻翼のあたりに、ねばっこい淫蕩のかげをひそめている。わりあい大きな口、ぼってりとした感じのその唇が、とくに印象的だった。

女の背後にいたサラリーマン風の若い男が、瘦せた軀をゴソゴソ動かした。と、女はとがめるような目でふりかえった。横で商人風の中年男が、荷物をもった腕を上げた。女はきつとなってそっちを

睨む。おそろしく排他的な女だ。

ガタンと電車が揺れた。はずみで、立っている乗客の軀が、急角度に傾いた。前にいた女は反りかえり、その上へおれの軀のしかかる。ルージュの紅唇がおれの唇とすれすれになった。

と、とたんにおれは強くあごをつかれた。女の手ひらが、おれのノドを押えている。

けっ、くそっ！。瞬間、おれの体内で、このスケにたいする攻撃欲、サド欲が爆発した。

女はお茶の水で電車をおりた。おれもすぐあとに尾いた。女は聖橋寄りの改札口からホームを出ると、大学街の暗い道を急ぎ足に歩いていく。

夜もだいぶ更けているので、人通りはなかった。舗装路をふむ女の靴音が、闇の中にリズムカルにひびきわたる。

女の姿が日大医科の横を左に折れて消えた、と思うや、とつぜん「あ……」という叫び声。女の声だ。おれは駆けだした。

曲り角に身をひそめて様子を窺うと、今のスケが一人の男に軀をつかまれている。男の片手に刃物らしいものが光っている。あのドスの握りようじゃ、ネス公(素人)のタカリだな、とおれは思った。

男はドスが無器用に女に擬しながら、さっとバッグを奪った。つぎにオーバーを脱がす。時計、マフラー、手袋と手当たりしだいにひたたく。

おれは見えていてムカムカして来た。なんて小汚ねえ仕事しやがる。今日びのぬすつとと来たら、みんなこれだ。ちっとでも金目の物なら、洗いざらいひっさらおうとしやがる。我慢がならねえとおれは思った。



おれはぱっとその場にとびだした。男の頬ゲタをガンと殴りつけた。よろよろっとよろめくあいての顔に、間髪をいれず、強くメリケンをいれた。相手はあっけなくのびてしまった。

あたりに女のオーバーやバッグが散乱している。おれは女にそれを拾わせ、そして着けさせた。

女はじっとおれの顔を見ている。おれはいきなり、女の横ずっぽをはりとばした。はっとおどろく女の軀をがっきと抱いた。

先刻、電車のおれの唇を避けた印象的な紅い大きな唇が、目の前にある。おれの唇が鬼となって、あいての紅唇にとびついた。粘着力のある女の唇だ。それをしぼるように吸いあげる。また咬んで口の内へ引きこむ。征服の快感。そして嗜虐のこころよい痺れ。

さいしょ、しきりにさからっていた女の抵抗が、まもなくやんだ。と、女の唇がおして来た。おれの頸に女の腕が回って来た。

おれは、女の軀を強くつきとばした。助けてやった代償というのか？ 感謝のしるしとでもいうのか？ まっぴら、まっぴら、そんなのごめんこうむるぜ。おつりはいらねえよ。あんまり安く見るナ、おれはサドなんだ。

あっけにとられている女をあとに、おれは坂のほうへ歩きだした。

男責めの章

戦後もずいぶん喧嘩をやった。もちろん喧嘩の相手は男だが、男だって時と場合では、おれのサドの対象とならないことはない。

まだ、たくさんのG Iが、東京の町々をさかんに横行しているころのある夏の日の午後だった。

おれは自分の家の焼け跡にたてた小さなブラック小屋の内にねころんで、雑誌を読んでいた。すでに女房ももらっていて、赤ン坊もできていた。

と、家の前に自転車の停まる音がして、二十がらみの店員風の若者が入り口の前に立って、おれの名を呼び、お願いがあるのですが……という。なんのお願いだときくと、M町のK堂スタジオという写真屋だが、いま脅しが来て困ってるのだが、ごめいわくでも来ていただけないかと遠慮がちにいうのだ。

警察の用までおれにもって来やがると思ったが、おれは立ち上がってシャツを着た。

「およしなさいよ」と女房はとめる。おれが行けば喧嘩になることはわかっているからだ。

が、おれはきかないで、戸外に出ると、若者の自転車を借りて、K堂スタジオへ突っ走った。

店内にはいっていくと、その家の主婦らしい二十四、五の女が、まぢかまえていた顔で、おれに近よった。

「ほんとうにごめいわくなお願いしてすみません。たちのよくないヨタモノが来てるんでございますよ」

二階をあごでさしながら、若い主婦は声をひそめてそういうと、カッポー着のかくしから小さな紙包みを取り出した。

「あの、どうかこれをあの人たちにやって、帰ってもらうようにはからっていただきたいんですが……」

「金か？……すると、なにが弱い尻でもつかまれているのか」とおれはきいた。

「いえ、そんなわけじゃないんですが……」

といって、主婦は事情を説明したが、それによると、この家の主人が、ときどきGIに頼まれて、かれらの撮ったパンスケの写真の焼き付けをやってやるのだが、そのときに何枚か焼き増しておいたものを、ほしいという人に譲った。それをどこで手に入れたのか、いま二人のヨタモノが持って来て、写真の女はおれのスケ（情婦）だ、他人のスケを見世物にしやがるといいがかりをつけていると、こういうのだ。

おれは主婦の話をききながら、GIの撮った写真というのはヤチネタ（Y写真）だと読んだ。それで警察に届けず、おれのところへ解決をもちこんで来やがったわけか……。

「そんな金はいらねえよ、おかみさん」

そう早口にいうと、おれは土足のまま通れる階段を昇っていった。

二階は撮影室らしい広い部屋で、そこに丸テーブルを間にして、三人の男が対座していた。一人は色白の小でっぴりした三十一、二、困じ果てた顔付きからみて、この家の主人らしい。ほかの二人はいずれも二十二、三、どこから見てもグリーン隊然としたゲスな顔付き、身なりだが、他土地の者なのか、おれには見覚えがない。

主人らしい男が、だまっておれに頭をさげた。おれはそのほうへは一瞥を投げたまま、グリーン隊の若者に近よると、

「おい、つまらねえヤマ（犯罪）ふまずと、早く帰んナ」

言うのと、ヨタモノ二人は、じろっと睨みつけるような目でおれを見たが、すぐ一人が、

「なにっ、ヤマかヤマでねえか、わけもわからず、てめえこそひっこんでろ」

反撃して来た。かれらに通有の強がりなのだ。

このうえは強行手段でいかなければいけない。おれはかれらをつまみ出そうとした。と、相手はケンカなれているとみえ、二人いっしょに立ち上がるより速く、おれに近いアロハの男が、さっとパンチをとばして来た。おれはすばやくその手をとらえると、ぐいと手もとに引いた。相手がカエルのように床に這った。

白のYシャツをきたほかの一人は、おれの氣勢に気押されたか、すっとうしろに身をひいた。その胸元へ、おれの拳が一直線に走った。相手の小柄な軀は、モロにうしろへひっくりかえった。

おれはオロオロしている主人にいて、ナワを持って来させると、ヨタモノ二人のシャツを引っばいだうえ、双方背中合わせにナワで縛りはじめた。

ぎゅつぎゅつとナワを締めつけるたびに、かれらの若々しい弾力のある膚にナワがくいこむ。二人は、苦しさに息もつけないようすだ。おれは、からだじゅう痺れるような快感に口元をゆがませながら、なおも容赦なく、締める手を強めていく。

と、横からおれの手をおさえる者があった。この家の主人だ。

「そんなことしちゃ困ります。そんな乱暴しちゃ……」

そう言って、しきりにとめる写真師の顔を、おれは無言で凝視した。のっぺりとしたその白い顔、卑屈な表情。いきなりおれは、その頬ゲタを殴りつけた。

「この野郎、そんな風だから、毛唐やチンピラにナメられるんだ。……兵隊やパンスケの機嫌とりに、やつらのロクでもない写真なんか、れいれいとウインドに飾りやがって。……もっとシャンとしろ、もっと……」

さけびながら、おれはなおもびーんびーんと写真師を殴りつけ

る。あいての顔には血がのぼり、みるみる紅潮して来る。

が、相手はいっこうに反抗して来ない。それをじっとこらえているといふよりも、すっかり怖じけづき、縮みあがっている表情だ。それが一層おれをいら立たせる。おれは相手に反撃してもらいたくない。強烈に反撃してもらいたいのだ。が、相手はその片鱗すらも示さない。おれは忿りの感情と嗜虐の快とを身内に混淆させながら、ますます強く写真師を殴りすえた。

(かびや後記) 本郷寅夫君のサドの告白はまだまだたくさんあるが、ひとまずこれでとめておく。冒頭にもいったように彼は今ヤクザの社会からはなれている。つまりは戦後のヤクザにあいそをつかしたのだ。

が、もちろん、彼の体内に根深く巣食っているところのサドの性向がなおろうわけがない。しかし今の彼はそれがある方法で昇華させている。それは、彼が学生時代、その秀抜な技量を贅えられていた重量揚げを、自宅でコッソリとトレーニングすることによってである。

重量二〇〇ポンドというバカ大きい鉄アレイ、それは径一尺三寸ほどの石塊二つに太い鉄棒をくいこました手製のものだ。それを目と水平のあたりまで差し上げ、あるいは仰向けにねたままで差し上げて、胸の上へ鉄アレイを落下させる。そのとき、彼の堅く盛り上がった胸の上で、鉄アレイがゴムのように弾むのを私はたびたび見た。つまり彼は、こうした自虐の方法によって、体内のサドの欲望を調整しているのだ。ご承知のように、自虐とはサドとマゾを同時に満足させることだ。つまり、サドの本郷君の身内にも、マゾもいくぶんは共棲していることの証左であらう。



ネクロフィリーの男

荒川 太郎

きらめく肉切り庖丁

ホーガン夫人は、夜おそく訪ねてきた彼を少しも怪しまなかった。彼女は、未亡人で、夫の死んだあと、残された経営をうけつぎ、ただひとりの男の子を育てていた。男出入りはないわけではない。エディー・C・エドワード・ゲインも、その相手の一人だった。

一九五四年十二月九日、その夜は、ウィスコンシン州一帯はまっ白い雪におおわれていた。

「マリー、月がきれいだよ。外に出てみないか」

エディーは、さり気なく誘った。

「ほんとに、おとぎの国みたいな景色ね。まんまるいお月さまが、まっ白な雪の野原

をてらして……」

エディーが、人気のない街道に車をとめたとき、マリーは、うっかりしてつぶやいた。

これが、生きているマリーの最後の言葉だった。というのは、そのとき、ブスッとぶい音がして、エディーのピストルが、彼女の後頭部にうち込まれたからだ。

彼は、そのまま車を自分の家に向けた。荒れてはいるが、構えの大きな農家である。

彼は、ランプをつけて、まっすぐに部屋に入ってしまった。ランプを釘につると、ふたたび車へとって返し、マリーの死体を運び込んだ。

彼はひたいの汗を袖口で拭くと、ニッと微笑を浮かべた。

床の上に横たえた死体から、まず静かに靴を脱がせた。ストッキングをとり、スカートも脱がせた。死体を丸裸にした彼は、さも満足気に、一息入れるためタバコに火をつけた。

深く吸い込んだ紫の煙をフーッと吐き出すと、それを直ぐに踏み消した。

それから、死体の足を上に、頭を下にして、天井のはりにぶら下げた。彼女の体は、気味の悪いYの字をかたちづくった。

彼は、肉切り庖丁を、大きくひらかれた肉づきの好い、白い股に向けてふりかぶった——その目は、ギラギラと怪しく光っていた。

夜があけるころ、すべての作業を終わったエディーは、母屋おもやに戻っていった。乱雑

に散らかった幾つもの部屋、その一番奥にただ一と間だけ、きれいに片づけられた部屋があった。

ちょうど、六年前、彼の母が、この部屋で息をひきとったのだ。窓はきれいに磨き立てられ、カーテンもシーツも雪のようにまっ白で、ほかの部屋とは際立った対象であった。

「お早よう、ママ。全部すませて来たよ」

エディーは、空っぽの寝台に、いまでもそこに母がねているかのように話しかけるのだ。

エディーは、ようやく気がおさまったような顔で、自分の部屋に帰って来た。

滅茶々に汚れた室内。そこには、漫画の本と探偵小説、解剖学、防腐法などの書籍が、うず高く積んである。彼は、こうしたガラクタのなかにどさりと横になり、毛布を引き寄せたと思うと、すぐ深い眠りに落ちていった。しかもその顔は、ここ数年間、一度も味わったことのなかった、深い満足感が現われていた。

「ママ、にくい女を殺してやったよ。きたらしい女を、オレはどうとう殺ってやったんだ」

その唇には、楽しそうにほほ笑みさえ浮かんでいた。にくい女、マリーがにくかったというのではない、すべての女がにくい。それは、死んだ母の教えだったのだ。彼は、母の言う通りやったという満ちに満ちているのだった。

彼は、学校では「ママ・ボーイ」といわれ、誰も、男の子らしい遊戯や、いたずらに誘おうとしなかった。そうした人生が、この年まで続いていた。六年前死んだ母の影が、いまだに彼を支配していた。

「おとなしくてよい男。あまやかされて育った母親っ子。能なしで意気地なし」

といったような形容詞はいくらでもあるが、とにかく彼は、世間からは、このような目で見られていた。だから、誰も凶悪な殺人鬼、墓場荒らし、人肉食い、倒錯した性欲の持ち主などとは、思いもよらぬことだった。それゆえに、彼は、このような異常犯罪を十二年も隠し続けられたのだ。

女は悪魔の化身だ

彼は一九〇七年、信心深い清教徒である母親アウグスタと、百姓だった父ジョージとのあいだに、二番目の男の子で、末っ子

として生まれた。四ツ年上の兄ヘンリーは、活発ないたずらっ子で、近所のガキ大将で、暴れまわっていた。だが、エディーは、おとなしく、気が弱く、いつも母の腰にへばりついて、本ばかり読みふけていた。ヘンリーが父の畑仕事を手伝っているあいだも、母は、エディーに、荒仕事をさせることをあやぶんで、外に出そうとしなかった。

父は一九四〇年に、四年後にはヘンリーも、死んでしまった。それでも、エディーは、働こうとせず、農地を切り売りして生活していた。

年ごろになっても、女友達は一人もできなかった。というより、彼のほうで、女の子に近づこうとしなかった。

「女の子に近づくんじゃないよ。女というものには悪魔の化身なんだ。女ってのは、悪魔が人間をほろぼすため、この地上におくり込んだものなのだよ」

彼が物心ついたところから、母に耳元にふき込まれていたこの言葉が、その心根にしみついていくのだった。

子供のうちは、この教えをうのみに信じこんでいた彼だったが、大人になってみる

と、さすがに疑問をもつようになった。

「なぜ母は、自分が属している女性を、こんなに嫌うのだろう。神の信仰に身をささげきった生活を送っている母が、なぜ、これ以上身を清めるため、お祈りしなければならぬのだろう。そんなに根深い汚れが、女の、つまり、母の体のなかにあるのだろうか？」

彼が、この疑問を解き得ないうちに、母は動脈硬化症で倒れた。彼は毎日、食事をつくり、薬をのませ、体を拭いてやるなど、看護の限りを尽くしたが、彼女は二度目の発作を起こして、一九四五年に死んだ。エディーは一人ぼっちになった。何もすることがなく、話相手もなくなった。

彼は、母の教えを自問自答したが、いまはその疑問に答えてくれる相手もないままに、自分でそれをとくほぐそうと考えるようになった。

まことに珍しいことだが、四十歳に手が届く年になっていながら、一度も女性の体を見たことがなかった。真実のことだ。

悪魔の正体をみきわめるために、これまでに解剖学の本を読みふけたから、女体の構造については知っている。しかし、白粉

や口紅、ブラジャー、コルセットを全部剥いでしまったら、どんなにみにくい正体が現われるかという疑問は、本物を見なければ解けそうもなかった。

「生きている女が駄目だったら、死んだのでもいい」

彼の、こんな思いは次第に強くなり、とうとうおさえ切れないまでに進んだ。

そうしたある日、二十二歳の娘が近くの墓地に葬られることを知った。

墓場をあばく

彼は、真夜中に墓をあばき、死体を盗み出すことに成功した。彼は、その死体を、例の納屋へ運んで来た。まず髪の毛をすっかり切りおとし、うすうす死化粧していた顔を、水でジャブジャブ洗いおとした。

こうして「まやかし」を剥ぎとった後、彼女が身につけていた物を全部脱がせてしまった。しろじろと横たわっている体を、じっとみつめていたが、肉切り庖丁をとり上げ、解剖の本で得た知識を利用して、のどもとから下腹部まで一気に切り裂いた。その後彼は、何度となく墓地へ通った。そのうち「死んだ体」では満足出来な

くなったのである。どれほど死体を調べてみても納得のいく、悪のかたまりは、みつからなかったからだ。

これは「葬式」などをしていううちに、そういうエッセンスが消えてしまうんだ。どうしても「新鮮な体」を手に入れなければならぬ。自分で手を下してでも――。

そういうときに彼は、マリー・ホーガン夫人をみいだした。彼女は円熟した中年女の美しさに満ちていた。それが、不幸なことに、エディーを満足させたのである。

「美しい女は男をひきつける。それが悪魔のしわざなんだ。美しいということは『悪』の程度が深いことなんだ。だから、美しい女をしらべれば、よくわかるだろう」

飛躍した論理だが、そう思い込んだ。マリーを殺した彼は、首を切りとって棚の上にかけた。体は切りさいて、内臓をバケツに捨てた。手と足はめっちゃめちゃに切りぎざみ、最後には心臓をとり出して鍋に入れ、ぐつぐつ煮て食った。

こんなことをしているあいだにも、彼には、罪の意識も恐怖も少しも湧いて来なかった。彼は、果たすべき「義務」をやったという満足にひたっていたのである。



利

死女の皮をかぶる

マリーの失踪を捜査に来た保安官は、エディーの家にもやって来た。誰かが、マリーの遊び相手だと告げ口でもしたのだろう。だが、何も知らないというエディーの返事を、保安官は少しも疑わなかった。彼の完全犯罪は成功したわけである。

一度「新鮮」な死体を手に入れてから、エディーはふたたび同じことをしてみたいという欲望に燃えた。しかし、こんどやったら、疑いからのがれることは出来ないということ、理解する程度の理性は、わずかながら残っていたせいか、早るころを押えて、ふたたび墓場あらしに戻ったのだった。

いまや、彼の家の納屋は「恐怖の部屋」と呼んでよい様相である。夜、他人が訪れて来る心配のない時刻になると、彼は、その部屋へ一人とじこもるのだった。

着ているものを全部脱ぎすてると、彼は、女の衣装を手にとる。ブラジャー、コルセット、マリーが着けていたブラウスとスカート、または死んだ娘のだれかが着ていた、きれいなガウン。みんな大事にとっ

ておいたものだ。それから女の髪束をつけ、死体から剥ぎとった女の顔の皮をかぶる。頭がい骨から丁寧にはぎとったので、扱いも慎重だ。それに口紅をつけ、白粉をはたき、きれいにお化粧した女の顔の皮だが、その夜の気分によって、彼はいろいろな顔に、自分をつくってみる。

そして、ずらりドロクロの並んだ棚の上の鏡に向かって自分の姿を写し、さも満足気にはほほ笑む。

「自分で悪魔の姿になってみる？」

いや、もうそんなものではないのだ。彼の関心は、いつしか異常な性の倒錯へ向かって、進行していたのだ。

彼はこの姿で、ひじ掛け椅子にすわり、満足しきった気持ちでジッとしている。その姿を照らすランプのシェードも、彼がすわっている椅子の上張りも、人間の皮で張られているのだ。

一枚の伝票から

エディーの快楽は、何カ月も、いや何年も続いた。そして、新しい欲望が燃えあがると、墓場へ行って新しい死体を運んで来る。

マリー・ホーガンの殺人から三年たった一九五七年十一月六日、エディーは、第二の殺人を犯した。この日は初雪が降り、うっすら薄化粧した新鮮な自然の景色がふたたび彼に「新しい体」への欲望をめざめさせたのだ。

犠牲者は、町の金物商パーニス・ウォーデン夫人だった。彼女も未亡人で、肉感的な美しさを持っていた。彼は、買い物をして、夫人がそれを伝票に記入しようとうつむきになっているところを、うち殺したのだった。

だが、この殺人事件のため、彼の長年にわたる秘密の生活がばかれたのだ。手ばかりは、夫人が書き残した一枚の伝票だった。『不凍剤半ガロン。エディー・ゲイン』

保安官はじめ、何のうたがいも持たなかった。ただ、未亡人が殺される直前会った証人として、何か情報でもあればという程度の軽い気持ちで、彼の家を訪ねた。

そのとき、エディーは留守だった。保安官は、あかりひとつついていない家のなかを、よくもこんなに汚したものだと思いがら、懐中電灯を、あちこち照らししてみた。フト、彼は、ドアが半びらきになって

いるのに気がついた。それは、納屋へ通ずる廊下だった。そして、懐中電灯の先を、ドアの彼方、納屋の一部に向けた保安官は、アッといったきり棒立ちになった。

保安官はふるえる足をふみしめて、目をこらした。ま正面にパーニス・ウォーデンの白い体がさかさ吊りにされている。しかも首がない。腹は真っ二つにたちわられ、首は、そばの棚の上に、たくさんのどくろと並べてある。

わが目をうたがいながらも、気をとりのおした保安官は、納屋のなかを、なおいっそうよく調べた。二つのバケツには、人間の臓器がいっぱい、はぎとられた女の皮が椅子にかけられている。

保安官は吐き気をこらえながら、なおよく室内を見まわした。ストーブには鍋がかけられ、たぎり立つそのなかには、まぎれもない、人間の心臓がゆだっている。

まれに見る猟奇事件として、州警察は緊張した。だが、エディーはそのとき隣家のレス・ヒルズの家で『家庭的な食事』の接待をうけていたのだから、逮捕には手間がいらなかった。

おとなしくて、よい人間らしく、彼は、

夫婦和合の秘器

neo- ワゴリング

(新案特許出願中)

本器を使用すればアナタの
悩み即日解消!



性に悩む男性に朗報!!

○勃起不全に對して
本器使用数分内に完全隆起し且つ
射精後も萎縮しません

○短小の方に對して
本ワゴリング使用数分内に局所
は驚く程膨大します

○早漏の方に對して
本ワゴリングを（併用）により
絶対に30分以上持続し効果絶大ノ

▼週刊新潮3月23日号及び夫婦生活等に紹介され、益々反響、話題を呼ぶ新製品ノ本器は（取付けたまま使用）するので効くのは当然ノ而も長年月使用しても副作用又は使用感がありませんから全く理想的です。

アナタの性能を即時10倍にする新製品ワゴリーングをスグ御使用下さい。

（定価）▼ハガキで申込次第力タログ無代進呈▼送料共一組11、三五〇円（個人名で急送します）

名産 肥後ずゐき 手芸品

☆好評新発売！
特製品七種組一函…850円で急送！

短小の治療に！

真空
ラージ療器

男性器發育不全、短小のため失望せる方は、最新式眞空治療法「ラーシ療器」の出現により、局所の肥大、伸長を図り、大なる喜びを得られよ。

●ラーシ療器並に併用局所塗布クリーム(二百円)付

●送料共

定価一組 一、六五〇円

東京都杉並区神戸町 128
株式会社 療養の友社
電話 (398) 4679 振替東京118443
(高田馬場より西武線井荻駅下車～徒歩2分)
(荻窪より井荻駅行バス5分、柿の木町下車)

あっさり、保安官に手をさしべた。

永遠の幽閉

犯人が捕われてから、犯罪の事実がわかったというのは奇妙な話だ。しかも、十二年間もの長いあいだである。彼の陳述に従って、一つ一つ墓がほり返され、棺が空っぽであることがわかるごとに、人々は、あきれ返った。

マリー・ホーガンのどくろと遺品も確認された。

事實は、あまりにも恐ろしいことであつただけに、暗黙の了解裡に、墓荒らしに就いては、これ以上追及しないことにしたというから、今日に至るも、彼の犯行の数は誰も知らない。

精神鑑定の結果、彼を異常者と認められて裁判は行なわれないが、終身、ウィスコンシン州の精神病院に収容されることになった。

彼はまた、精神病理学者にとっては、絶好の研究対象である。

その動機は、あまり複雑なため十分説明されてはいない。

「エディは、意識下で母を愛すとともに憎んでいた。母がいなくなった後、すべての女性性は母の代替物となった。犠牲者の皮を保存し、衣服とともに身につけることによって、なつかしい母を再現し、女性を切りぎざむことによって母への憎悪を表現していたものだ」

こんな解釈が発表されただけで、この事件は終わっている。



私の緊縛の記録

佐藤 重雄

私が絹子さんを知ったのは、一年ほど前のことでした。彼女は、私の家の近所の雑貨屋さんと親類で、その家の二階へ下宿することになったのでした。

ちょうど彼女が、引っ越しの荷物をおろしたり、整頓したりしているとき、私は、その雑貨屋さんへ買い物に行ったので、日ごろから気さくにつき会っている雑貨屋さんのおばあさんに頼まれて、彼女の荷物の整理を手伝うことになってしまいました。

それが、私が、彼女と親しく口をきくキツカケになったのです。

彼女の名は正井絹子といって、ある貿易商のタイピストをしていることも、そして、私より五つ年上だということも知りました。

その日以来、私は、彼女のところへとき

どき遊びにゆき、正月には、彼女の友達やおばあさんたちと、百人一首をしたりしました。

そのころになりますと、私は彼女を姉のように慕い、彼女も私を弟のように思ってくれました。二人とも、兄弟や姉妹がなかったので、よけいそういうようになったのかもしれません。

ある日、私は、夕飯を終えて、いつものように彼女のところへ遊びに行きました。

しかしまだ、彼女は会社から帰ってきておりません。私は、自分の家同様に勝手をしていましたから、さっさと彼女の部屋に通って、そこらにおいてある映画雑誌を読んだりしていましたが、それにもあきてきたので、押し入れをあけてみて、私は思わずドキリとさせられました。その隅のほ

うに、いろいろな縄や腰ひもなどの、あらゆるひも類があり、それから大封筒のなかからは、おどろいたことに、緊縛雑誌や、外国のそういった緊縛ばかりの写真雑誌、手札判のいずれも全裸で縛られた女性の写真などがでてきたからでした。

私は、心のなかで「バンザイ」と叫び、有頂天になってしまいました。私は今まで、こういった変態者は私だけかと思っていましたから。そして、彼女こそ、私の欲求を満たしてくれるただ一人の女性だと思いました。いうまでもなく私はサディストだからです。

しばらくして彼女は帰ってきました。そこで私は、彼女を縛るきっかけをつくるために、冗談のように、

「コレッ、なぜそんなにおそかったのか。」

若い娘は、もっと早く帰るものだ。ひとつお仕置きをしてやろうか」

という、彼女もおどけて、

「お仕置きなんか、できるものならしてみよ」

「よし、泣きごとといっても知らないぞ」

といって、そこにあった手ぬぐいで、無理に、暴れる彼女の手首をまねごとのようにくくってしまうと、彼女は、「イヤ、イヤ」といいながら、からだをよじらせていました。あきらかに彼女は興奮しているようでした。しかし私は、彼女の手首の手ぬぐいをといて、

「どうですか、お嬢さま、ご気分は」

と道化^{どけ}ていうと、彼女も興奮がさめたのが、ゴマかすように笑っています。それで私は思いきって、

「どうですか、押し入れのなかをあけては」

というと、彼女は、美しい顔を真っ赤にしなが、

「よくも見たな、このイタズラ坊主め」

と、はじめは笑いながら言っていました。が、急にしんみりと、

「これが私のクセよ。変態でしょ」

と、自分の性癖について私に言ってくれました。彼女の話によると、彼女は、自分の欲求を満たすために、押し入れにあるヒモを用い、ベッドの上で自分で自分を縛ったりしていたのだそうです。

そこで私も、自分にサディスティックな性向のあることを話しました。

こうしてお互いに話しあっているうちに、二人はすっかりそのことで意気投合して、さっそく実行に移すことにしました。

「ゆるく縛ってよ」

と、言いながら彼女は、手を合わせて、私のほうを見て、ほほえみました。だが、その笑いは「きつく縛ってね」と意味しているのだと私は感じとりました。

「ではお仕置きをするぞ」

と、私は押し入れにあった腰ヒモで、彼女の赤いセーターの上から、乳房の上と下を二本ずつかけて縛りました。彼女の乳房は、ヒモではみだされたようにピョコンと、とびだしています。

それに刺激されて私は、いったん、ヒモをといてから足だけ縛っておいて、彼女の赤いセーターを脱がせてしまいました。彼女は激しく抵抗しましたが、私の腕力には

かないません。そこで前のおりに乳房を縛り、スカートもとってしまいました。

彼女は恥ずかしそうにうつむいていましたが、まんざらでもなさそうでした。私にとってははじめての経験でしたので、しばらくは、うっとり彼女の姿態に見とれていました。

透けて見えるナイロンのスリッパの下には、彼女はブラジャーをつけていません。そればかりか、パンティーすらはいていないのです。

「若い娘のくせにパンティーもはかないのか、なんなら、ぼくがはかせようか」

という、彼女は、顔をふせてしまいました。あとでわかったのですが、彼女は、秘密露出症^{ひみつろしゅしやう}とでもいうのでしょうか、パンティーなどもはかないで、その上に直接スカートをはいて会社へ行ったりして、自分でエキサイトするというようなことをしていたのです。

「では、これより尻たたきの刑をする」

とおごそかに私は言って、ベッドの上の彼女のスリッパをパツとはねのけました。私は、はじめて見た女性の神秘の場所に、思わず彼女のお尻を平手でたたきだしまし

た。いや、たたくというよりも触れるといった感じであったかもしれません。

彼女は最初のうち「イヤ、イヤ」と言っていたんですが、うっとりとしてあらぬ方を見つめています。

私はしばらく、そうして彼女の臀部の感触を楽しんでいましたが、その部分は真っ赤になってしまい、今にも血が吹きだしそうなので、手をやめて、彼女のヒモをほどきました。彼女はまだ物足りなさそうな顔でしたが、ケガでもさせたらコトですからやめてしまったのです。

夜もだいぶおそくなったので、その日はそのくらいで帰ることにしました。帰りに彼女は、「また今度ね」といって、私の額にキッスしてくれました。

私は有頂天になって家へ帰りましたが、その夜は、興奮のため眠れませんでした。それからしばらくして、春休みになってから私は、絹子さんの実家へ遊びに行くことになりました。私の父母も彼女を自分の子供のようにしており、彼女を信用しておりましたので、その旅行をころよく許してくれました。

遊びに行くのがもちろん目的ですが、た

だの遊びではなく、彼女はいろいろと緊縛道具の用意もして、私に「向こうへ着いたら思いきり遊びましょうね」と言っていて、意味ありげに笑っているくらいですから、たいへん楽しみにその日を待っていました。

彼女の家はN県のある城下町の、先祖は武士という家がらで、大きな家に彼女の年老いた父母と女中と下男がいるだけだということでした。そして、家の倉は、私たちの「プレイ」をするのに絶好の場所だと、彼女は話してくれました。

三月三十一日から一週間、彼女は会社で休みをもらってきました。彼女の家までは十三時間あまりかかる、遠いところです。彼女の家は、見るからに昔の家らしく、まわりは土塀で囲まれており、庭は広く、その半分ぐらいまでは竹やぶでした。彼女の父母は、私のことも前から彼女に聞かされていたらしく、たいへん歓迎してくれました。

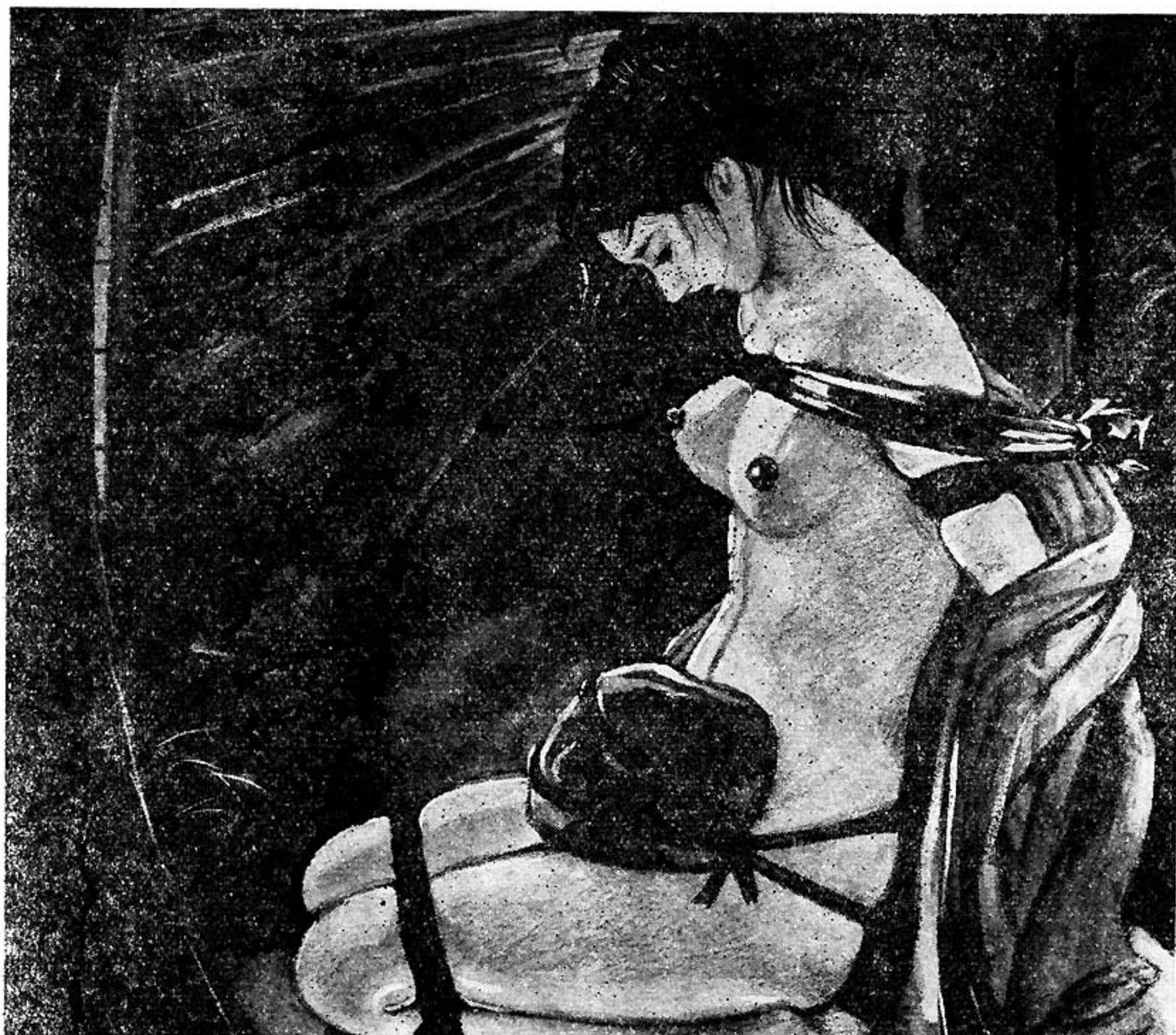
絹子さんの両親は、客室のひとつをあてがってくれましたので、私はやっとそこで、汽車のつかれをやすめるためにすぐ寝てしまいました。

昼ごろ目をさますと、絹子さんと女中さ

んが私の部屋へはいつてきて、女中さんを紹介してくれました。それによると彼女は百合さんといって、中学を卒業してすぐこへ働きにきたそうです。年は絹子さんより一つ上で、昔のお姫様のようにきれいな人でした。彼女のことで最もおどろいたのは彼女が、絹子さんを現在のようなマゾヒストにしたのだと聞かされたことです。百合さんは、絹子さんが高校へ行っているときからずっと、緊縛プレイをしていたのだそうです。百合さんはサド、マゾ両方ですが、絹子さんとプレイするときは、いつも百合さんが責め役になっていたのです。なぜかという、絹子さんは完全なマゾヒストだったからです。

紹介がすむと百合さんは、「用がありませんから」とでて行きました。そして絹子さんが、この家のなかを全部連れて歩いてくれました。昔からの家なので、刀剣類やよろい、かぶとがありました。最も気に入ったのは、彼女が前に言ったことのある倉でした。

中は真っ暗で、ろうそくをつけてしか行けません。屋根裏部屋には天窓があり、明るくなっていました。ガランとしてい



石を抱いて 夏座敷の角の柱に 石を抱かされて縛られた無残さ 江馬美久・え

て、下の物置きにゴタゴタしたのに比べると、全く殺風景ですが、こわれたようなマッパレスと、縄のたらしである滑車とが、「アレに使うのか」と直観的にわかりました。絹子さんも、意味ありげに笑っていました。

「絹ちゃん、縛られてよ」

つぶやくように言うと、彼女も待っていたように、

「ええ、どうぞ」

「でも、おとうさんやおかあさんがはいてみえないの」

と私が聞くと、

「うん、ここへは絶対にはいってこないの。」

百合ちゃんと私だけがはいるきりよ」

と言いつつ、彼女は、ナイロンのブラウスを脱いでいます。

「きょうは、パンティーもはいていないから、脱がしちゃいやよ。百合ちゃんに見られたら恥ずかしいから」

(どうせ最後には全部とってしまうのに) と思いつつも、私はうなずきました。

パンティー一枚の彼女をすぐうしろ手に縛りあげると、きょうは初めて、本などで見ただけの「股間縛り」をやろうと、縛った縄の

余った部分を二本、彼女の両足のあいだから通して、前へだし、それを首にまきました。その縄が痛かったのか、彼女は、

「ウワッ！ それだけはやめて」

と言うので、急いで縄をときました。

そのとき、私に、良い考えがうかびました。彼女のパンティーもとってしまつて、

今度は、座布団のカバーをとってスポンジだけを取りだし、二つに折りまげて縄とつないで、それを彼女の股間へもっていき、思いきり縄をぐっと引きあげました。まるで赤ん坊のおしめカバーのようですが、スポンジはぐっとのびて細くなり、彼女の真っ白なお尻を思いきり開かせ、女性として最も神秘的な場所をつつんでしまいました。これには私も大変満足しました。

「まあ、やってるわね、私もいれてよ」

思いがけなく声がしたので、ぎくっとして振り返ると、百合さんが、いつはいつてきたのか、私の後ろで、目をぎらぎらさせて絹子さんを見つめています。

「あなたはどうぞ、そこで休んでいてください。私にも久しぶりにやらせてよ、ねえ絹子さん」と言つて、私が縛った縄をほどきながら、「まあまあ全部脱がされて」とピ

シャピシャと絹子さんのお尻をたたきながら、彼女をしばり直しはじめました。

まず、絹子さんをおおむけにさせてマットレスのうえに寝かせ、両手両足を開けるだけ開かせてマットレスの四隅に縛ってしまいました。絹子さんの体はXの字の形になり、あらゆる個所がむき出しにされてしまいました。

私は、絹子さんの体を存分に見ることができました。いつもは、縛るのに夢中になつてしまつて、そんなことは全然といつていくらい無関心でしたのに、そうして改めて見ると、美しいなあと思いました。丘のように盛り上がった乳房、赤いサクランボの実のような乳首、むっちりとして雪のように白い下腹、薄黒い草むら、どれもこれも、素晴らしいのです。

縛り終わると百合さんは、馬のしっぽの毛でつくった大きな筆のようなものをもってきました。そしてそれで彼女をくすぐるのです。

「絹ちゃんのオッパイも大きくなったわねえ」

といいながら、乳房を、そしてさまざまな場所をくすぐつてまわるのです。

もう言葉づかいも、お嬢さんと女中の関係ではないしゃべり方です。

絹子さんは、涙をながしてこらえました。百合さんはやめません。脇の下、下腹、足のうらと、容赦なく百合さんの手はやすみません。ことに下腹は絹子さんも最も感じるらしく、一番大きく悲鳴をあげて体中でもがきました。

あまり絹子さんの悲鳴が大きいので、百合さんは、絹子さんの黒いナイロンストッキングを脱がせて、それを小さく丸めて、絹子さんの口の中へおしこんでしまい、その上を手ぬぐいでおおってしまいました。

今や絹子さんは、片方の黒いストッキングだけつけていました。それは彼女の白い肌と対比して、なんとも言えない奇妙な美しさを見せていました。

今まで、私と絹子さんが緊縛プレイをしているときは、絹子さんは快感そのものといったうっとりした表情をしていましたが、今は苦痛のため、涙まで流して身をよじらせています。

それでも百合さんは、次には絹子さんを腹ばいにさせて、今と同様、思いきり両手両足を開かせた格好にし、その腹のあたり

に、先ほど私が用いた座布団を四つにおいて置きました。それで、絹子さんのお尻は高く上げられてしまいました。そうしておいて、馬のしっぽの毛で編んだような鞭で、絹子さんのその高い部分を、思いきり打ち下ろしました。

絹子さんの豊かな、そしてふっくらとして、ひきしまったお尻には、百合さんの鞭が、容赦なく打ちおろされました。多分、百合さんは、絹子さんの輝くばかりの白さと美しさに嫉妬を燃やして、こんなひどい責めになって表われたのでしょうか。でも、こんなに強く、百合さんが絹子さんのお尻を打つても、わずかに赤くなっているだけです。恐らく、馬か何かの毛で作ったムチを使ったためでしょう。

しかし、柔らかな絹子さんのお尻は、何度も打つうちに、真っ赤になり、今にも血がでそうです。そのうちに、今までで一番強い当たりが、彼女の股間へうちおろされたのです。これには、絹子さんも、絶叫と同時にぐったりとのびてしまいました。

そうになると、私の怒りは頂点に達しました。百合さんにとびつくがはいか、彼女のセーターもスラックスもブラジャーもと

ってくり上げてしまいました。彼女のパンティーは、ひもがかんかん結んであって、なかなかとれなかったもので、とりませんでしたが、とれたら、彼女のつけているものは全部とってしまったでしょう。彼女の手と足をいっしょにしてしぼり、まるで、サルカタヌキのように、滑車からつりさげてしまいました。

それから私は、絹子さんを抱きおこすと、可哀そうに絹子さんは、先ほどのショックのために、放尿してしまっただのか、わずかに座布団の隅がぬれていました。

「絹ちゃん、またおシッコをもらしたのね。昔もそうだったけれど、変わらないわね、赤ん坊のようね」

と百合さんは、毒づいています。

「あとでゆっくり責めてやるから、待ってろよ」

と言って私は、ぐったりとのびた素っ裸の絹子さんに、パンティーとブラジャーをつけてやりました。そして、ベッドに寝かせておきました。

百合さんのほうを見ると、彼女は、

「手がぬけそうよ、早くおろして」

とおおげさに言っています。

「そうしてサルのように半時間に我慢してもらいましょうか」

と言っていると、絹子さんが気がついて、私のほうへ寄ってきて、

「そんなやり方じゃ手ぬるいわ。私にも、さっきの恨みをはらさせてよ」

といって、百合さんの縄をほどき、ナイフで、百合さんのパンティーのひもを切つて、それを脱がせてしまいました。

「これで、さっきの私と同じ姿になったわ」といい、あたりを見回してから私に、

「あそこの欄干にしばらくしようよ」

と言って、窓をあけ、その欄干を指さしました。窓をあけても、見渡すかぎりの竹やぶですので、安心してやれます。絹子さんは私に、

「あの欄干へ、またがせてしまいましたしょうよ。でも、直接またがせてやると、百合ちゃん、大事なところに傷がつくかもしれないから、さっきの布団を敷きましょう」と平然と私にいます。

それで私は、全裸の百合さんの豊かな体をだいて、そこへ連れて行き、その欄干にしいた布団の上でまたぐような形にして、両方の足を別々に縛りました。彼女は、さ

れるままにしていきましたが、座布団はいい
てあっても、さすがに痛いらしく、もがき
はじめました。でも私は、彼女を前のめり
にさせ、乳房も、片方ずつ縛ってしまいま
した。

絹子さんの美しさとはまた違う、百合さ
んのひきしまった乳房も、縄がかけられた
ので、ぐっとくびれて大変苦しそうでした。
股間にくいこむ痛さと、乳房をしめつけ
られる苦しさを、彼女はじっとこらえて
いながら、何かウツトリしているようでし
た。

そばの絹子さんも、この百合さんの姿を
見て、思わずたまらなくなったのか、

「ねえ、私も縛ってよ」

と、さっきのことにもこりないのか、う
るんだような目をしながら言っています。
そのとき私は、良い考えがうかんだので、
「途中で痛いと言っても、解いてやらない
よ」

というと、彼女はうなずきました。

それで私は、じつに思いきったことを、
やりました。欄干にまたぐようにして縛ら
れ、おまけに乳房まで縛られている百合さ
んの上に、絹子さんをあおむけにしてのせ

てしまうのです。

まず、絹子さんの着ている物を、また脱
がせてから、彼女の足を、百合さんの頭の
ほうへ開かせてしまってから、片方ずつく
くり、百合さんの体と一緒に合わせて、欄
干に縛りあげてしまいました。

上にのったようになった絹子さんは、乳
房はぐっと上を向いて乳首もぴんととがっ
たようになって、素晴らしいがめになり
ました。下の百合さんは、絹子さんのおも
みで乳房がぐっと欄干にめりこんだよう
になり、ますます苦しがりしました。股間はち
ょうど絹子さんの頭の部分なので、さほど
感じないようですが、さきほどからの苦し
さには、涙やよだれまでだしてこらえてい
ます。百合さんはやはり、絹子さんよりは
相当辛抱強いのですが、絹子さんは下へお
ちないかどうかとこわがってさえます。

次に、私は、さらに思いきったことをや
りました。

上にのっている絹子さんは、さっきマッ
トレスの上で縛ったように、両手両足とも
すっかり開かせ、あらゆる体の部分がすみ
ずみまで伸びきっていますので、くすぐる
にはもってこいです。百合さんの使った馬

BONDAGE
米国製異色写真
100ポース ALL NEW
写真入
カクログ
100% NEW
PHOTOS!

各国異色珍写真輸入
東京北区滝野川7-40
ベス社

の尻尾の毛の筆で、首から腕、乳房の間、
脇腹と、順番にやってきましたら、あまり
絹子さんが暴れるので、ついに股間をくす
ぐるにいたって、最高にあげられたので、百
合さんが乳房と股間の痛みで、ぐったりと
柔らかくのびてしまいました。そして、絹
子さんもまた、ぐったりとなってしまうま
したので、きょうはやめることにしました。
百合さんの股間や乳房の間の溝などは真
っ赤になっていたもので、私は薬をすりこん
でおいでやりました。百合さんは、

「お乳も、ここも、ものすごく痛いわ」

といって笑いながらにらみます。でも、
三人とも、それぞれに満足していました。

この日から七日間、ずっと、絹子さんと
私と、あるいは百合さんも混じえた三人
で、私たちは毎日縛りごっこをやりました
が、あとの六日間のことについては、いず
れ後の日に書くことに致します。



犯罪からみたサディスト

小 森 初 男

殴打した後で愛撫

大正十四年、岡山県K町に、田口逸堂という四十七歳の僧侶がいた。彼は、中井テル子（当時二十五歳）と浜田イト（当時二十四歳）の二人の女と同棲していた。

なかでも中井テル子は、非常に豊満な肉体の持ち主であったので、逸堂は、いつも彼女を裸体にして眺めて喜んでいた。

そのうち、テル子の裸体を眺めるだけでは満足せず、八月ごろからは、二階の仏壇の前で裸体にして、彼女の臀部や背部を大きなムチでピシピシと打った。テル子が痛みに堪えかねて逃げ回ると、これを追いかけ、暴力をふるって情交し、また殴打して情交するということが、ほとんど毎日つづいた。

こういった虐待がつづくので、近所界限の大評判となり、警察の知るところとなった。そして逸堂は検挙され、傷害罪で罰金百円の科料に処せられた。

テル子の臀部や背部は、ムチの傷で浮き彫りしたように腫れ上がっていたが、彼女は、警察で取り調べられた時、それほど虐待を受けた逸堂に対して、別に不平らしい言葉を一言ももらさなかったという。

逸堂は、もちろん典型的なサディストであったが、テル子もまたマゾヒスチックな性向の女であったというべきであろう。

女を抱くより殺したい

昭和二十五年四月九日、東京都目黒区三田五七番地先を通行中の田中タネさん（当時二十九歳）と露木利夫さん（当時二十七

歳）の二人は、午後十時半ごろ、一人の男に短刀で金を出せと脅かされた。だが、スキを見て逃げ出そうとすると、男は短刀をふるって、タネさんは首を刺されて即死し、露木さんは顔面に重傷を負った。

また、同月十五日夜、品川区上大崎長者丸二六三番地先の焼け跡で、葛飾区上平井一七八五、無職高田寅吉さんの妻波津さん（当時三十八歳）が、新宿区百人町二の一七六、工員堀口一郎さんと密会中を、人相のわからない男に頸動脈を一刺しにされて殺害された事件が起こった。

そして同じく二十二日夜、渋谷区長谷戸二七八、藤井玻津さん（当時二十歳・学生）が、相川栄子さん（当時二十一歳）とアベックで通行中、黒ジャンパーの男から「金を出せ」と脅かされ、栄子さんだけを、近

くの加計塚小学校に引きずり込んで、持っていた小刀で、同女の頸部を切つて殺害して逃走した事件が発生した。

これらの連続殺傷事件の犯人は、間もなく捕まった。目黒区下目黒三丁目に住む、元工員の川田一郎（当時十九歳）という男で、彼の陳述によれば、女と肉体関係を結ぶよりも、女を殺害することに満足を覚えたということである。

これは、淫殺の実例である。

子宮と乳房を切り取る

茂木新太郎は、六人暮らしの農家の七男で、畑を一町歩ほど耕作していた男である。だが、一家の地所は、金鶏山という山の中段にある新しい開墾地なので、広く耕作している割には収穫が少なく、六人暮らしもなかなか容易でなかった。

そこへもって来て、一万円の税金が課せられてきたので、新太郎は、とても真面目に働いても払えないと考え、いっそのことひと思いに死のうと思った。

それには、前々からひそかに恋心を寄せていたメイのおたか（当時十八歳）を道連れにしようと企て、

「埼玉の姉のところに遊びに行こう」

とおたかを連れ出した。そして、金鶏山の中腹まで登ったところで、自分の意中を打ち明けた。

おたかは、あまりにも突然のことで、驚いて逃げ出したので、新太郎は追いかけて、彼女の両肩をつかんで押し倒し、関係を迫った。

おたかは、自分には恋人があるので、肉体だけは許してくれと哀願したので、思慕の念を裏切られ、嫉妬の心が燃え上がり、新太郎はおたかの頸部を絞めて殺害してしまった。そのうえで姦淫し、死体を松林に隠匿して一旦帰宅した。

再び、こんどは日本カミソリを持ち出して引きかえし、おたかの死体の臍から下を十一センチほど切りひらいて子宮を切り取り、さらに乳房をえぐり取った。そうしておたかの死体を埋め、切り取った子宮と乳房を大事にポケットに入れて帰宅したが、間もなく、おたかの行方不明が騒がれ、ついに逮捕されたのである。昭和二十五年十月、群馬県で起こった事件である。

これは、屍姦や淫殺とも違って、食人症や吸血症に近い、サディスティックな犯行で

あった。

女を刺して満足する

昭和二十五年五月二日、夜九時五十五分ごろ、東京都目黒区中目黒二の五八〇、八幡神社前の暗闇を通行中の、同区上目黒二の二〇九三、遠藤幸吉さん方に同居する進駐軍雇員木村花子さん（当時二十二歳）は、うしろからつけてきた男に、いきなり、ナイフ様なもので、左下腹部を刺された。犯人は二十四、五歳で、五尺二寸ぐらい、額が広く、髪をまんなかから分け、黒ジャンパー、黒ズボン、下駄ばきの男だったが、その場から直ちに逃走してしまった。

また同月十九日午前〇時半ごろ、川崎市貝塚、阿部病院に、白手ぬぐいで覆面した男が侵入して、就寝中の看護婦杉村まち子さん（当時十八歳）に、カミソリ様のもので切りつけ、臀部に二カ所の軽傷を負わせて逃走した。それからしばらくたって午前四時ごろ、同町一一五、会社員田中五三吉さん方にも同様に侵入、就寝中の同居人、高坂千代さん（当時二十三歳、女給）に切りつけて重傷を負わせた。

さらに隣接している東小田町のおでん屋



飯田浅吉さん方にも侵入、女中部屋で就寝中の女中、藤原春江さん（当時二十歳）を刺して逃走したという、連続刺傷事件が起こった。

そして同じく三十日の午前〇時五十分ごろ、東京都杉並区大宮前五の二七七、金子正昭さん方に寄宿する歌手の宮美子こと坂井よし子さん（当時二十五歳）が、中央線西荻窪駅から帰宅の途中、うしろから男につけられた。

男は三十五、六歳で、スキー帽に、国防色の作業服を着ていたが、

「どちらへ帰るのですか」と、よし子さんに話しかけてきた。

「久我山のほうへ」

と答えたものの、気味悪くなったので、よし子さんは駆け出し、自宅から三十メートルぐらい手前の、大宮前五の二七八、中野さん方の門前で、

「誰かきてください」

と救いを求めたところ、男は、短刀のようなもので、よし子さんの左腹部を刺して逃走した。

以上三つの事件は、いずれも、サド的傾向をもったフェチシストの犯行と思われる。

すなわち、異性の肉体につけたものに対する狂崇だけでは満足できず、女体の肉体

を損傷して、自分の性向を満足しようとした犯行であると考えられる。

女の髪切りに興奮

昭和二十五年五月十六日午後九時四十五分ごろ、神奈川県平塚市浜岳三三三、大船三菱電機会社の女工員藤林なみさん（当時十八歳）が、市内の元工業学校大通りを、姉のみちさん（当時二十歳）と通行中突、然、うしろから襲われ、数回にわたって、毛髪を切り取られ、頭部に二カ所、骨膜に達する重傷を負ったという髪切り事件があった。

さらに同年八月三十日、同市馬入の大本化学社宅に住む木村あや子さん（当時二十一歳）が、友人とともに、夜の九時半ごろ帰宅の途中、社宅付近で、頭髮ひとにぎり

を切られ、右手指に二週間の傷を負うという事件が、ふたたび起こった。

犯人は間もなく捕まったが、女の表徴としての毛髪を切ることに性的興奮をかきたてられるという異常性格者であった。

これらのことからわかるのは、彼らが、興奮した場合は、前後の見さかいいもなく、危険この上ない。

復

讐

鬼

青山三枝吉

夜の来訪者

黒ずんだニス塗りのドア。古く重い感じのドアだった。

サユリはいちど息をつめ、それから軽くノックした。

男の声で、返事があった。

ノブをつかんでドアをひくと、部屋の中には春也の顔が待っていた。

一瞬、サユリの表情が、ぎくりッと硬直した。

「よくきてくれたね」

春也は、笑ったような顔でいった。

笑ったような顔——というのは、春也の唇の両端が、頬のほうにひ

きつり、白い歯がニュッとでているからだ。

明るく上機嫌な春也の声音は、サユリの心を、ホッとさせた。

「ほんとうによくきてくれた。うれしいよ、サユリ。ぼくはもう、二度ときみの顔は見られないものと、あきらめていたんだ。……きみがここへ遊びにきてくれるという、さっきの電話を、ぼくはどんなによ

ろこんだか、知れやしない……」

春也は大げさに腕を前にさしのべて、サユリを迎える。

サユリは手に持っている洋酒の瓶を、春也の前にさしだした。

「はい、おみやげ。あなたのお好きな、ヘルメス・ウォツカよ。今夜はひさしぶりで、あなたと一緒に頂こうと思って……」

「おみやげだなんて、そんな他人行儀なことはいらないのに……。でも、きみのそういう気持ちは、いまのぼくにとって、非常にうれしいけれどね……」

「このお酒で、あなたとの仲直りパーティーをびらきたかったのよ。二人だけの……」

「そいつはすてきだ。今夜のきみは、また特別に美しいし……」

「相変わらずお世辞がじょうずね。……そういえば……」

サユリは、ふとためらったが、思いきったようにいった。

「洋子さんは、今夜はいらっしゃらないのかしら？」

「洋子か。あいつのことは、もう言わないでくれよ。あいつとは、もう別れた……」

春也の声は沈んだ。

「まあ……」

「あいつはもう、ぼくを嫌って、ここから逃げだしてしまったんだよ。なにしろ、ぼくがこんな顔になってしまったんだからね。無理もないが……」

春也の顔には、眉毛がなかった。

左のまぶたが焼けただれて、目の上にまで垂れさがっていた。頬の肉が耳のあたりにまでひきつれている。

唇がめくれて、ひどくゆがんでいた。皮膚のところどころが、火傷の痕でテラテラと光っていた。

春也のこの醜惡な面貌は、いまから半年前に、サユリの手によって、濃硫酸を浴びせられたものである。

もとはといえば、春也のほうに罪があったのかも知れない。

サユリという美しい容姿をもった妻をもちながら、若い肉体に惹かれて、秘書の洋子とふかい関係をむすんだ春也だった。

それを知ったサユリが、ある夜、逆上して嫉妬の鬼となったのだ。眠っている春也の顔に、濃硫酸をぶちまけたのであった。

疑惑の乾杯

しかし、サユリの罪は情状酌量されて執行猶予になった。

「おゆるしくださいね、あなた。こんなこと、百万べん申しあげてもお許しくださいないのはわかっていいますけど、わたし、毎日、心のなかでお詫びしているんです……」

サユリはハンカチをとりだし、両頬の上におしあてた。しおらし

いポーズだった。

「何をいうんだ、サユリ。詫びなければならぬのは、ぼくのほうだよ。——あんな洋子みたいな小娘にだまされて、こんなに美しいやさしい心をもったサユリを裏切ってしまった。ぼくは何といって、きみに謝罪したらいいかわからない」

いいながら、春也はふと不思議だった。

あれほど嫉妬と虚栄心の強いサユリに、こんなしおらしいところもあったのか……

鬼のように憎しみぶかく、執拗なサユリの性格だった。

よく殺されなかったものだ、といまでも春也がゾッとするくらいの激しい気性をもった妻なのだ。

「ゆるしてくださいさる？」

小首をかしげ、嬌態をみせてサユリがささやいた。

「ゆるすもゆるさないもありやしない。さアそれじゃ、きみの持ってきてくれた洋酒で、楽しい仲直りのパーティーをはじめようか」

「うれしいわ」

サユリは、いそいそと支度をはじめた。

やがて、テーブルをはさんで、二つのグラスが、カチリと合わされた。

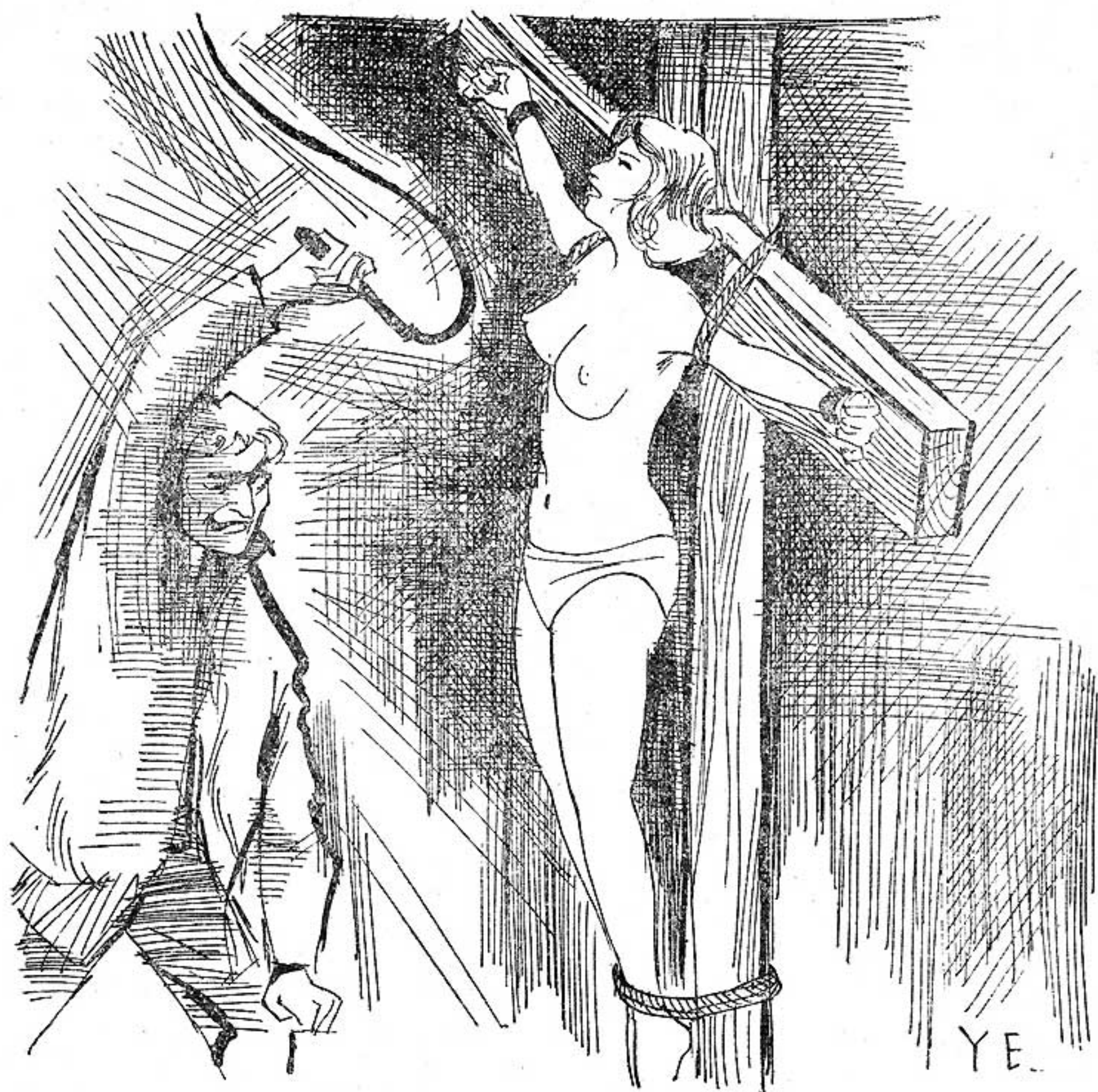
「過去のことは、みんな悪い夢だったとあきらめて、新しい二人の人生のために……」

サユリは微笑していった。

「そうだ、これからの幸福のために……」

春也は微笑のような顔で乾杯した。

あたたかい空気が、この部屋の中にただよっているかにみえた。



春也は、ふと立ちあがって、ラジオのスイッチをいれた。ミュージック・タイムである。

やわらかなリズムが流れはじめた。

「おあつらえむきだね。踊ろうか」

春也が手をさしのべた。

「ひさしぶりね。お相手しましょうか。その前にあなた、もう一杯これをお飲みになってちょうだい」

「よろしい。きみも飲みたまえ。さっきからちっとも飲んでいないじゃないか。ぼくばかり酔わせようというのかね、ハハハ……」

二人は立ちあがり、サユリは春也の肩に手をのせた。

焼けただれた、おそろしい顔が、サユリの目の前に接近した。唇がめくれて、齒がむきだしているの、いつも笑っているようにみえるが、それだけに感情が外に現われることのない顔である。

曲は流れ、二人の足はなめらかに床を滑った。

「サユリ……」

春也がささやいた。ただれた唇が、サユリの唇に迫った。

——ヒュッ……本能的にサユリはそれを避

けた。

避けてから、ハッとした。春也の目が、泣き笑いしているように、二、三度パチパチとまたいた。

サユリは、詫びるように春也の胸に顔を押しつけ、クスンと猫のようになを鳴らした。

ミュージックが切れた。

「疲れたわ。すこし休みましょうよ」

と、サユリがいった。

春也の胸から離れようとした。

そのとき、サユリを抱く春也の腕に力がこもった。じわじわと指に力をこめた。

「あッ、何をするの、あなた、苦しい！」

サユリはのけぞって抵抗した。足がバタバタと床を蹴った。

「うふふふ……痛いか、苦しいか、サユリ」

春也の声音が変わった。憎悪に満ちたひびきだった。この急変にサユリは愕然とした。

「あッ、あッ、あなた！……あなたは、やっぱり、わたしを恨んでいたのね！」

サユリの顔が、のけぞったまま恐怖にゆがんだ。

春也の手が、サユリの右腕をぎゅっとつかみ、そのまま、つぎの部屋へひきずっていった。

そこは、窓のない密室だった。かつては、春也とサユリの寝室であった。

室内をひと目みまわしたとき、サユリは愕然として目をみはった。ベッドも家具も、なんの装飾もないのだ。

そのかわりに、壁にはふといロープの束がかかっている。床には、長い皮鞭が置かれてある。

さらに、部屋の中央には、削りたての肌目もなまなましい白木の十字架が、まるで臺のような不気味さで据えられてあるのだ。

陰惨な室内の様相だった。

サユリは敏感にさとした。

リンチの部屋！

復讐の部屋！

まさしく、それにちがいはなかった。

十字架の裸女

「あ、あなたは、わたしを、ど、どうしようというの！」

サユリは、おびえた声でさげんだ。肩をふってもがく。

しかし、春也は無言だった。

サユリのブラウスの襟もとに両手をかけると、ぐいぐいとしめあげ、それから力いっぱい左右にひき裂いた。

ビリビリッという非情な音がした。ボタンはちぎれ、ブラウスは破れた。

春也の手は、サユリの身にまとった服を、さらにべりべりとひき剥いていくのだ……。

やがて――

パンティー一枚だけの裸身にむかれたサユリは、髪の毛をわしづかみにされ、十字架の前に立たされた。

「ゆるして！ あなた、ゆるしてえッ！」

サユリは赤い唇をゆがめてわめいた。

「うふふ……ゆるせない。とてもゆるせるもんじゃない。ぼくの顔をこんな化け物のようにしたのは、きみなんだからな。ぼくの一生は、もうめっちゃめっちゃなんだ。きみのために、ぼくは生きながらの屍しかばねになってしまったんだ。この復讐は、どうしてもやり遂げなければならぬ。……ぼくはね、復讐の鬼と化したんだ。復讐鬼とね。うふふ……」

呪咀じゆそに満ちたふくみ笑いだった。

サユリの顎が恐怖にひきつった。なにか言おうとしたが、声にならない。

「さあ、腕をあげるんだ」

春也は縄を握った。

サユリの手足を、十字架に縛りつけていくのだ。

「うッ、うッ！」

肌に噛みこんでくる縄の強さに、サユリはうめいた。

左右の腕は水平にのばされて、柱の横木にくくりつけられる。

両足は垂直にそろえられて、柱の根もとにぎゅぐゅと結ばれた。狂ったような春也の力だった。サユリの背すじに、ザラザラした木肌が食いこんだ。

「ああッ、あなた！……」

もう逃げることはできない。

身動きすらもゆるされないのだ。

それでも必死に首を動かし、胸をゆすり、腰をふってサユリは身もだえする。

十字に縛りつけられた裸女。

時代錯誤の磔刑はりつけだった。

これは江戸時代の女死刑囚の図ではないか。

「ふふ……もがくがいい。わめくがいい。この十字架はね、きみに復讐するために、わざわざぼくが、呪いのろいをこめて、ぼく自身の手でつくったものだ。だから、すこぶる念入りに、頑丈にできている。いくら暴れたところで、倒れたりこわれたりはしないよ。あははは！……」

春也は目を細めて、心地よげに嘲笑した。

憎い女を、ついに捕えたのだ。これから、思うぞんぶんの仕返しをしてやるのだ！

サユリの全身をチクチクと責めなぶり、じわじわと痛めつけるために、精魂こめてつくった春也の十字架。

この男の執念も異常だった。

「うふ、うふふ……」

胸底からゾクゾクとこみあげてくる復讐なかば成功の快感に、春也の唇は涎よだれで濡れた。

うなる皮鞭

春也の目の前には、いまや完全に無抵抗になったサユリの裸身が、いけにえのようにさらされている。

光っているような白い肌だ。くくりつけられた肉塊の、むざんな美しさだった。

熟れきった白桃の実。

あまい汁が、皮膚の内部から、じゅくじゅくとにじみだし、したた

り溢れるほどに成熟した女体なのだ。

たつぷりと肉づいた乳房がまばゆい。こぼれるほどの隆起だった。ゆたかなふくらみのその頂点にあるうす紅い乳房が、いま恐怖のために、かたくとがってふるえている。

——半年前と、ちっとも変わらない身体をしている。うぬッ。……

春也は感嘆し、嫉妬感がムラムラと湧きあがってくる。

サユリの両手首、両足首に嚴重に巻きついた縄。それだけでは足りない気がした。

もっと苦しめてやる！

春也は、べつの縄束をほどいた。

その縄で、こんどはサユリの腹を縛りつけるのだ。しめあげようというのだ。

牛乳をぬりこめたように白く、やわらかい腹部だった。その腹と柱とを一緒にして、ぐるぐる巻きにする。

春也は、縄をつかんだまま、十字架の周囲を犬のようにまわった。

もう夢中だった。

縄はサユリの腹の中へ、ぎりぎりと食いこんだ。

「ううッ、ああッ、く、くるしい！」

サユリは咽喉をふくらませてうめいた。呼吸が荒くなる。

力まかせの縄じめによって、腹の肉がむごたらしくくびれた。縄が埋没して見えなくなるほどの強さだ。

腹の皮が裂けて内臓がとびだし、腸がちぎれるかと思うばかりの苦痛だった。

サユリは目がくらんだ。

「ゆるしてッ、あ、あなた！……わたしが、わたしが悪うございま

した！」

きれぎれのかすれ声で、サユリは哀願をする。

相手は狂人だ。復讐鬼だ。なにをされるかわからないのだ。

「いくら詫びても、もうおそい。さあ、もっとわめけ、泣け、吠えろ！」

春也はサユリの顔の前に唾を吐きつけて毒づいた。

ひょいと腰をかがめると、床に投げだしてある皮鞭をつかんだ。

「さあ、いいか。まず、こいつを食らわせてやるんだ」

その皮鞭をふりあげ、サユリの前で、ひゅうッと空鳴りさせた。

サユリの顔がのけぞった。二つの乳房が、脅えたようにゆれた。

「ひえッ」

と息をのむサユリ。

だが、無防備にさらけだされた肉体だった。このおそろしい皮鞭を避ける術は、何も持たない。

ピシリッ！——

むごたらしい音が、サユリの肌にも鳴った。すさまじい勢いでサユリの肩さきにも打ちおろされたのだ。

「ひいッ！」

絶叫がふきあがった。全身が、ぎくりッと硬直した。

気の遠くなるような激痛だった。手足の指さきまでしびれた。

たちまち、サユリの白い肩に、一条の鞭痕が走った。あぶらののたまる肉づきの肩に、血をふくんだ赤紫色のアザ。その鞭痕はみるまにくねくねとふくれあがった。

みみずばれというには、あまりにも太く、残酷な線である。

「それッ！」

春也は、勢いづいたかけ声とともに、二度目の鞭をふりおろした。
ピシリッ！——

こんどはやや下方を狙い、胸を打った。乳房の上である。皮鞭が柔肉に弾んで大きくしなった。

「ひゃあーッ！」

獣の吠えるような悲鳴があがって、サユリの胸がビリビリとけいれんした。

その皮膚は、ことにやわらかく敏感だった。蛇のように巻きついた赤紫色の鞭痕からは、フツフツと血がにじみだしてきた。

サユリの胴と腰が、苦痛を耐えて虫のようにくねった。

「どうだ、痛いかな、苦しいか。だが、ぼくの苦しみは、こんなものじゃなかった。いまのきみの、その苦しみよりも十倍も二十倍も苦しかったんだ。——それッ！」

三度目の鞭がうなった。

びゅうん、と風を切って、サユリの乳房の下あたりに、噛みつくような激しさで巻きついた。

「きいーッ！」

サユリの裸身が踵^{かかと}からのびあがった。そしてまた、がっくりとくずれる。

焼け火箸をおしつけられるような鋭い疼痛だった。全身の血が火になった。目の前にも火花が散る。

サユリは目をどじ、きりきりと歯を噛んだ。その歯のあいだから、灼熱のうめきが洩れるのだ。

——殺されるかも知れない！……という、最大の恐怖が、サユリの心を支えていた。死にたくはなかった。十字架にくくりつけられた

こんなぶざまな格好で、こんな醜惡な化け物に、皮鞭でなぐり殺されるなんて！……

もうすこし、がんばればいいのだ、もうすこし……。この苦痛を、あと十分間も耐え忍べば、あたしの勝利がやってくる。

こんな男に負けてはいけない。辛抱するんだ、もうすこし！……苦悶の胸のなかで、サユリはさけんだ。

鼻 責 め

しかし、春也のサディズムの血は、青白い炎をあげて、燃えさかった。

ピシリッ！

ピシリッ！

ピシリッ！

嵐のように皮鞭をふるった。額からは玉のような汗をながし、嗜虐に憑^つかれた凄惨な姿だった。

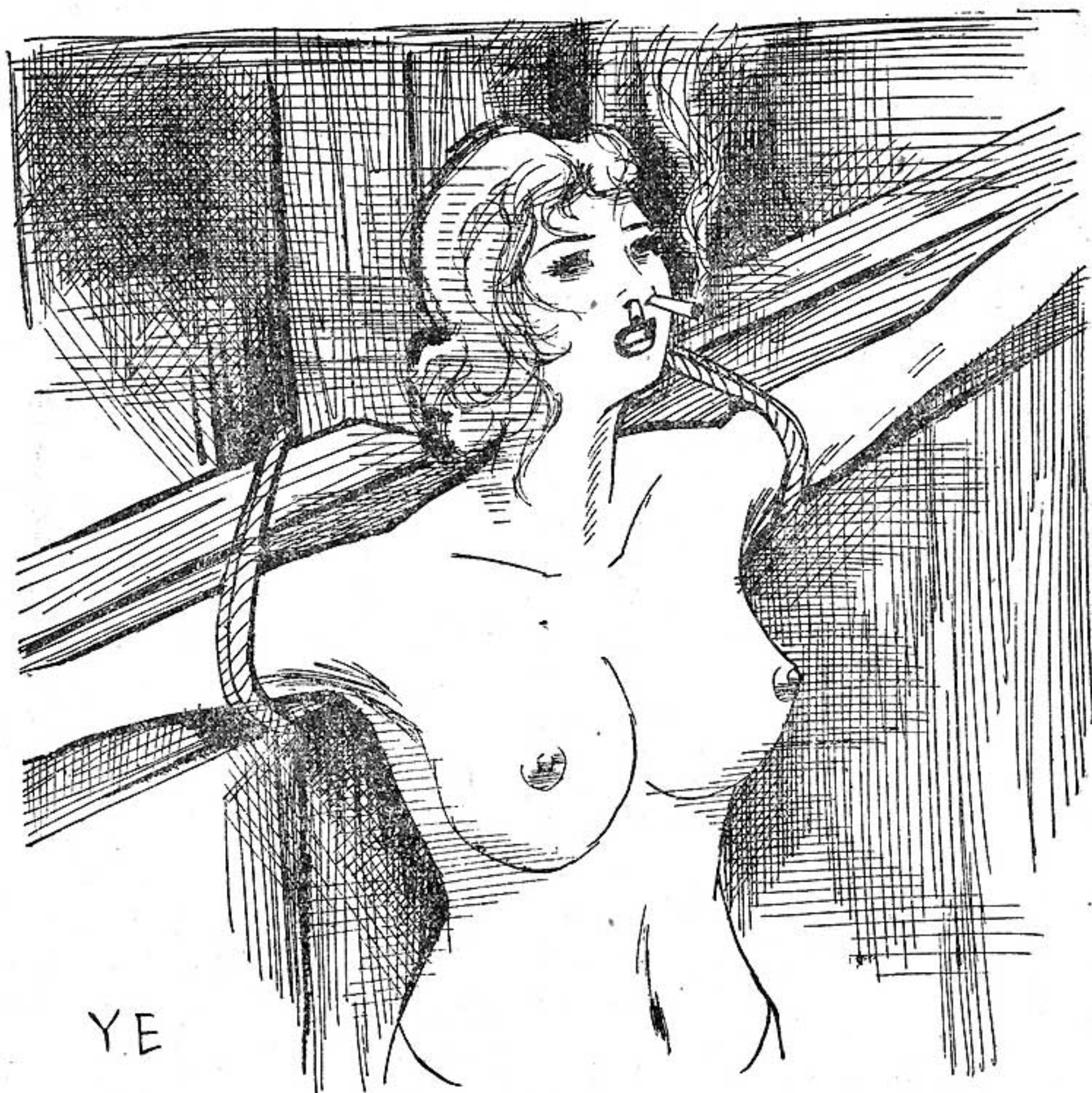
十字架にくくりつけられた哀れな裸身の、その肩に胸に、腹にも腿にも、残酷な鞭が打ちおろされた。

ねっとりとした脂肪肌、赤紫色のむごい線が、幾条も乱れ走った。

サユリの悲鳴が次第に衰え、やがて途切れた。肉体に加えられたこの衝撃に、もう声をだす気力がなくなっている。

ただ、咽喉がせつなげにあえぎ、乳房がゆれ、腹部の肉が、ひくっひくっと呼吸するだけだった。

がっくりと顔を前に垂れて、虫の息にうめいている。皮鞭の連打に



よって、全身の力を叩きだされたために、両手バンザイ型にぶら下がったその格好は、キリストの受難図に似ていた。
なまぐさい血の匂いが、この密室に充満した。

「どうした。もう悲鳴をあげないのか。泣かないのか。ふふふ……気絶するには、まだすこし早いぞ。おれの復讐は、まだ終わりにはならないんだ」

春也は、齒をむきだしてせせら笑う。
うれしくてたまらないのだ。

この半年間、呪いに呪いつづけてきた女を、いま身動きを束縛して、ぞんぶんに責めあげている。

春也は皮鞭を捨てた。

「おい。目をあけるんだ、サユリ」

平手で、パタパタと女の頬を叩いた。

それでもサユリは、かたく目をとじたままだった。

「目をあけるんだ！」

春也は怒声を発し、手の指をまるめ、サユリの紅い乳首を、ピンと弾いた。

「くうッ！」

新しい苦痛だった。

鞭の痛みとはちがった鋭さだ。敏感なところ

ろなのだ。

ピーン、ピーン、ピーン、と指さきで乳首を弾いては、サユリの表情の反応を確かめる春也だった。

乳首は豆のように堅く縮まった。

それでも、サユリは目をあけなかった。それがただ一つの抵抗のようにはみえた。

春也は舌うちし、いらだった。

「ようし、そんなら、鼻をいじめてやる！」

いきなり、右手の親指と人差し指で、サユリの鼻を、ぐいっとなじりあげたのだ。

「むむむうッ！」

鼻の穴がつぶれ、サユリは蛙かえるのような声をあげた。

鼻責めだった。形よく、ツンととがったサユリの鼻が、奇妙な息とともにねじれた。

汗で春也の指は、いくどか滑った。それでも春也は、執拗に、鼻柱をつまんでねじり、指さきで弾いた。

「こいつめ、こいつめ！」

「アア、アア、アア！」

サユリの目から涙がながれた。

眉間まへまにまでキーンと突きあがってくる痛み、ポロポロと涙があふれた。くやし涙もまじっている。

「オ、オ、オ、オ……！」

サユリは口をあけ、咽喉からしぼりであるような声で嗚咽おえつした。

春也はさらに残忍な悪戯いたづらを思いついた。

それは、サユリの鼻の穴の中に、タバコを突っこみ、その先端に火

をつけることだった。サユリのタバコ嫌いを知っていたの、陰險なアイデアだった。

さっそく、春也はそれを実行した。

「ああッ、むむむうッ！」

サユリは首を左右にふってのがれようとした。が、無駄だった。

鼻の穴の中に、二本のタバコが突き刺された。ふかぶかとねじこまれたのだ。

「ワワワ、ウウッ、グググッ！」

鼻の奥にたまらない刺激をうけて、サユリはまた涙をこぼした。

春也はマッチをすった。二本のタバコの先端に火をつけた。紫色の煙がたちのぼる。

なんとも奇妙な光景がはじまった。

十字架に縛りつけられた裸の女が、鼻でタバコを吸っている！……しかし、これは地獄の責めだった。

サユリはむせた。胸が大きくあえぎ、乳房がゆれ、絶命するかわれるほどの苦しみかただった。

「これはいけない！」

春也は、あわてた。いま死なせてしまったのはなんにもならない。春也は、火のついてゐる二本のタバコを、あわててサユリの鼻の穴から抜きとった。

「あ、あ、悪魔！」

かすれ声で、サユリはいった。蒼白な形相ぎょうそうで、せいっぱいの反抗だった。

「悪魔か。うふふふ、なるほど」

春也は、サユリの髪の毛をわしづかみにひつつかんで、ぐいと顔を

仰むけにした。

サユリの両眼が、そのために、狐のようにつりあがった。

「悪魔よ、あなたは。あのとき、殺してやればよかったんだわ！」

「そのとおり。ぼくは復讐に狂った悪魔だ。だから、これから、もっとおそろしいことをしてやるぞ」

二人の憎悪がぶつかりあった。

春也の目が、ギラギラと燃えて、いっそう血走った。唇の端をピリリとけいれんさせる。

つぎに予定してある行動に、この男の異常な神経が、緊張と歓喜のクライマックスをみせたのだ。火傷でテラテラと光った顔面が、くしゃくしゃにゆがんだ。

地 獄 図

春也は十字架の前から離れて、部屋の片隅に歩いていく。そこには、一つだけ、小さな戸棚がボツンと置かれてあった。

その戸棚の扉を、左右にひらく。

そして、中から、茶色の小瓶をとりだした。一見して、薬瓶だということがわかる。

それを、てのひらにのせながら、春也はふたたびサユリの前にもどってきた。

「サユリ。さア、目をしっかりあけて、この瓶を見るがいい。この茶色の瓶の中には、何が入っていると思うかね？……ふふふ……わからないか。わからないはずはない。きみが知っている薬だ。半年前、きみがぼくの顔にぶちまけたやつだ。……そうだ、硫酸だ」

春也の言葉に、サユリの瞳孔が慄然としてみひらいた。

「ふふふ……おどろくことはないよ。ぼくはね、半年前、きみに硫酸を浴びせられ、病院に運ばれたその夜から、いつも考えていた。病院のベッドの上で、毎日毎日……。グルグルとほうたいを巻かれた頭の中で、ずうっと考えつづけてきた。——ぼくがうけたこの苦しみを、いつかかならず、きみにも味わってもらおうとね。そればかりを考えて、ぼくはきょうまで生きてきたんだよ……」

春也は舌をだして、ペロペロと上唇をなめた。声は低かったが、おそろしい内容をもった言葉だった。

「ひいッ！」

新しい戦慄の前に、サユリの咽喉がのびあがった。口をひらき、パクパクさせた。舌がもつれて声がでない。

「何を言おうとしているのかね？……ゆるしてくれというのかね？……」

……とんでもない。ゆるすものか」

春也は、おざわぎサユリの顔の前で、硫酸瓶の栓をぬいた。

瓶の口から、うすい煙がたちのぼった。異臭がした。

「そら、鼻にツンときただろう。たしかに硫酸だよ。さあ、これから、この硫酸できみの肌を焼いてやるんだ……」

「ゆるして！」

サユリは必死の声をあげた。

「イヒヒヒヒ！」

春也は笑った。栓をぬいた硫酸瓶を、サユリの耳の横までもっていき。

脅しだけではなかった。春也は、その小瓶を傾けたのだ。

「そうら、そうら、ヒヒヒ！」

サユリの白い肩の上に、一滴の硫酸が、ポタリッと落ちた。

「ひええーッ！」

すさまじい悲鳴がふきあがった。

ポタリ、ポタリ、ポタリ……

白煙がたちのぼる。肌を焼く異臭が鼻をついた。

「ひゃあーッ！」

満身の力でけぞり、サユリの背負っている十字架が、ガタガタとゆれた。必死の身もだえだった。

「さあ、そのつぎには、乳房の上へたらそうかね。まず右の乳房からいこうか。そんなに形のいいふくらみが、ザクロのように焼けただけたら、どんな気持ちができるだろうねえ、うふふふ……」

「ゆ、ゆるして！」

その声はむなしかった。

白い隆起の上に、なんのためらいも容赦もなく、劇薬はしたたり落ちた。

白煙がジリジリと肌をなめた。

「ぐぐうッ！」

弓のように腹をつきだしてのけぞった。

「ふふふ……こうして、きみは女でなくなっていく。この美しい白い肌、隅から隅まで焼けただれて、ふた目とみられぬ化物のような身体となる。きみを抱いてくれる男は、もうこの世の中には一人もいなくなるんだ。わははははは！」

春也は顔を天井にむけて、たからかに笑った。

と——このときだった。

春也の哄笑がピタリとやんだ。その足もとが、よろよろとした。身

体が前のめりになった。

「ううッ！」

うめきを発し、春也の手から硫酸瓶が落ちた。白煙をまきながら床にころがった。

春也は両手で咽喉をかきむしりはじめた。

——く、くるしい。やられた！……

春也は、くずれるように床へ膝をついた。

胃の中に焼け火箸を突っこまれたような激痛だった。

サユリが待ちに待った瞬間がやってきたのだ。

——さっきの酒だ。くそッ……さっきの酒に毒が入っていたんだ！春也はめっちゃくちゃに胸をかきむしった。サユリの足もとに猫のよううにうずくまった。

——油断だった！……このサユリのやりそうなことだ、やられた。……

春也は顔をあげてサユリをにらみつけた。だが、手足はもういうことをきかない。

サユリの目が嘲笑しているようにみえた。

——くそッ……

春也は手の爪で床をひっかいた。ぜいぜいと咽喉を鳴らした。胃の中から血がこみあげてきた。

ゴボゴボと血を吐きながら、春也の顔色は次第に暗くなっていった。

サユリが縛りつけられている十字架の柱の下に、がっくりとのめったまま、春也の呼吸は細くなっていく。

床からたちのぼる硫酸の白煙のなかにもがく男女。これはまぎれもない、愛欲と復讐の地獄図だった。

明治性的珍聞史 (9)

巡査に化けて女房を盗む

去る二十五日の午後九時過ぎのころ、湯島天神町二丁目の仕立屋岩田徳蔵と女房のおみつが、つかみ合つての夫婦喧嘩をしてゐると、表から、「静かにせい」と入つて来たのは制服官棒の巡査。夜中に騒がしいぞと説諭しながら、亭主にさからう不埒女と女房を叱りつけると、余憤のさめやらないおみつは「私ばかりが悪くないのに」と口返答をした。すると巡査も腹を立て、「この不屈き者め!」と大喝一声、はや拘引しようとする、喧嘩の相手ながら、いとし可愛の女房のこと、徳蔵も這い出て詫びたが聞き入れず、おみつは連行された。

やむなく、あくる日にでもならば放免されるだろうと、その夜は明かした。

さて、二十六日となつて、長き日は暮れてゆくが、いっこうに音沙汰がないので、いかにも不審と、警察署から屯所まで、残るくまなくたずねたが、どこでも、そ

親子相姦

それ、人間であれば、五倫の道を守らなければどうして万物の霊長といえようか。ここに新潟県下蒲原郡舟越村の農業・相田万六という者、本年五十余歳で、女房も健

う女は拘留しないということで、徳蔵は呆っ氣にとられながらも、なおさら心配で、一昨日から仕事を休んで、迷い子の女房をさがし歩いているという。

昔と違って、この素早い世の中で、亭主の目の前で女房をダマし取るとは、さても恐ろしい世の中でございます。

(東京日日新聞第三千百一十一号・明治十五年四月二十九日)

在であるのに、ある夜、養女の松(本年二十一歳)を口説いたところ、松もまた、養父のたわごとと夢中となり、不義のしとねを同じくした。それから、しばしば情を

通わせているうち、ついに発覚して、さきごろ、親子相姦するの法律によって、二人とも懲役三年の刑に処せられた。

この松は、幼時から万六に養われ、長ずるに及んでムコを迎えて一男を生んだが、

触らば落ちん風情

毒婦で美人なのはアオイの花のように、淫婦の艶っぽいのは風前のケシの花のように、厭うべく愛すべからざるものである。

ここに新潟港古町六ノ町は、淫をひさぎ媚びをあきなう家が立ち並び、三昧の音昼夜を問わない有様である。そこで、入港の船乗りたち、停泊中に懷中をカラにし、きぬぎぬに女の薄情さを恨み、使った金を惜しむものが絶えなかった。

その同町の関津屋某の女房は、前にいう風前のケシの花のように、すでに盛りみちて、さわらば落ちん風情であったが、同氣を求める浮かれ男にそのかさされ、偕老を誓った夫を捨てて、ほんの一時の仇情けに重なる小夜衣、知らぬは亭主ばかりと、わが

事故があつて、先年離別し、以後は寡婦となつていたのだが、このような醜状があつたのは長大息の至りというべきであらう。

(郵便報知新聞第二百八十三号・明治七年三月六日金曜日)

ものの顔のふるまい。だが、しょせんは表われること、夫の知るところとなつて、ある

糞いまいましい肥の道行き

八丁堀は、ひょうきん者が出るところであるのか、毎日のように、妙なのが現われます。

これは、岡崎町一丁目の金子兵助の後家のおはつて、十三になる娘もあるいい婆々、ちいで、葛西のオワイ、本とうは下肥取りで、いやに、おいのある鳥蔵という男と臭い仲になり、肥え船の水も洩らさぬ契りをこめて、ついに懷妊し、今やウンと力んで産み落とすほどになりました。

夜、迫って、その黒髪を切つて、親元へ預けることとなった。

すると女房、前行を悔いたのか、取りのぼせたのか、腹を切つて死のうとしたが、傷は深かったものの死にきれず、姦夫も昨今縛について獄に下されたという。

奸淫の懲役に処せられると知りながらも、なお、あとを絶たないのは愚人の多いことと嘆かれる。(東京日日新聞第六百七十二号・明治七年四月二十七日)

鳥蔵は、家に女房も子供もあるのに、お初の家へばかり来ているゆえ、鳥蔵の女房は左ねじりより太い角を出し、あの野郎に小便されたのが肥しくって堪らないから、雪隠づめの掛け合いをやろうと、葛西から糞骨折って出て来ると、いつかお初は鳥蔵と道行きと出かけて行方知れず。そこで唯今大悶着というが、こんな屁のようなことでも書きました。(読売新聞第四百七十七号・明治九年八月二十六日)

口中へ短刀を突っ込み



本郷三丁目の飯島安五郎という人の養女おしんが、元の夫、喜三郎に殺されたそうだが、いったい、この喜三郎は、常州真壁郡市野辺村の白沢与兵衛という人の二男で経師職であったのを、おしんのムコに貰ったのである。ところが、わがまま者で、養父母の教訓を少しもきかず、夫婦仲も円満に行かず、いつも家内が不穏であった。

媒酌人がたびたび意見をしたが、とにかく無法ばかり言うので、とうとう、金をいくらかやって離縁して、そのことを扱い所へも届け済みになっていた。

ところが、どうした心得違いか、二月十一日の夜中、おしんの家へ忍び込んで、短刀をおしんの口へ突っ込んで殺そうとしたが、おしんが大声を挙げたので、両親が飛んで来た。

見ると、ムコ殿が、七首あぐらを持って立っていて、おしんは血だらけになって死んでいる。仰天して知らせたので、すぐ河野某という巡査が駆けつけて召し捕ったが、いずれ打ち首になることだろう。

(東京日日新聞第九百三十三号)

マゾヒストの手紙より(4)

谷 貫 太

今回は、ちょっと珍しい傾向の手紙をご紹介します。元

来、フェチシズムとは、一般の概念からは、全く性的に興味を持たれない種類の品物に対する性的狂崇を指すものですが——この意味から言って、下着、肌着、経血、脛などへの崇拜や愛好は、純正なフェチシズムとはいえません。フロイド流に、すべての物象に対して性的関連を仮定したりすれば別ですが、私は、脚フェチシズムにおいても、太ももに対するものより、つま先に対するもののほうが純正だと思います。

その意味で、私はここにお知らせする糊フェチシズムは、面白い現象であると思います。

この手紙は、一九五七年に書かれたもので、相手の女性はサド的な傾向のある二十五歳の会社員、独身です。筆者は三十三歳(当時)の自由業、独身で、とくに身体が大きく、肥満型でした。

この手紙は、固有名詞を伏せて発表する許可を得ております。

糊に対するフェチシズム

第一信 (男より女へ) 一九五七年二月発

——前略——

僕が、この間言いかけて、ついにおしまいまで言い出すことができなかったことを、決心して手紙に認める。もう、君と交際を始めてから一年になる。その間に、お互いの秘密は全部なくしてしまおうと、何度も話したね。けれど、僕は、ここにいま書くことだけは、どうしても言い出せなかった。男はけっきょく、思い切って、ということが出来ないのかもしれないなどと思ってみるのだけれど……。

僕が、十二、三のころ、田舎に^{いなか}住んでいたことは前にも話をしたと思うけれど、ある雨の降った日の翌朝、急ぎの郵便を出してこいと父に言いつかって、自転車で郵便局にゆく途中、赤土にすべって、僕は道のすみに掘ってあった直径二メートルぐらいの汚いどろ水の一杯に



なった穴にころげこんでしまった。その穴というのは、ずいぶん深くで、そのころの僕が、立ってちょうど胸あたりまでどろどろの水が来るくらい深かった。

びっくりして、僕は助けを求めて大声をあげたけれども、不幸なことに、その近くには家もなく、人も通らない。暴れるうちに、下にたまっていた泥と、上ずみの水がまざってしまって、僕の下半身は、濃い泥沼のような水に浸ってしまっていた。僕は、独力で穴から抜けようと努力したが駄目だった。十分ぐらいも経っただろうか、腰から下が冷え切ってしまった、尿意をもよおして来た。

けっきょく我慢出来なくなって、僕はそのまま泥の中に用を足してしまったが、暖かい液体が、放出感とともに生ま暖かく下半身の下着一面にしみとおったとき、想像もしなかった快い感覚が僕を包んだ。

その時は、僕は尿と泥との関係で、そんな気持ちになったのだろうと思い、二、三日たって、自分で、泥をなすりつけて尿を出して見たが、所期の結果は得られなかった。

次に、これは、尿が下着にしみわたることが原因かと思って、わざと夜尿して、母に嫌というほど叱られたこともあるが、それでも先日味わった、あの意味深長な快さは感じられなかった。

いろいろと試しているうちに、泥の中に下半身を浸けることが、一番必要なんだということに気づいた。

ここまで書いて来たが、どうも君に軽蔑されそうな気がして来た。一旦筆をおいて考えることにする。

(用紙が変わって)

昨日書きかけたものの、つづきを、やはり書いてしまう。出す出さないはまた考えればよいからと、自分で言いきかせながら。

考えてみると、泥水におちた時の感じというのは、僕の生まれて初めての性的な感覚だったわけだ、と、いまは確信している。

これまで、君ともたびたび関係を持ったけれど、はっきり言うと、あれだけでは僕は不満なんだ。君に先日ちょっと話したように、僕には、世間でいうマゾ的なところがある。それも近ごろでは、だんだんと強く意識するようになった。

僕は、昨夜、布団のなかで考えた。考えたというよりは、むしろ夢想したというほうが正しいと思う。君は、手に細い竹のムチを持って、僕を追いつめる。僕のうしろには、大きな穴があって、そこには、なんだかわからないドロドロしたニカワのような液体が一杯になっている。君は、一步、一步と僕を追いつめる。もう一步というところで君は、突然に物凄いい声を出して、手にしたムチで打ち掛かって来

る。僕は、あっと思う瞬間に、その穴におちてしまう。立ってやっと首だけが出るくらいのその穴から首だけ出してはい上がろうとするけれども、身体が言うことをきかない。何かに縛られているようだ。

そのうちに、僕の衣類は、その訳のわからない液体のためにとけてしまつて、液体は僕の身体に直接へバリついてしまう。液体のなかに何か生き物でもいるのか、気持ちの悪い、モソモソした感触が、僕の下半身に感じられる。背筋にふるえがはしつて、僕の身体は硬直してしまう。

すると、覗き見している君は、気味悪い声で言う。

「そのなかに、私の手が入っているのよ、私の手だから、うごくわよ。いまに悲鳴を上げさせてやるから」

君は、この世のものとも思えないカン高い笑い声を立てながら――

怪談じみているけれど、うしろのほうの半分は、たしかに夢だった。ハッと目がさめてみると、グッショリと汗をかいていたのだから。

僕は、この手紙で、ついに書いてしまった。君が、同情してくれるか、嘲笑うだけなのか、深刻に考え込んでしまうのか、それは、この手紙と一緒にいけない僕にはわからない。けど、僕は少なくとも、君が、理解だけはしてくるよう祈っている。

こんなおかしい男！と思われても、僕はいつまでも、僕の心に巣食っている、このふしぎな泥の魅力にとりつかれていることをかくしつづけることは出来ないと思うから。

書きついでに、このごろの症状を少し書いておく。どうせ笑われるなら、と思つて。

先日まで、家のなかに一人でいるチャンスがなかったから、ただ考えるだけだったけれども、やっと、この間、家中の者が、皆でナイト

ーを見に行つたときに、考えておいた実験をやつてみた。

まず、ふのりをたくさん買い込んで、――一軒では不審がられると思つて、七軒から少しずつ買ったのだが。それを溶かして、フロ桶に流し込んで、それに浸つてみた。ところが、僕は気付かなかったが、ふのりというやつは、とけている時は水みたいなものなんだね。

がっかりした僕は、メリケン粉を買つて来て、洗面器やボウルのあつたけに糊をつくつた。もっとも、堅くなりすぎたことと、熱がさめないの、出来上がりに五分の一ぐらいの水を加えたのだが。それをシャモジで全部、ふのりを流したあとに流したあとに流し込んだ。

今度はよさそうだと思つて、裸になつてフロ桶の下から四分の一くらいにドロドロとして糊のなかに、ソロソロと、期待をもつて入つた。この結果は理想的だった。

とにかく、僕は、二、三十分の間、その生まぬるい半透明な液体のなかで、楽しむことが出来たのだ。

始めには、そんなことまでは考えてもみなかつたけれど、後始末が大変だった。

まず、一旦糊のついた木製の桶が、どんなに洗にくいものかということを、僕は予期していなかった。それで、皆が帰つて来た時には、やつとこのことで、元通りになつたばかりだった。その日に限つていつも不精している僕が、風呂たきをやつたので、皆はびっくりしていたけれども、僕にとっては、もし糊の匂いでも残っていたら大変だ、という心配が腹のなかにあつたからのことだった。

この新しい方法は、桶全体に糊を入れるので、なかなか次の機会がなかった。そこで僕は、頭をはたらかせて、便利な方法を考えついた。それは、風呂に入るときに、前もつて用意していた糊を全身に塗

りつけて、自分で摩擦することだった。身体中を摩擦すると、だんだんと興奮がつよくなってゆくのがわかるから、この方法は手軽で、たびたびかかれてやってみたものだった。

と、こういうわけで、僕は、いまだに、この妙な遊びから見放されていない。あまり露骨な表現で、君の顔を赤らめるような結果になるかも知れないけれど、このことだけは、どうしても知らせるべきだと思った。もし結婚してから、こんな妙な癖があることがわかって、君が、世間体や愛情から、別れるに別れることも出来ずに、一生を過ごすかも知れないと思うと、僕は、そんな不幸に君をあわせたくないと思うからだ。だから、よくわかってくれたまえ。性に関しての不満は、夫婦生活を決して円滑なものにしないことは、君もよくわかってくれると思っている。

もし、君が愛想づかしをして、僕との交わりを断つのだったら、一度はその意思表示をしてくれたまえ。それと、どんな結果になっても、君は、この手紙の内容は、どんな人にも他言してほしくない。精神的な愛情では、僕は決して君に劣るとは思わないんだが、いや、むしろ、そう思わないからこそ、僕は、この手紙を送る。

君が、同情でなく、よくわかってくれることを心から希望して。

——以下略——

第一信への返信（一九五七年）

——前略——

こんなことが、もしお父様やお母様にわかったとしたら——と思うと、ゾーッとしています。わたしは、いままで、あなたがこんな変態じみた悪癖を持っているとは夢にも思いませんでした。それに、私た

ちの子供に、こんな不潔な遺伝が、もし、つづいてゆくとしたら。

ともかく、私は、結婚を前提としての、あなたとおつき合いをご遠慮させていただきます。大変失礼なやり方かも知れませんが、もうしばらくの間、お目にも掛かりたくありません。

これまでに、いろいろとさせていただいたことは忘れられませんが、私はやはり女です。恐ろしい影のうつつているような未来には、とてもひとり立ち向かう勇気がありません。

あなたとお別れすることは、大変悲しいです。しかも。こんなことが原因になるなんて、私たちは、きっと誰かの呪いをうけているのです。お手紙はここに同封してお返しいたします。そうすれば、あなたの秘密を知っているのは、わたくしだけということになりますから。もちろん、わたくしも、一日も早く忘れるように努力いたします。大変失礼なことのみ書きつらねまして、ご無礼の点はお許しくださいます。

もし、あなたが病院に行つて、その癖をお直しになれるのであれば、わたくしは、出来るだけのお助けをいたします。ぜひ、そうなさってください。これは、私だけでなく、あなた自身にとっても必要なことではないかしらと思います。

——以下略——

こうした理由で、彼らの仲は終わりました。珍しい形のフェチズムではありますが、フェチズムの現象が、いかに、ふつう一般の人たちにとって、不可解なものであるかのよい例です。彼は一九六〇年二月、ついに、理解のある奥さんを貰いました。彼は私に、最早不用になり、かつ、置いておくべきでないものとして、この二通の手紙をくれました。

犬は一番忠実な家畜です

しばらく、フェチシズムの話がつづきました。次に、マゾヒズムの正統派というか、本格派の手紙を、お知らせいたしましょう。

一九五八年に出された二通ずつの往復書簡です。男は、某製紙会社員、静岡県、三十歳で一六〇センチ。女は、某社社長の二女、東京都内、二十六歳で一五三センチ。ともに健康で、精神病、神経症のいずれの影響もありません。

第一信（男より女へ）一九五八年二月

——前略——

私は、あなたを女王として崇拜します。女王は、絶対的な権力をもっているものです。私は、あなたを訪ねるときに、必ず、それで打って貰うための、真紅の皮の鞭を持参しましょう。これは、犬を調教するときに使うものです。あなたは、犬のつける首輪をはめて、ヨチヨチと歩かせる私の姿を、きっと憐れみの気持ちで眺めるでしょうが、私は、こんな元来の甘露の中にひたり切ることが出来るなら、少々の犠牲はいりません。

犬は、一番忠実な家畜です。だからといって、あなたは、鞭を手離さないでください。鞭は、召し使いと家畜にとって、何よりも強い支配力をふるうものですから。

私は、いま、走行補助器を作っています。これが出来たら、私は、あなたの前で、一時間二十キロの早さで、何時間でも走りつづけます。その器械は、自転車の車輪のようなものと、タンクのキャタピラを

まぜ合わせたようなものです。これによって、あなたは動かずに、私を追い立てることが出来ます。その略図をここに同封します。（略図は筆者の手もとにないため省略します。）

ご意見でもおきかせください。

——以下略——

この手紙に対しての返信は、十日後に出されています。

第一信への返信（女から男へ）

——前略——

図面をよくみると、面白いプランがつぎつぎに浮かんで来るわ。

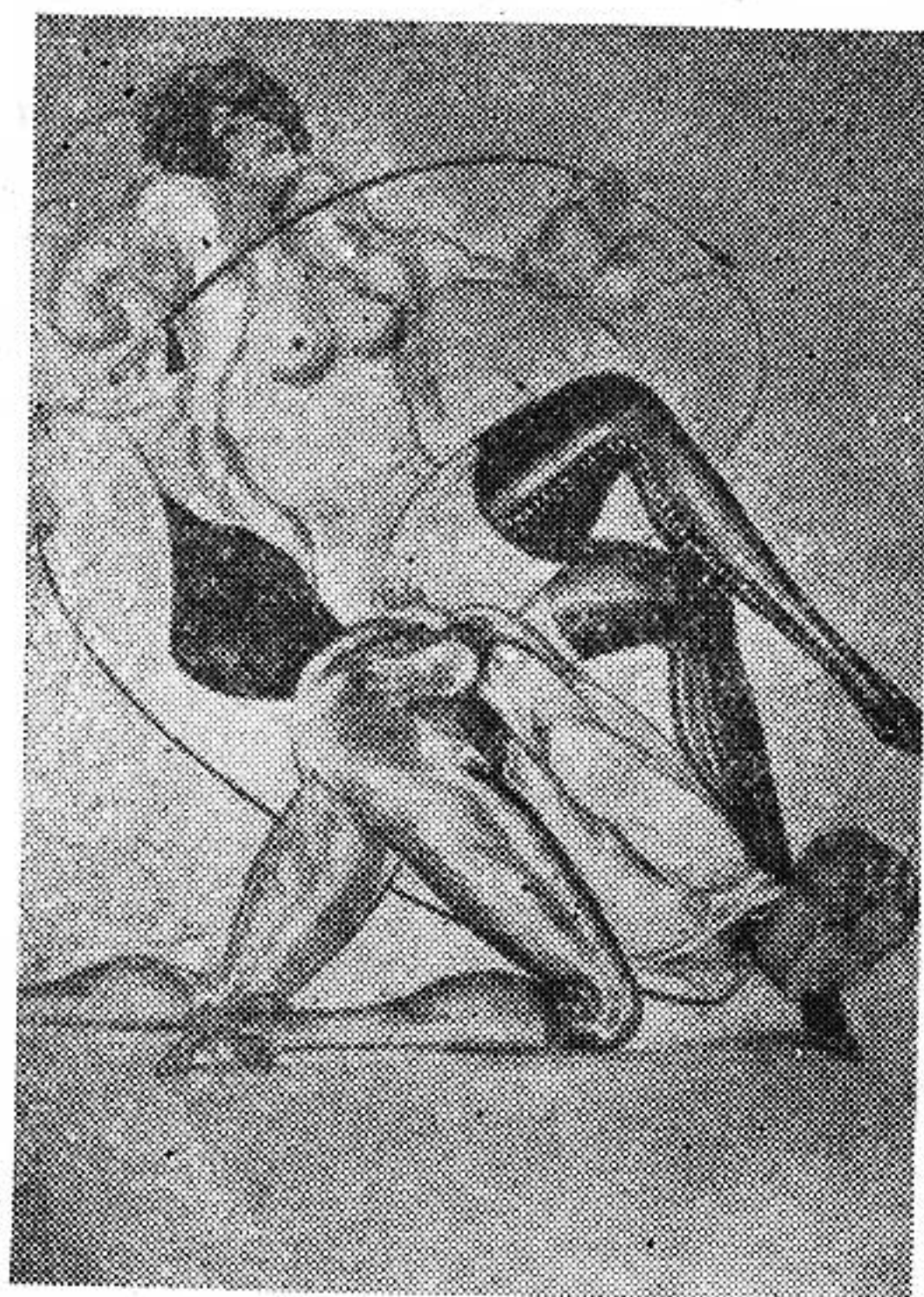
私は、この器械を使って、あさましい姿で追い立てられるお前のごきを、８ミリに映しておきたいと思っているのよ。そして、別の方法で、お前を屈服させておいて、そのフィルムを映写するのよ。きっと、お前は、心と身体と双方から来る苦しみに、許しを乞うでしょうが、私は許しません。

もし、お前が、わがままを言い出すようだったら、私は、別の男を連れて来て、お前の前で普通の関係をしてみせてやるわ。そうすれば、いくらお前でも、お前が私の恋人でなく、単なる家畜だということに身に沁みてわかるだろうからね。

その男は、逞しい白人の男なのよ、顔もハンサムだし、力も強いわ。お前のようにやせて貧弱な身体ではないのよ。

そういうことに不満をお前が示すのなら、私は一番ひどいお仕置きを考えているのよ。それは、その男に、お前を打たせるのだということとは、すぐわかるでしょう。

部屋の柱にくくりつけられているお前を責める男の姿をみながら、



この手紙を読んで、注意しなくてはならないのは、白人の男性の登場ですが、ここで、さらに重大なことは、この白人男性は、この場合、存在していないということです。つまり、そういう

私は、奇妙に興奮してしまうでしょう。一度、ぜひ、やってみたいと思っ
ているのよ。
それに、ずっと前にお前が、嫌だといったこと、あれもやってやるわ。でも、一度やられると、忘れられないそうよ。どんなことでもやらされることを運命だと思うそうよ。では、また。
一週間に一度は、手紙を書くこと。そのうちにお前の望みや、やってももらいたくないことを、必ずくわしく書いておくこと。私は、それを全部やらせるわ。

場面を、お互いに空想し合うことによって、また、それがいかにも実在するように書くことによって彼らは、それぞれに充足感を得ているのです。多かれ少なかれ、マゾヒスト、サディストの書簡には見られる公然の秘密です。多くの場合、双方が、その架空性を知っているのです。

さて、男からの第二信は、次のように述べております。

第二信 (男より女へ)

——前略——

このあいだは、ずいぶんひどい目にあわせてくれましたね。ほかの男に打たせるなんていうことは、考えられない残忍さです。

でも、私は、苦しむ私の姿に、十分満足して、床に起き上がっているあなたを見ることによって、多少救われました。私の苦しみが、あなたの慰めになるということが、私を完全に魅了したのです。

また、書きますが、あなたの自由な発明や考案にたまらない気持ちで一ぱいです。この次には出来上がった器械を持ってゆきます。あれから、また考えて、私の局部を緩慢に圧迫し、クサリにつなぎとめて、いやでも走らねばなくなる小さなアタッチメントをつけました。きょうは取り急いでいますので、また、次に書きます。

前記の手紙に対する返信 (女より男へ)

明後日の夕方から夜中までのあいだ、お仕置きをするから、よく身体を洗っておいで。

こんどは、家の地下室を使います。少しカビ臭いけれど、お前には、ちょうどよいところです。一メートルの皮鞭と二メートルの皮鞭

とを一緒に使うつもりで、きょうからタップリ油をくれてあるから、覚悟していなさい。

お前の作った器械は、点検したうえで使います。このあいだのように、悲鳴をあげても知らないよ。とにかく、全部で、三十回は打つつもりでいるから。

黙って、地下室にゆき、裸で正座してまちなさい。

四人遊びから生まれたもの

以後の通信は手もとにありませんが、この二人が、その後、一九六〇年一月から往復した手紙を、次にご紹介しましょう。

それは、女から男への、こういう手紙で始まっています。

傷を気にするなんて、おかしいと思わない？ 当たり前のことじゃないの。人並みに、ほかの男が一緒だったからといって、不平をいうなんて、とんでもないことだったことぐらいわからないものかしら、と私は思ってる。

M子さんだって、同じ意見だというのよ。

昨日、Mさんと、ご主人と、私たちと四人で遊ぼうということが決まったとき、一番賛成したのはお前じゃないの。四人で遊んでいるうちに、ああいう風になってしまうのは、初めっからわかっていることじゃないの。それを途中から、ブツブツ言って帰ってしまうなんてことは許せない。

とにかく、明後日の夕方、いつものように、地下室で待っているから、必ずおいで。ただし、Mさんのご主人は絶対に一緒ではないか

ら、やきもちをやかないこと。

時間におくれたら、一分ごとに、一鞭ふやすから、そのつもりでね。

とにかく、この前日に、面白くないトラブルが起こったこと、それがどうも、乱交に至ってしまったことに原因があるらしいこと、そして、この男は、それをいかにも憤慨していること、さらに、女は、そんなに、事態を重要に考えておらず、男の気持ち、単なるわがままとしか考えていないこと、などが察せられます。

事実、当事者の話では、従来、しばしば、彼らの部屋から、うなり声や鞭の音、叱声などが洩れてくるので、隣室の夫婦が怪しみ、ついにその遊びの内容を知り、よせばいいのに、一緒に仲間に入れてくれということになり、四人で、あるとき遊んだところ、この女が、隣室の主人を縛ったうえで仰むけにして、その上にまたがったのでした。それを見た男が、責められながら、不服を言ったので、それに腹を立てた女が、隣室の夫人の前で、その夫と関係してしまったのだそうです。

男は、筆者にこう言いました。——もっとも、これは割合最近に属することなのですが——僕たちマゾヒストにとって、女主人というものは、絶対的な存在なんです。それだからこそ、その虐待に耐えることが、かえってよろこびにもなるわけなので、女主人が、単なる異性だというだけなら、実をいうと、興味はないわけなんです。それをあの女は、お構いなしに、動物的に情交をとげたのですから、僕にしてみれば、大切な妻を寝取られた、女の特殊は心理の世界さえも、ほかの男との共有になるんだという感じがして、耐えられなかったのです。もうそうになると、痛さは、完全な痛さにな

り、凌辱も、ただ嘲笑するためだけの凌辱となってしまうのでした。聖像を汚されたような気持ちとは、きつとあんな時の気持ちのことを指すのでしょうか。この男は、つづいて返事を送りました。

男から女への最終信

端的に申します。僕は、君と決別の時期が訪れたことを、知りました。最後に僕は、おっしゃる通りに、指定のところに参りますが、それは、最後の一度だということを、前もって断わっておきます。

その当日、M子さんという二十五、六歳の隣家の主婦と、手紙の相手の女とが、寄ってたかって、彼を責めさいなんだということです。M子さんという人は、戦争中は勤労動員で陸軍省に勤めており、時には、休みを利用して習志野あたりに乗馬に出掛けたという人で、そのころ士官に貰ったカーキ色の乗馬ズボンや鞭、長靴などを、まだ持っており、その日は、そういう服装に身を固めて、彼を吊るしておいて、淫虐の限りをつくしたということです。憲兵たちの無残な尋問をよく知っているというM子さんの仕置きは、本当に「身体にきく」というほどのものだったといえます。

そしてその結果、彼はほとんど声も出せないほどにいじめつくされて、放免されたのですが、皮肉にも、この日から、Mさんと、彼との秘密の交友が、始まったのです。彼は、Mさんから貰った——これはごく最近に属します——手紙の一通を私に示しました。

第二の女性から男へ

私は、ひとりで退屈な午後、よく扉を閉めて、乗馬服を着てみま

す。それは、お前も知っている通り、むしろ軍服なのです。身体中がひきしまるような興奮を感じます。そして、部屋のまん中に、ゴロリと横になって目をつむっていると、私の股の下でビクビクとけいれんしていたお前の肉体を感じているような気持ちになります。グイと、拍車のついた長靴で腹を締めてやると、お前は、その痛さで、ブルンと身体をひきつらせるのです。不安定な匍匐の方のために、私の身体が前後左右にゆれて来ます。私が鞭を振り上げると、お前は「勘弁してください」と言うわね。

でも私は、情け容赦なくその鞭をうしろ手にお前の尻に当てるわ。ピシッという軽い音と、たしかに応えて来る肉体の手応えが、私の下腹部に異様な呼びかけをします。堅い皮革の長靴の胴からも、やがてお前の体温が伝わって来るのです。

そして私は、ただわけもなく、これまでに知ったどんな男を臥せっているときよりも、男を身近に感じるのです。私は、たまらなくなつて、長靴の胴を鞭で叩いてみます。その音は、とても貴重なひびきを、小さな私の部屋にひびかせます。

お前からも、私に乘られたこと、こうしてほしいということ、吊り責めの日の苦しみと恥ずかしさなどを書いてください。私のひとり寝の慰めともなるように。(註II M子さんのご主人は、建設土木業の会社に勤めているので、しばしば地方に出張する由です。)

女騎手と人間馬についての記録や資料、あるいは手紙は、大変に数多く手もとにあります。これは、期せずして、人間馬と性感の不可解な関連を明瞭に略記しています。その意味で、あえてここに紹介いたしました。

(蜂氏に——旧住所で到着します)

全身くまなく刺青した男

千石仙太郎

昭和三年というから、今から三十何年か前

のことである。頭といわず、顔から胸は言うまでもなく、手足の先まで、一分のスキもなく刺青をしているので、有名な男がいた。村上八十八という人で、そのころはまだ東京市外といっていた滝野川に住んでいた。作りそこなった埴輪に、焼け火箸でベタベタ痕をつけたような感じだと、会った人がみな、いつていたのだから、とにかく凄惨な刺青であったものだ。

その動機というか、いわれというか、それがおもしろいので、書いてみよう。

浮き沈みの前半生

村上さんは安政四年生まれで、父親というのは、丹波屋という建築請け負いと人足の元締めをやっていた。だから彼も、家業をつい

だわけだ。

先祖は、人皇五十六代の村上天皇の出で、いつごろからか臣籍に下った。南北朝のころ吉野山で、護良親王の身代わりに立って討ち死にした彦四郎義光の後裔だといふから、いわば名門といったところだろうか。

彦四郎の後胤の村上鹿之の代から数代は、丹波の国の後部というところに住んでいたそうだが、喜久という者の代になって、弓矢取る身の窮屈さに、フナリと江戸に出て来て、人足元締めを始めたのが、丹波屋の元祖。それから五代目が八十八さんの父親だった。

父親は、阿波藩や薩摩藩などに出入りしていたが、彼の七歳のときに死んで、それから四、五年たって丹波屋もつぶれてしまった。

ところが、手広く稼業をしていたお陰で、八十八さんは、父親の死後も、世間の荒い風

にも当たらず、成長できた。

だが、後見人の放蕩がたたって、十二歳になったとき、とうとう破産の憂き目に会う。

それから、あっちへ一年、こっちへ二年といった具合に渡り歩いているうちに、どうにか一人前の大工の腕を覚えた。

ちょうど明治十七年、上野に勸業博覧会が開かれるとき、その建築を請け負って、どうやら家業再建の緒についた。そのうち株に手を出して、また元の木阿弥。

たまたま日清戦争が起こったので、軍夫に応募して大陸に渡り、遼東の野を駆け回り、砲煙弾雨の中をくぐったが、流れ弾一つ、かすり傷一つ負わずに凱旋した。

そして翌年の二月、今度は、そのころ新領土となった台湾に、土木請け負い業として渡った。有馬組の百人の長として卑南に行った

のである。

この卑南には、仙台の第二師団の、ある連隊が駐屯していたのだが、生蕃の事情に通じないので、討伐が思うにまかせなかった。

八十八さんは、軍人ではないが、国に尽くすはこのときとばかり、同志三人と、敵情偵察のために、ある夜、蕃地深く潜入した。

入れ墨で蕃人と仲よし

さて、甘藷畑や山谷、深林を押し分けて二



十里ばかり行ったとき、丈なす雑草を踏んでみると、横合いから突然ズドンとやられた。アッという間に、同志の二人とも弾丸に当たって倒れ、八十八さんは蕃人に取り囲まれてしまった。

もはやこれまでと、日本刀をふりかざして群がる蕃人の中に切って入ったが、なにしろ背より高い草むらの中、しかも相手は地形になれていて駆け引きがうまい。多勢に一人というところで、とうとう捕虜になってしまっ

た。そして、フジヅルで縛られて草むらの中に一週間あまり、水も飲まされずに放っておかれた。

ところが、ここに奇跡が起こった。というのは、彼の刺青が役に立ったわけである。

蕃人はもともと刺青をしていた。ところが八十八さんの刺青は、二十三歳のとき、八丁堀の矢の倉という絵師に背中一面に彫ってもらった滝夜叉と光国の絵だものだから、これは見事なものだった。

蕃人は、自分たちの幼稚な刺青と比べてみて、驚異の目を見張ったらしく、八十八さんをつかえたものの、殺そうとしない。

そこで八十八さんは一計を案じた。見張りの蕃人をつかまえて、手真似足真似で、刺青の道具を借してくれと頼んだ。意味がわかったのであろう、やがて蕃人は、刺青の道具を持って来て、少し手の自由がきくようにフジヅルをゆるめてくれた。

八十八さんは、さっそく、よく見よとばかり、手の届くかぎり、ところ嫌わず、針で刺しては墨を塗り込み、痛さも忘れてやってみせると、見張りの蕃人が、にわかに奇声をあげると、八十八さんを竹で組んだ小屋に連れて行って、一杯の蕃酒をくれた。だが、一週

間というも、飲まず食わずでいたのだから、その酒を飲むやいなや、八十八さんは、その場に昏倒してしまった。

何時間かたって目がさめると、彼のまわりで、蕃人どもが男女入り乱れて踊り狂っている。しかも、踊りながら八十八さんを見つめる目には、もう悪意は少しもなかった。どうも、刺青をしたという儀式によって、蕃人の仲間入りをしたいと感違いしたらしく、それを祝って踊っているようだった。

これで命は助かったと一安心したまではよかったが、それから毎日、刺青攻めにあつた。刺青をして見せろというわけである。

そこで、頭の地肌から顔いっぱい、爪のところだけ残して、全身くまなく刺青をして、彼らのご機嫌をうかがう羽目となったのであった。

命からがら蕃地脱走

さて、こうして危うい命を助かったので、こうなったら、この辺の地形を詳しく調べて機会があったら脱走しようと決心した。だがそんなことはオクビにも出さず、鬼のような——そのころは確かに鬼のようなという感じで蕃人と接していたことだろう——蕃人たち

といっしょに寝起きし、山野に狩りをするときものこのことについて行った。

この間八十二日、アワ飯を食べて命をつないだのだが、とにかくそのお陰で、その辺の地理には精通した。そうなったら、あとは脱走するだけだ。

すると、天運がめぐって来た。三十年四月七日のことだったが、何か祝いごとでもあったとみえて、蕃人どもはドロクを飲んで、一人残らず、酔いつぶれてしまった。

好機逸すべからずとばかり、また、このチャンス逃がしたら、いつまた機会がめぐってくるかわからない。さっそく蕃舎を飛び出して一目散に、卑南に向かって走り出した。

ところが、二、三里行くと、向こう岸も見られないほどの大川にぶつかった。行きには、一滴の水もなかった原っぱであったのに、あまりの異変に、腰がぬけるほど驚いた。しかも、濁流とうとうと、凄まじい勢いで流れているではないか。

だが、このまま引き返したら、きっと蕃刀の露と消えることは決まりきっている。ままよとばかり激流に飛び込んだ。運のいいときは、なにかからなまでにうまくいくもので、どうにか、その大川を泳ぎきって対岸に着いた

ときは、へとへと。

岸に上がってしばらく休むと、あとも見ずに駆けつづけ、甘藷畑を突っ切り、草むらをかきわけて、二日目によく駐屯本部の灯を、はるかに見たときは、さすがの八十八さんも、天にも登る気持ちだった。

あとは、どうして本営に着いたが、さっぱりわからないほど無我夢中だった。

軍医の看護で、七日後にやっと体力も回復したので、駐屯大隊長に、さぐって来た蕃地の様子をくわしく報告した。これがその後の討伐に役立つところ大きかったと、感状まで貰うことになった。

ところが、病院にいるうちに余病を併発、一時は危篤を伝えられたが、神いまだ見捨てず、幸いにも全快して内地へ、三年ぶりで帰ることができた。

砂漠で出会った女

さて、こうして波乱のちに内地へ帰ってくると、全く異様な形相に、妻子の驚きは一通りではない。だが、とにかく無事に帰ってこられたので、その反面、喜びもまた深かったのである。

それから全国八十八カ所詣りなどをして

いるうちに、体もメキメキ丈夫になった。そうなる、やむを得ず彫ったというものの刺青をなんとかしたくなるのは人情。

医者にかかって、きたらしい刺青は消して貰うことにしたが、墨が深く皮に食いこんでいたので、そう綺麗にはとれない。そこで、いろいろ工夫をこらして、蕃人が彫りつけたデタラメな刺青を圖案化したりして、とにかく、いくらか見られるようになった。

「弘法大師」と彫ったのも、別に日蓮宗の信者だからでなく、刺青の圖案に困って、知っている限りを彫ったときの一つであった。

日蓮宗どころか、八十八さんはカソリックの信者で、五十年から、日曜日の教会の礼拝を欠かしたことがないくらいである。

その信仰も、なみなみならぬものがあって、八十八さんは、神様は実在すると信じているのだ。それについて、一つのエピソードがある。

八十八さんが蕃地から脱走したとき、台北から卑南へ行くあいだに、広い砂漠があった。そこでは、風の方角によって、ちょっとした木切れでも落ちていると、それに砂が吹き寄せられて、見る見るうちに、見上げるような大きな砂山になってしまいうくらい。

ちょうど八十八さんが、ここを通ったときも、ひどい風で、そんな砂山が、幾つも幾つもできたため、方向が、まったくわからなくなってしまった。

すると、前方にあかりが見えて、一人の女が手招きして、

「君、来？」

と言っている。

脱走の途中なので、疑いぶかくなっていたから、こいつは危いと考えて、近づくと、同時に、当て身をくれて、その場へ女を倒してしまった。

だが、悪いことをしたなと思いながら、五、六歩行くと、また、その女が目前に現われて、向こうへ行けというように指さして、フツとかき消すように姿が消えてしまった。

これはただごとではない、きっと神様が、女に姿を借りて導いてくれたに違いないと思つて、その方向に進んだら、無事に、本営に帰着することができたものである。

「至仁の神が、広野をさまよう私をあわれんで、方向を教えてくださいに違いありませんよ」と、八十八さんは言っていた。

それにしても、刺青が命を救ったとは、奇談というべきではないか。

星文館の評判図書

医心方房 内記

丹波頼康著・原一平訳 二〇〇円

新訂寝室宝典 一五〇円

性科学研究会編

新訂性技大鑑 一五〇円

性科学研究会編

図解初夜の性技133章 二〇〇円

竹下 泰著

図解性の百科全書 二〇〇円

竹下 泰著

決定版完全なる結婚 二〇〇円

原 一平訳

現代催眠術入門 二〇〇円

山室 規之著

図解魔術・手品・奇術 二〇〇円

小山 竜士著

絵本誹風末摘花 二〇〇円

文献資料刊行会編

★お申込みは「星文館」へ（東京都千代田区神田神保町一の六七・振替東京四八〇一番）

男性に加えられた「珍刑」

蘆 立 鋭 吉

男性喪失者・官宦

男子性器を毀傷する刑罰で最も著名なものは、中国の古代から行なわれた宮刑であろう。これは相當に古くからあったらしいが、唐代のころには全盛になり、玄宗皇帝の寵臣・官宦かんかんの高力士などは有名である。

彼は、どんな理由で宮刑に処せられたか知らないが、官宦として、後宮に出入りして、楊貴妃や皇帝の寵愛をほしきままにしていたというから、美貌と才能に恵まれた男に違いない。

このころの宮刑に処せられたものは、主として姦淫の罪によったものが多いらしいが、目には目をという、素朴に刑をあてはめる時代で、淫を行なったものが、この淫

刑に処せられたのは当然であろう。

辞書によってみても、「宮刑」とは、男子の勢を割く公刑とあって、さらにくわしい方法をしらべると、男性器を切断するところある。男根だけに及んだものか、睪丸しんじょうにも至ったものかはわからないが、清朝末期までいたという官宦を目撃したものの談では、男根だけを切除し、睪丸には至っていないらしいかった。

宮刑に処せられた男は、性行為は行なえないが、睪丸が健在なので、性欲は常人と変わらずにあったという。いや、それだけにいっそう旺盛だったとも言えるが、とにかく、その煩惱は大きかったものらしく、何にしても、残酷極まりない刑罰である。

いわゆる武陵事件で、漢の武帝に抗した

司馬遷もやはり、この「宮刑」に処せられた一人である。いわば、政治犯である彼が、男子として最も恥ずべき宮刑に処せられたということは、武帝の彼に対する憎悪の程度が想像される。

先ごろ発売された文芸春秋所載の宮刑の方法によると、宮刑の判決をうけたものは秘密の地下室に入れられ、鉄の寝台に、全裸で大の字に四肢を緊縛され、天井から滑車仕掛けになってゐる縄で男根の先を緊縛し、じゅうぶんに吊り上げたところを、鋭器で根部の背面からささと切り上げる。血しぶきが受刑者の胸や顔にかかる。もちろん死に至らないよう直ちに傷口の手当つまり尿道に管を植えつけて排尿の便を与える方法などが、手際よくなされる。二週間ほ

ど外気に触れない蚕室のような部屋で静養した後、ようやく、男子でも女子でもない「第三の性人」として世の中に出て行くのである。これらのものを宮中では官宦として用いた。

官宦は、後宮の寵姫たちの用をなす官人である。もちろん男子の性能の欠けた男だから、安全の上もない。しかし、官宦は、君側にいて寵愛をうけられるので、唐代には、自官者つまり罪なくしてみずからの手によって男根手術をしたものさえあったということである。後宮三千の美女に飽いた皇帝は、第三の性の所有者としての官宦を寵愛したらしい。

官宦は、色白く、肌は女性のように肉つきよく、髯が生えなかったそうで、やや女性化された人間が創り出された。「纏足」とか「盲妹」とかいう残酷で人工的な肉体を作り出された中国では、官宦こそは、完全につくられた性という感じである。

だから、性格は概して陰險で、讒言や策謀など好んでした。唐宋時代の宮廷の乱れには、必ずこの官宦が中心になっていたと言われている。

数十の針を刺す

公刑として、公然とこのような淫刑が行なわれた国だから、私刑をさがしたら限りが無い。『梅郷逸吏』という宋末期の稗史小説に、徐景福という長者が、自分の妻と姦通を行なったという鄭高遠という青年を捕えて、公衆の面前で、その男根に数十本の針を刺して苦痛を与えたとある。いわゆる間男成敗には、この種のものが多くあったらしい。

これも、清朝末期まで行なわれた刑罰に「抉刑」という公刑があった。これは皇帝暗殺者のような大逆徒に行なった刑であるが、刑者を、白昼広場に引き出し、全裸にした上、青竜刀で両胸の肉、両股の肉をそぎ落とし、最後に男根を切り落とす。血にまみれて苦痛にもたえる受刑者をなお引き立てて町中をさらして歩くという惨鼻を極めた刑である。これは、別名「五個所斬り」と言われている。筆者は、この惨刑の写真を見たことがあるから、写真の発明された時代に、なお残っていたということで、中国という国がかなり野蛮な国だったという

ことがわかる。

わが国の羅切刑

わが国においても、男子の性器を傷つけた刑としては、『鍋冠日親上人伝』に見えるものであろう。足利義教の室町幕府の手に捕えられた日親上人は、水火の拷問にも屈せず、為政者を罵り、妙法蓮華経をとるるので、怒った義教は、日親の陰茎に竹串の先をとがらせ火であぶりつつ油をじゅうぶんにふくませたものを、幾本か貫かせたと書いてある。それでも屈しない上人は、舌を切られ、ついに灼熱の鍋を冠らせられ「鍋冠日親」の名を後世にのこしたのであるが、日本の宗教迫害史上、最大なものと言える。

しかし、公刑の羅切刑はこれが一つらしいから、すべてに中国制度を模倣した日本も、宮刑をとり入れなかったのは幸いといわなければならない。しかし、私刑となると、この限りではない。

蜂責め、蚊責め

江戸時代の随筆『伊吹佐志藻草』の中に、

近江の森山での、姦夫成敗の私刑のことが書かれてある。

それによると、妻をはずかしめられた夫は怒って、村人と力を合わせて姦夫を捕え、赤裸になし、種々責め苦の果て、竹藪の中に縛りつけ、地酒を男の罌丸にふきつけて酒をじゅうぶんにしみこませて置き、一夜放置した。

翌朝見ると、男の全身は、何千という蚊にたかられていたが、なかでも酒の匂いにする急所のあたりには、まっ黒に見えるほど蚊が血を吸い、集まり鳴いていたという。そして男根は、甘諸大に腫張して、男は虫の息で悶えていたという。

これに似た刑は、古代ローマで行なわれた蜂責めの刑である。これは、全身に蜜を塗りつけて行なった刑罰であり、同巧異曲というべきであろう。

性的刑罰として有名なのは、江戸の鳴子の医者玄碩が、妻と情夫に加えた私刑である。二人の性器をえぐり、付近の神社の境内にさらしものにしたら、翌日、おびただしいイタチが、その傷口に蟻集していたという。

切支丹信徒の迫害

レオン・バジエスの『日本切支丹宗門史』（岩波文庫 上・中・下）は、日本の異教徒迫害の苛烈を極めた著書であるが、この中から、性器に加えられた拷問を書き上げると、相当にある。

島原の領主松倉豊後守重政は、宣教師フローレンスと親交のあった平戸の漁夫の青年ルイス弥吉を、六週間にわたって十七通りの拷問をかけた。その中で、水責め、火責めのほかに変わった責めは「スルング（駿河問）」という手足を背後に一束ねにして縛る吊り責めで、その時に、罌丸を火であぶり責めにした。弥吉は、その苦痛に耐えながら「イエス」の一語を口ずさむだけであったという。

また、家光の治下の切支丹弾圧で捕えられた島原の武士原主水胤信の処刑は、宗教史上有名な話であるが、彼は奉行所で、両手両足の指全部を切断され、罌丸に鉛の溶液を注がれて改宗を迫られたが、いささかも屈しないので、全裸で裸馬にのせられ、大路を引き回され、ハリツケ柱で火あぶり

の刑をうけた。しかし死の直前まで、烈々たる神への信念を群衆に向かって披露したといわれている。

そのほか、切支丹信者女を、白昼に全裸のさらし刑にかけ、村民に辱めさせると、筆紙につくしがたい資料が載せられている。

牢内での私刑

伝馬町の牢内での私刑は、カンカンノウとか、すってん踊りで有名であるが、町人ばかりの牢に、たまたま武士が入って来た時に、特殊のいきなりがあったことは、あまり知られていない。

従来、武士の主持ちの犯罪は、藩に引き渡したが、浪人者の場合は、町人といっしょに取り扱われた。平素、肩で風を切り、斬り捨て御免の武士も、ひとたび罪を得て入牢すると、平素しいたげられた町人たちから報復をうけるわけだ。

まず、裸にされ、禪をはずされて、その禪で背に十字のタスキをかけ、腰をかがめて、人々の嘲罵の中に、すってん踊りをしなければならぬ。

この場合、素直に承服すればそれですむが、武士の体面上、肯^{がん}じないと、囚人たちが寄ってたかって「ふぐり緊め」の責めにあう。畢丸を緊めて悶絶させる私刑である。

また、目明かしが入牢した時は、板に縛りつけて逆さにし、畢丸を蹴上げる私刑がしばしば行なわれた。

安政大獄の時、勤皇志士を多く捕縛に活躍した京都の目明かし文吉という男は、のちに志士たちに捕えられ、長野主膳の愛妾たか女たちとともに四条河原でさらしものになった。文吉は全裸にされ、陰茎に木片を挿入されたうえ扼殺されていたという。

いわゆる池田屋騒動の発端になった勤皇の志士古高俊太郎に加えた新選組の拷問も苛烈で、かつ残虐であった。

新選組隊士は、剛気な俊太郎を全裸逆さ吊りにして、ローソクの火で畢丸をあぶり、さらに足裏に五寸釘を打ち、ローソクを立てて責めつけ、ついに一味の名を告白させたという。

戦争中の残虐刑

台湾に生蕃征伐の時に、斥候として捕虜

になった日本兵が、蕃社に連行されて、蕃人たちから刺青^{いれずみ}を施された話をきいたことがある。全身、頭から足の爪先に至るまで、寸地も残さない刻明な刺青で、陰囊から亀頭に至るまで、美事な蕃地の花模様が刻みつけられていた。その兵士は無事生還して、植木職として働いていた。

筆者は、その姿を親しく見たことがあったが、震災の時に焼死したので、あの美事な皮膚が大学の標本室に残っていないのは残念である。

日清戦争の時に軍事探偵として活躍して捕えられ「炮烙^{ほうろく}の刑」に処せられた鐘崎三郎は、全裸油煎^{ゆせん}の灼熱地獄の中で、泰然自若として日本帝国万歳をとなえた剛胆さと、絶命後も萎縮しない隆々たる彼の男根を異として、清国人は、その一物を切り取って、長く保存したと伝えられている。

エチオピアとイタリアとが交戦した時、イタリア軍の捕虜の兵士数名は、男根を切断されたということが、当時伝えられた。エチオピア人は、切り取った陰茎を何本も糸で貫き、馬の首につないで凱旋の記念にしたそうである。日本の武士は、昔、わざ

わざ重い敵の首を馬首に吊るして凱旋したそうであるが、このほうが、はるかに軽便だということができる。

『肉弾』で有名な桜井忠温の書いた『刀戯』という日露戦争の記事に、日本兵の戦死体がしばしば露軍の兵の悪戯で男根が切り取られていることがあった。ひどいものになると、切り取った男根を兵士の口の中にくわえさせたりしたそうであるが、今次の世界大戦の時も、そうした性器に加えられた加虐の話は少なくない。

フィリピン¹の収容所で、戦犯として処刑された某少佐は、部下の面前で、全裸うしろ手に縛られ、垂れ下がった畢丸に、代わる代わる辱ずかしめを加えられた。額から油汗を流し、切歯して、無念と屈辱に悶える姿を、部下の兵下の兵士たちは、涙をのんで眺めたそうである。少佐はまもなく処刑されて死んだ。

生還した将兵の中には、捕虜生活中受けた淫のために性的不能者として不幸な生活を送っているものが少なくないというのは、陸海軍病院の医務官の話である。戦争の生んだ不幸な秘話である。

△アップ・ストーリー△

地下室の吊り責め

鵜 藤 恵

一、追憶の序章

そこは暗く不気味な地下室であった。

ドアを開いて右側に黒い鉄製のベッドがある。ベッドの四隅には、それぞれ鉄環の装着があった。

天井から吊り下がった太い鉄鎖は、冷たく黒い光沢を放ち、湿った地下室の空気をなおいっそう重く陰うつなものにしていた。

天井から吊り下がっているものは、そればかりではない。大きな滑車と麻縄は、裸電球の光に映えた鉄鎖の左右で、不気味な容姿をさらしていた。

その地下室に一人の女の姿があった。上背のある美しい女である。豊かな胸の隆起と、腰のくびれは、女盛りをあらわしていた。

ドアを背にして立った女の白い顔には、会心の微笑があった。

地下室の内部を見まわして、ひとり妖しい微笑をつづける女の脳裏には、過ぎし日のなつかしい思い出が去来していたのである。

三年前の追憶は、彼女、町田阿津子の渇いた胸を、泉から湧きでる清水のように豊かに濡らしていった。

が、阿津子の白い頬には、なぜか寂しげな翳りがあつた。それは、阿津子が回想に耽けるとき、きまって黒い眸に宿った。それは、阿津子の、喜悦と苦悩の交錯した影であつた。

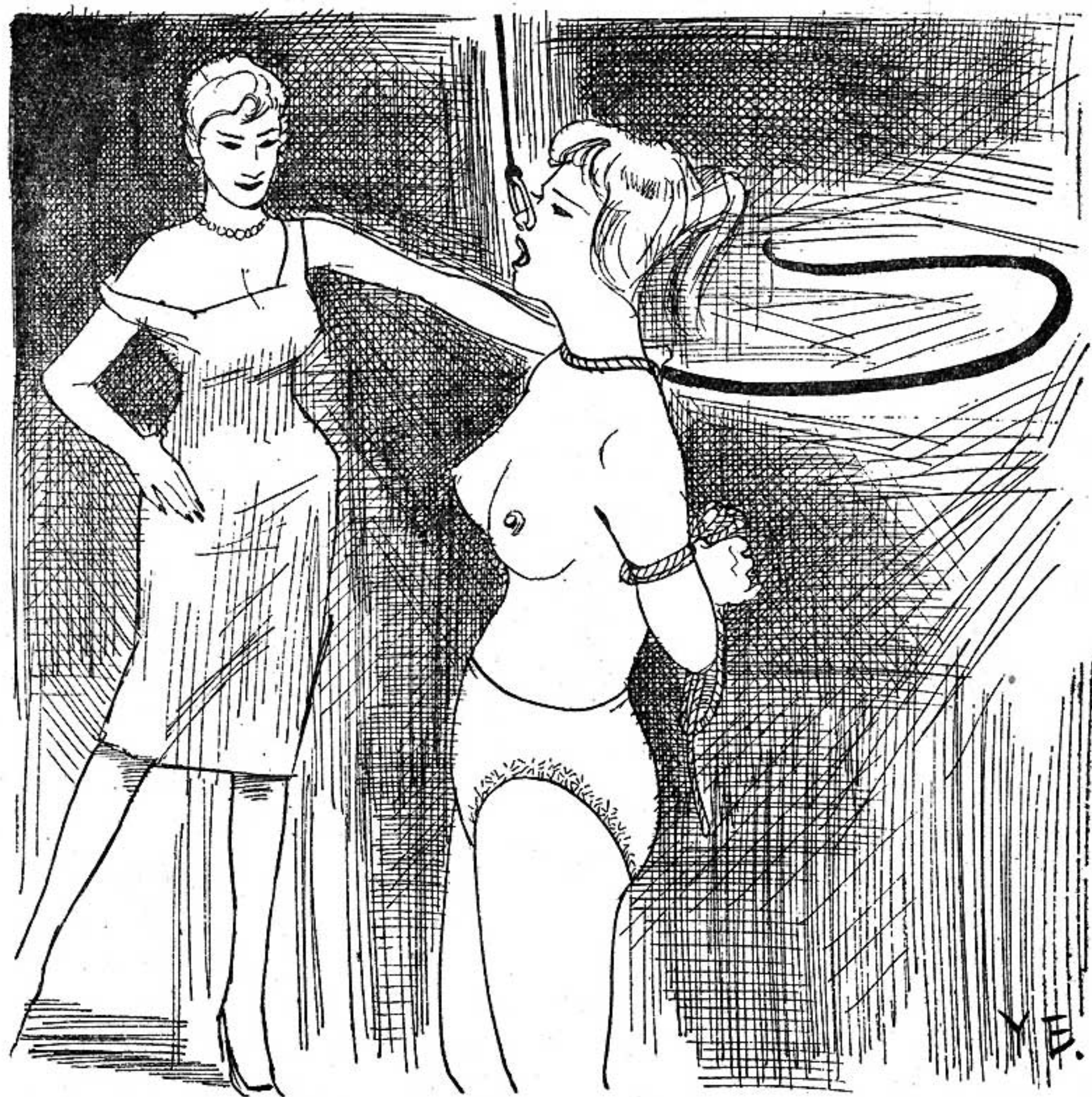
地下室の種々の拷問具が、哀れな生贄の血と涙を待っているなかで、阿津子の追憶は、波紋のように静かに広がっていった。

そのころ、阿津子は、ある事務所に勤務していた。美人のオフィス・ガールである阿津子には、一人の恋人があつた。

阿津子にとって、そのころほど楽しく、人生に生き甲斐を感じていた日々はなかった。未来に夢があり、希望があつた。

阿津子が、彼、美野瀬滋夫に、二十五歳の処女を許したのは、交際半年後の夏の日の一夜であつた。

それが、人生の岐路になろうとは、抱擁の夜、阿津子は夢にも思わなかった。美野瀬の手が、阿津子の胸に滑り、豊かな乳房をソッと握った。愛撫の手を肌を感じながら、阿津子は、ベーズを求めていった。ガチガチと二人の歯が鳴った。阿津子は耳たぶの熱くなるのを感じていた。



陶酔の後には、快い疲労と、満ち足りた心境だけがのこった。美野瀬の胸に抱かれながら、阿津子がホテルの窓から見たものは、長く尾を引いて消えた流星であった。それが彼女の前途の不幸を暗示していた。美野瀬が阿津子あてに一通の封書を投函したのは、それから数カ月のある雨の朝であった。

阿津子がそれを受け取った日も、朝から豪雨が降っていた。

雨のにじんだ角封筒の中身は、一枚のビンセンであった。

——内山美奈代と結婚します。いままでの交際は、なかったものと忘れてください。ご多幸をお祈りいたします。——

雨に濡れた一通の封書は、水を含んで阿津子の手に重かった。それは、一人の女の陥落を連想していた。

豪雨は強く舗道をうち、道行く人は、誰もなかった。十字路の隅に立つ朽ちかけた電柱の青いポスターだけが、強風のなかに躍っていた。

二、陥落の女

阿津子が二十五歳の夢多き日々を、人生の敗残者のように、一人寂しく過ごして数カ月

経ったある日のこと、阿津子は、自分の身体の変調に気づいて、ハッとなった。

(もしや?。……)

阿津子の予感は的中した。彼女の体内には、小さな生命が宿っていたのである。

(美野瀬の子!)

美野瀬以外の男を知らない阿津子にとって、それは、間違いのない事実であった。

(私は、いったい、どうしたらいいの。お腹の子は私生児なんかにしたくない!)

悲しい女の宿命であった。

悶々のうちに数日が経ち、阿津子の心は決まった。

阿津子は美野瀬の家を訪ねた。しかし、すでにそこには美野瀬はいなかった。遠地で、女と同棲しているという噂であった。

阿津子は、内山美奈代という女を抱いた美野瀬の青い顔を思った。

阿津子に残されたものは、墮胎医の門をくぐることであった。

数カ月後、ネオン輝く夜の巷を闊歩する阿津子の姿があった。彼女は、嬌声と原色の氾濫するキャバレーを、新たな職場としていたのである。

客にアダな媚態を誇り、豊満な身体を与

え、荒んだ生活の中でも、常に阿津子の胸中には、自分を欺し、処女を奪って去った美野瀬の面影があった。その美野瀬は、早くも、その女とも別れて家庭にもどっていたのである。

はなやかな職業の裏で、阿津子は、唯一の目的のために、質素な生活と貯蓄にはげんだ。唯一の目的——それは、憎い美野瀬に対しての復讐であった。美野瀬が女と別れたことを知ったとき、阿津子の心に復讐の芽がめばえた。

だが、それを破棄しなければならぬときが、思いがけず早くきた。美野瀬の死であった。結核菌が、彼の命を奪ったのだ。

美野瀬の死は、阿津子を驚愕させたが、それはやがて落胆と失望に変わった。復讐すべき男は最早、この世にいないのである。だが、やがて、阿津子の眸は再び生気を取りもどした。

(そのだ! 美野瀬には妹がいる)

小夜子といって、十六歳の美しい少女である。華奢な身体をした可憐な少女に、阿津子の執拗なまでの復讐の目は向けられた。

兄の犯した過失への懲罰を、なぜ、妹が身をもって受けなければならぬのか。それ

は、確かに矛盾していた。「復讐」の二字に憑かれた阿津子は、その矛盾に気がつかなかったのである。

復讐の対象が変わったことは、当然、阿津子の計画も根本から改変された。まず、その第一歩は適切な地下室の探索であった。

三、復讐の目

美野瀬の病没から二年の歳月が流れた。二年の年月は、阿津子の環境を一変したが、その奥に潜む復讐の炎はますますつり、衰微の影さえみせなかった。

長い間の願望だった地下室の探索も終わり、阿津子は、バーの若いマダムになっていた。当世流の表現をすれば、がめつい奴といわれても仕方のない、阿津子の一年半の渡世であった。

いまや、経済上の心配はない。復讐の時機は到来した。

復讐すべき美野瀬の妹、小夜子は、いま阿津子の家で、療養生活をおくっている。なぜ、小夜子が、阿津子の家で療養生活をおくっているのか。いきさつはこうである。

高校卒業を間近にひかえたある日、小夜子は、突然、高熱におそわれた。いまは亡き、美

野瀬の病いが、小夜子に感染したのであろうか、医師の診察の結果は肺結核であった。

その日から、小夜子の闘病生活は始まった。療養半年後のことである。美野瀬家は、ある種の事情で、地方への移転を、強要された。だが、闘病中の小夜子にとって、転居は厳禁であった。

阿津子はそこを狙った。それは、阿津子にとって「棚からボタモチ」式の幸運であった。なぜなら、阿津子は、どんな奸詐をもって、小夜子を地下室に監禁し、呻吟させようかと思っていた矢先だったからである。

阿津子は、小夜子の両親に会い、安静度が軽くなるまで世話をみよう、話をもちかけた。小夜子の両親は、滋夫の葬儀にも顔を出さなかった阿津子に、多少の疑惑を抱いてはいたが、この場合、それ以外にいい手段はなかったし、急場をしのご意味で、承知した。

そして、阿津子に、看護費およびその他の費用として、いくばくかの金を渡し、転宅の準備を急いだのである。

阿津子は、地下室探索後半年のあいだ、そこに、かずかずの責め具を揃えることに、没頭した。

その間の阿津子の親身も及ばぬ熱心な看護

に、小夜子は感謝し、阿津子をおねえさんと呼んで慕った。

——阿津子の回想は終わった。

午前零時を過ぎた地下室の空気は、冷たい。はや秋も終わりを告げ、外は冷たい木枯らしが吹く季節である。

長い追憶に耽っていた阿津子の膝は、先刻から寒さのために震えていた。

哀れな犠牲者、小夜子は、いま自分にあてがわれた部屋で、安らかな寝息をたてているに違いない。その可憐な寝顔は、この地下室に降りるまえに見てきたばかりである。

明日からは、思う存分美しい顔を涙で汚すことができるのだと思うと、阿津子の胸は、妖しい期待に震えた。

やがて、暗い地下室の階段をのぼる阿津子の足音が聞こえた。

四、苦悶の鼻責め

小夜子の涙に濡れた顔が苦痛にゆがみ、細い肩が激しくあえぐ。かたちのいい鼻には、奇妙な形をした輪がはまっていた。それは、イヤリングを改造した、阿津子考案の鼻輪であった。

鼻輪に連結された鉄鎖は、滑車から長く伸び、その端を阿津子が引くたびに、直立した小夜子の足はガクガクと震え、全身の力は爪先にかかっていた。

鼻腔は大きく開き、鉄鎖はピンと張った。激しい呼吸が地下室にひびき、十八の乙女の体臭は、甘ずっぱく、小夜子の細い身体から匂った。

「アッ、おねえさんッ、許してッ」
鼻を吊られているので唇が開き、そこから白い歯がのぞいていた。

阿津子は、苦悶の声をあげる小夜子を見つめ、なおも鎖を引いた。

「アッ、痛いッ、厭ッ、許してッ」
パンティー一枚の裸身で、両腕を背後で緊縛された小夜子は哀願する。

「おねえさんッ、許して……」
麻縄のくい込んだ細い腕は、いまにも折れそうに、背で曲がり、指は、むなしく宙をかいた。

小夜子がこの地下室に監禁されて、すでに三日経っている。

そのあいだに、小夜子はずかずの責め苦を受けた。全裸の肌をいましめられ、滑車から下がった鉄鎖で吊られ、ムチで打たれた。

小夜子は、阿津子の突然の変貌におどろいた。まるでジキル博士とハイド氏のように、いままで小夜子にとってあれほどやさしかったおねえさんが、鬼女に一変したのである。

小夜子には、それが疑問であった

激しいムチの洗礼を裸身に受けながら、小夜子はきいた。

「おねえさんッ、どうして、小夜子をいじめるの？ 小夜子が何か悪いことしたの？」

だが、阿津子の返事はなかった。何をきいても、阿津子はただ、無言であった。

数十分後、苦悶の鼻責めから解放された小夜子は、全身の力が抜け、身をささえる気力もなく、冷たい床にしばれた身体を投げだしていた。その美しい鼻には、まだ鼻輪がはまったままであった。

かたわらで阿津子は、冷酷な目で小夜子を眺めていたが、眸の奥には、新たな責めの形があった。

グッタリと床に身を投げだした小夜子を、乱暴に引き起こして阿津子は言った。

「さあ、ここにすわりなさい」

「アッ、おねえさん、もう許してください。

お願いですッ」

「駄目ッ、おとなしく言うことをきかない

と、また。お仕置きするわよ。いいの？」

小夜子は、悲しげに首を左右に振った。

「どっちなのッ、お仕置きがいいの？」

「厭ッ、すわりますから、お仕置きは厭ッ」

「そう。それならここへすわりなさい」

阿津子は、小夜子を床に正座させると、そのいましめを解き、鼻汁に濡れた鼻輪をはずした。そして、パンティー一枚で床に正座した小夜子を見下ろしながら、憎々しげに阿津子は言った。

「私がいいというまで、そうしてすわっているのよ」

小夜子は、うなずいた。涙に濡れた黒い眸は、マツゲが長く、可愛かった。

いまは、すべてを観念しているのだろうか。うつ向いて正座している小夜子の細い肩は、地下室の寒気に震え、目にしみるように白いエリアシには、痛々しいムチのあとが赤い線になって残っていた。

その可憐な姿を眺めながら、阿津子は思った。（そうだ、羞恥責めはもう少しあとにして、もっと肉体的に苦しめてやろう）

そう決心すると、阿津子は、次の折檻の用意を始めた。だが心の中には、あとで小夜子に加えられるであろう奇抜な羞恥責めのアイ

ディアがあった。

地下室の床に正座した小夜子のオサゲの黒髪は、思春期の乳房を隠していた。

五、乳房、乳首責め

「ビシッ！」

「ウッ、痛いッ」

「ビシッ、ビシッ！」

「アッッ」

「ビシッ！」

「アウッ、おねえさん、堪忍してッ」

青竹の音と乙女の苦悶の絶叫が、暗い地下室に交互にひびく。それは、まさに酸鼻な地獄図絵であった。

小夜子の身につけているものは一枚のパンティーだけであった。その姿で正座した両腕は背後で緊縛され、阿津子の手にした太い青竹は、胸の乳房を的確に強打した。そのたびに、オサゲに編んだ黒髪が躍った。

なおも青竹は白い双丘を狙う。

「ビシッ、ビシッ！」

「ンッ、ウーッ」

「ピシッ！」

「アッ、痛いッ、許してッ、堪忍してーッ」

小夜子は、あまりの苦痛に絶叫して、背を

丸めた。少しでも乳房を青竹から庇護したかったのである。

「駄目じゃないのッ、背を伸ばして胸を張るのよッ、何回言ったらわかるのッ」

阿津子の叱咤に、小夜子は瞬間、身体を締め、喘ぎながら言った。

「おねえさんッ、もう許してえッ、小夜子、我慢できませんッ、苦しくて……」

それだけ言うと小夜子は、その場にいましたの身をつ伏した。

それが小夜子の体力の限界であった。鼻責めの疲労がまだ完全に癒えないうちに、乳房を青竹で強打されるのである。か細い病身に、それはあまりにも激しい折檻であった。

だが、復讐に憑かれた女、阿津子は、小夜子の哀願をきくはずがなかった。

阿津子は、意地悪い目で言った。

「そう。そんなに苦しいんなら、休ませてあげるわ。こっちへ来なさい」

小夜子のオサゲに編んだ髪をつかんで、阿津子はズルズルと室の隅のベッドに引きずっていった。

「さあ、このベッドに、あお向けに寝るのよッ」

小夜子はグッタリして、ただ許しを乞うば

かりであった。

「おねえさん！ 小夜子、死にそう。苦しくて……堪忍してッ」

しかし、阿津子の冷酷な表情は変わらなかった。

「おとなしく言ってるうちにベッドに寝ないと、また苦しい目にあわなければならぬのよ。でも、そんなにグッタリしてたんじゃ、自分でベッドに乘れそうもないから、私が乗せてあげるわ」

そう言うと阿津子は、厭がる小夜子を無理にベッドに乘せて仰臥させた。そして、四隅に付いている鉄環で四肢を固定した。

仰臥した小夜子の銀色に光る産毛の生えた乳房は、上を向いて喘いでいる。その頂点のグミのような乳首は、先刻の折檻のために、淡紅色の粘膜が破れて血がにじんでいた。

そのかたわらで阿津子は、一本の火のついた太いローソクを持って立っていた。

「少し熱いけど、さっきのように苦しくはないのよ」

そう言うと阿津子は、小夜子の乳房の上でローソクを傾けた。熱く溶けた蠟涙は、恐怖に緊張した乳房に落ち、それは見る見るうちに白く凝固した。

小夜子は、かすかに悲鳴をあげ、裸身を身悶えた。だが、ベッドに鉄環で固定された四肢は、身動きすらできなかった。ただ、産毛の光る双丘の胸だけが、空しく左右に動いただけであった。

さらに蠟涙は乳房を責める。

「熱ッ、熱いッ、アッ」

涙が、激しい熱さにあえぐ小夜子の眸に光り、仰臥しているので、それは耳たぶに伝わっていった。

蠟涙が乳房に落ちるたびに、小夜子の身体はピクッ、ピクッと痙攣し、そこだけが次第に白くなった。そして、その白い皮膚は蠟に隠れて、ついにまったく見えなくなり、乳首だけがのこっていた。

「おねえさんッ、堪忍してッ、小夜子が悪かったのッ」

フト小夜子の口から、謝罪の言葉が洩れた。それは、苦痛に耐えかねた、小夜子の無意識の連想からきた言葉であった。

数日に及ぶ折檻が、小夜子の精神を脅威の淵に追いやり、そこに一種の心理的作用がうまれたのである。

しかし、阿津子は、無言のまま蠟の衣を被った小夜子の乳房を見つめていた。

そこだけが別の生き物のように息づき、血のにじんだ乳房だけが、蠟の皮を被らず、二つの丘の頂点にポツンとあった。

阿津子が、故意に乳首だけは残しておいたのである。なぜなら、阿津子の脳裏には、また一つ、新しい責めのアイディアがうかんでいたから――。

次に、二個のセンタクバサミが用意された。そのバネは、小夜子の傷ついた双の乳首を挟んだ。冷たい金属の歯は、哀れな乳首を咬み、そこからギリギリと激痛が襲った。

「アッ、痛いッ」

ベッドに仰臥した身体を固定され、責め苦に呻吟する小夜子の顔は、新たな苦悶の涙にまみれた。その顔が、裸電球の暗い照明に悲しげに光った。

六、濡れたパンティー

小夜子は、乳首に激しい苦痛を感じてわれにかえた。目の前に阿津子の顔があった。「いつまで寝てるのよ。いま何時だと思ってるの。もう朝なのよ」

阿津子の声に、小夜子は昨夜の自分の哀れな姿を思いだした。

その身体を再び苦痛が襲った。乳首を挟ん

だセンタクバサミをはずされたからである。

昨夜、いや今朝、阿津子は、地下室を出ていった。ベッドに固定された小夜子は、そのまま地下室に放置された。その裸の肌を責める寒気と乳首の苦痛に、涙が長いマツゲにたまっていた。

だが、いくら泣いても、外部には聞こえなかった。泣きながら小夜子は、自分が昨日の朝から少しも食物を口にしていなかったことを想った。一日中責められ、食事どころか、水さえも飲ませてくれなかった。

激しい渇きにそれを要求すると、バケツに一杯入った水を、四ツン這いにさせられて無理に飲まされた。

それが悪かったのかもしれない。やがて小夜子は、ベッドに仰臥したまま、尿意を催した。きたるべき生理として当然であった。

小夜子は、阿津子が降りてきたら尿意を訴え、許してもらおうと思っていた。

だが、いつまで待っても阿津子は降りてこなかった。

恥ずかしいことはしまい、と小夜子は必死で我慢したが、ついに耐えられなくなってしまった。

ベッドに仰臥して鉄鎖で固定されたまま排

泄してしまったのである。パンティーはぐっしりと濡れ、大量の液体は、そこからベッドに流れていった。初め暖かった液体は、室内の寒気に次第に冷たくなっていった。

排泄の欲求は、それで解決されたが、苦痛と寒気と空腹と睡魔は、なおも小夜子の身体を責めた。

だが、その四つの責め苦からのがれることは、いまの小夜子にはできなかった。

ただ、猛烈に襲ってくる睡魔だけが、四つの苦痛からのがれることのできる、唯一の方法であった。そして深い眠りから醒めたときは、朝だったのである。

双の乳首にはまったセンタクバサミを、阿津子の手によって、はずされたとき、小夜子は、その苦痛で目がさめたのであった。

「あらッ。さっきから臭い臭いと思っていたら、オシッコ洩らしたのね」

阿津子の声に、小夜子は羞恥に顔を赤く染めた。そして、意地悪い阿津子の視線からのがれようと身悶えた。顔をそむけて小夜子は言った。

「おねえさんッ、ごめんなさいッ、ごめんなさい……」

そのとき、阿津子の脳裏にある計画がよみ

がえった。それは、羞恥の責め、精神的な苦痛を与えることであつた。(そうだ。いま小夜子は羞恥に身を震わせて泣いている。これ以上の屈辱を与えたら)

「そんなに濡れていたんじゃ、仕方がないから、ベッドから下ろしてあげるわ」

阿津子はそういうと、小夜子をベッドに束縛している鉄鎖を、その白い四肢からはずした。鎖と鉄環がぶつかり合い、ジャラジャラと不気味に鳴った。

ベッドから下りると、小夜子はぐったりして、濡れたパンティーのまま、床にベッタリすわってしまった。

阿津子は、それを冷酷な目で見下ろすと言った。

「そんなところにすわらないで、立ちなさい。久しぶりにここから出してあげるわ」

小夜子はそれを聞くと、黒い眸で阿津子を見上げた。その目には、真珠のような涙がたまっていた。それは、頬をつたわって胸の乳房に落ちた。おねえさん——と呼ぶ小夜子の声には、喜びがあふれていた。

「さあ、一緒にきなさい。おねえさんと」
思えば地下室に監禁されて四日間が経っているのである。小夜子の喜びは、当然であつた。

た。そのあいだに、数々の恥辱と責め苦を病身に受けたのである。

だが、今は、それから解放されるのだ。

小夜子は細い腕で胸の乳房を隠し、阿津子のあとからついていった。たった一枚の身を隠すもの、薄いパンティーはベッタリと濡れて、小夜子の臀部をあらわにしていた。

地下室の階段を上る小夜子のうしろ姿は、抱きしめたいほど可憐であつた。

七、疑惑の影

一週間たった。

自分に与えられた部屋で、小夜子はあることを考えていた。それは、この一週間、常に疑問として脳裏にあつた。

(なぜ、おねえさんは、あたしをあんなにいじめたのかしら)

小夜子は、四日間の地下室監禁のあいだ、両親の来訪を期待していた。もし、それが実現していたら、あのように苦しまなくとも済んだかも知れないのである。

あの忌まわしい日以来、阿津子の顔を見るのが怖かった。いつ、あの地下室に再び連れて行かれるのか、毎日を小夜子は、おびえて過ごした。

出来得るなら、いまは一日も早く父母のもとに帰りたい。帰れないのなら、せめて連絡だけでもいい。

だが、阿津子は、それさえも許さなかつた。そればかりか、あの地下室の、まるで拷問にちかい折檻についても、何一つ語ろうとはしなかつたのである。小夜子が、いくら訊いても説明しなかつた。

(あれほどやさしかったおねえさんが、あたしを……。どうしてもわからないわ)

小夜子はこれから、自分はどうなるのだろうと思つた。窓から見える黒い空に、カサをかぶった月がぼんやり光っていた。

いつの間にか小夜子は、眠っていた。夢でも見ているのだろうか。あどけない寝顔に微笑があつた。

翌朝、小夜子はすべてを聞いた。阿津子も黙っていることができなかったのである。

疑問が水になって流れていった。その水中には、阿津子に対する憎しみの影はなかつた。済まないと思う心でいっぱいであつた。

小夜子自身は、なにも悪くはないのである。謝る必要はなかつた。謝るのは阿津子のほうなのである。

いや、悪の本人は、小夜子の兄、美野瀬滋

夫であった。しかし、彼はすでにこの世にいないのである。彼の死が、小夜子の屈辱の日の始まりであった。

「おねえさんッ、小夜子、知らなかった。おねえさんが、そんなに苦しんだこと」

小夜子の濡れた黒い眸が、阿津子を見て言った。あれだけの責め苦を受けながら、その目は阿津子を恨んではいなかった。

阿津子はその目を見ているうちに、一つの感情が次第に心の中に広がっていった。

（そうだ、私の恨むのは小夜子の兄なんだ。美野瀬なんだわ。なぜ、私はいままで小夜子を苦しめてきたのだろうか。私は間違っている。美野瀬が死んだからといって、小夜子を苦しめることはできないのだわ）

阿津子は、いま、復讐の矛盾に気がついたのである。

その前で小夜子は、自分の身体を凝視している阿津子の目を意識して、恥ずかしそうにしている。

「小夜子さん」

阿津子の口から小夜子の名前が出た。

小夜子は、ハッと身体を縮めた。また恐ろしい折檻をされるのではないかと、阿津子の声を聞いて思ったのである。しかし、阿津子

の顔には、そのような表情はなかった。

「小夜子さん——」

阿津子はまた叫んだ。その目は、小夜子のいぶかしげな顔を見ていた。だが、それには冷酷な光はなかった。

突然、阿津子は、小夜子の身体を抱きしめた。力一ぱい抱きしめた裸の身体は、細く冷たかった。

阿津子の、今までにない態度に、小夜子の心は少なからず動揺した。茫然として、なすがままになっている小夜子の可憐な顔に、頬ずりしながら阿津子は言った。

「小夜子さんッ、許してッ」

「エッ？」

「おねえさんを、許してね」

阿津子は泣いていた。初めて見せた涙であった。

小夜子には、阿津子の言葉が、直感としてこなかった。

「おねえさん……」

阿津子の涙が、小夜子の細い肩に落ちた。

「小夜子さんッ、おねえさん、間違ってたわ。悪かった、おねえさんが悪かったッ」

小夜子は、びっくりして目を見張っていたが、見る見るその目に涙がたまった。

「許してね。小夜子さん、こんなに瘦せてしまってる……。ほんとに悪かった」

阿津子の胸に堅く抱きしめられながら、小夜子は言った。

「おねえさん、いいの、そんなこと。小夜子、おねえさんが悪いなんて思ってたやしないわ」

阿津子には、言葉がなかった。ただ、泣いて小夜子の身体を抱いた腕に力を入れるだけであった。

「おねえさん、そんなに泣いちゃ厭ッ、小夜子、おねえさんがやさしく看護してくれたこと、いつまでも忘れないわ」

阿津子は初めて、素直で純真な乙女の心を知ったのである。

「小夜子さん、おねえさんを許してくれるのね。許して……」

「許すなんて、そんなこと……」

小夜子は、阿津子の胸にしがみついた。白い背中が、阿津子の腕の力で折れそうに曲がった。

阿津子は、小夜子を抱きしめて、いつまでも離さなかった。肩に続けて落ちる熱い涙を、小夜子は感じていた。

若さが、小夜子にはある。それが、病いを克服することを約束していた。

日本光道教本部潜入記

黒坂弘明

日本光道教と名乗った、その宗教のことは、今の日本には、ほとんど記録に残っていない。

明治の末期ごろのこと、四国の山の中、石鎚山を本拠に、なかなか根強い勢力をもっていた。今でいうなら、新興宗教のひとつというところだった。

宗教としては、あまりにも厳しい宗派だったので、いつの間にか、消えてしまったようになっただが……。

筆者の父、黒坂三平が、その本部を見学に行ったときの生々しい話は、どうしても忘れることはできない。

彼はこの宗派の青年僧を買収してもぐり込んだのだった……。

奇妙な入宗式

ちょうど、その日は、信者の息子や娘の、

若い少年少女が、改めて入宗を決める儀式の行なわれる日だった。

青年僧は、まず三平を、本堂の一室に案内した。

「早くこの僧衣に着かえてください。それから、式の最中は、一言も、言葉を発してはいけません」

「承知した」

二人はまた、本堂の裏へ出た。大きな塔のある建物に、数人の僧侶が並んで入って行く。

男の指図のあるままに、三平もまた、その仲間に入って、祈りの格好をしながら入って行った。

彼らは、暗い大広間に出た。目が馴れてくるに従って、室内の様子がわかってきた。

彼らの立っている壇の下に、すでに数十人の少年と少女たちか、床にひれ伏して祈って

いる。

彼らの幼い体は、始めて親元を離れた恐怖と緊張で、すっかり、元気を失って、ふるえている。僧侶たちが整列すると、中央の大導師が、厳かに言った。

「第二日目の儀式を、只今より行なう。有難き、み仏の教えを受けて、良き信徒になるために、皆は耐えるように。皆の父も母も、この儀式に耐えることによって、立派な信徒になってきたのだ」

子供らは、いっそう頭を下げ、震えている。大導師は、一段と高い声で、鋭く言い放った。

「さあ、若い人たちよ。思いきって、その衣服を脱ぐんだ」

まわりを囲んでいた僧侶が、それに唱和した。

「み仏に仕えるためにこそ、すべてを脱ぎ去るのだ。み仏に仕えるためにこそ、生まれたままの姿に戻るのだ」

子供たちは、暗示にかかったように、ぞろぞろと立ち上がり、まず上着を脱ぎ出した。

少年たちの幼い体、少女たちの、まだほとんどふくらんでいないような小さな乳房も露出する。上半身が出て、僧たちの唱和は止まない。彼らは、震える手で、下着までとって、まるっきりの裸になっていた。男女、およそ五十人はいようか。

大導師はふたたび言った。

「十三年前の今日、そなたたちは、その姿で地上に生を受けた。今日は、ふたたび、生まれたままの姿で、み仏の弟子となるのだ」

僧たちは唱和した。毎日行なっているのだろう。一つの儀式として馴れきっている。

「男たちは、男の部屋に……女たちは女の部屋に……」

役僧の一人が先に立ち、全裸の少年を右のほうに、全裸の少女を左のほうにと案内して行った。

背中に入れ墨を

まず、男の部屋。五人の少年が、おどおど

しながら、入ると、中の僧侶たちは、厳しい声で言った。

「おまえたちは、良き信徒になることを誓うか」

「誓います」

少年たちが、震え声で答える。

「それでは、入信の印をおまえたちの体につける。その場で、犬のようにせよ」

命ぜられて少年たちは、おのおの両手を床について、四つん這いにさせられた。可愛い小さな臀部が、突き出している。口に針を含み、墨壺を持った役僧たちが、少年たちのうしろに回って、その尻をしっかりと左手で抱えた。

背中の上に墨壺を置き、口に含んだ針を右手に持つと、ぶつりと、少年の体の上に針を突き刺した。赤い血がツツと糸を引いて流れる。

少年たちは、とたんに、ワアと、痛さに耐えかねて泣き出した。しかし、役僧たちがしっかりと押えた体は、少しも動かない。針はぶつぶつと突き刺されて行く。そして、ときどき、針を口に含んで、あいた右手で、その傷の上に墨壺の墨をなすりつけて行く。その模様は、人によって違うが、ワシ、牛、松

竹梅、そんな模様が、彼らの小さな臀の上に出来上がった。

少年たちは、見動きが出来ず、ワアワアと泣いていた。

二十分もすると、手馴れた僧の手によって完全な入れ墨が出来た。終わった少年は、次の部屋に連れて行かれ、入れ変わりにまた、新しい少年たちが、おろおろと入ってきた。次の部屋に連れて行かれた少年たちは、そこで、枯木のような老僧たちの皺苦茶な手に抱かれる。

三平は、思わず目をそむけた。あまりにもひどい光景である。少年たちの臀部は、さきほどよりもっとひどい、手痛い凌辱を加えられているのだ。

お尻に焼き印を

次は少女たちの部屋——少女たちが裸で、ブルブル震えながら、待っているところへきた。

この儀式がすまなければ、結婚して、妻となり、母となることを許されないのである。

部屋の中には、若い僧侶が並んで立っていた。裸の少女たちは、僧の前にひざまづき、何度か礼拝すると、やがて立ち上がった。僧



は、その体を抱きかかえ、首筋を荒々しくつかむ。顔を横に向かせると、右の耳たぶをつかんで、鋭いきりで穴をあけた。

「ヒューッ」

という悲鳴が、少女たちの口から洩れたが、僧は手を休めない。耳たぶの穴が完全にあくと、金色の耳輪をはめて、反対側を向かせると、もう失神してしまって、ぐったりし

ているものもいる。だが、僧侶たちの作業は止まない。彼女らに、正しい仏法を教えるのだという、大義名分があるから、彼らの行動は、真剣そのものである。

少女たちは、苦痛で動けない。それを、下級の役僧たちは、両腕で抱えて、隣の部屋に運んだ。

そこでは、少女たちは、石の床の上に、ペ

ったりと腹這いに寝かされている。力のありそうな若い僧侶が、二、三人で、その両手と両足をびたっと床に押えている。

部屋の隅には、炭火がカッカとおこっており、その中に、二、三本の鉄の棒が突き込んであった。腕まくりした、筋肉の隆々とした僧が、じゅうぶんに焼けた、その鉄の棒を火から取り出した。

先が真っ赤に燃えている。どうやら印形がついているらしい。それを、床につつ伏している、身動きの出来ない少女の尻に、いきなり押しあてた。ジュウッという激しい音がして、肉の焼ける無気味なおいがあたりにただよった。

「ヒューッ」

ふたたび、悲鳴というか絶叫というか、形容の出来ないような、激しい声が、少女たちのノドから出た。体力のすべてを振りしぼるような泣き声である。思わず力いっぱい暴れようとするのを、僧侶たちはびたりと押えつけて動かせない。

若い力強い僧は、鉄棒を持って、次の少女のほうへ向かった。

その臀にも、同じように焼き型が押され、少女の死にそうな悲鳴が洩れた。

ひみつの願望欲求をみたす

刺激遊戯のあそび方

真 野 麗

刺青願望をみたす遊び

刺青しせうというものは、なかなか魅力のあるものである。自分の膚はだにいれてもみたいし、また、好きな女の白い皮膚にそれをほどこして、その肌はだにふれてみたいなどと、だれしも考えるところであろう。

だが、ふつうの人、つまり、いわゆるおもしろい衆しゆには、そんなことは思うだけで、とうてい実行できないことだ。

そこで、そういう願望の人に、この「ほりもの遊び」をおすすめする。

準備用品は、青と赤とのインクそれぞれ一瓶、筆二本、化粧水（アストリンゼンのようなもの）、脱脂綿少量、これだけでよい。

遊戯者たる男女は、まず入浴して、皮膚の

脂あぶらをきれいに洗いおとす。それが終わったら、男は女の体じゅうにタルクをふいたのちその膚はだに絵を描くのである。

二本の筆に、それぞれ青と赤のインクを含ませて、つかいわけながら、相手の頸のどのあたりからはじめて、胸、腹、腕、脚と、前面いっぱいに、たとえばクモの絵、ヘビの絵、女の顔やら男の顔、エロティックな絵などと、好きな図柄の絵をえがいていく。

紙や布地に描くのところがって、皮膚の上だと、ドギつくなく、やや薄めなおちついた色合いになるから、かえって美しくみえる。

前面がすめば、こんどは相手の体を床の上にうつ伏せにして、背、臀、腿、ふくらはぎから、足の裏まで、赤や青の絵を染める。

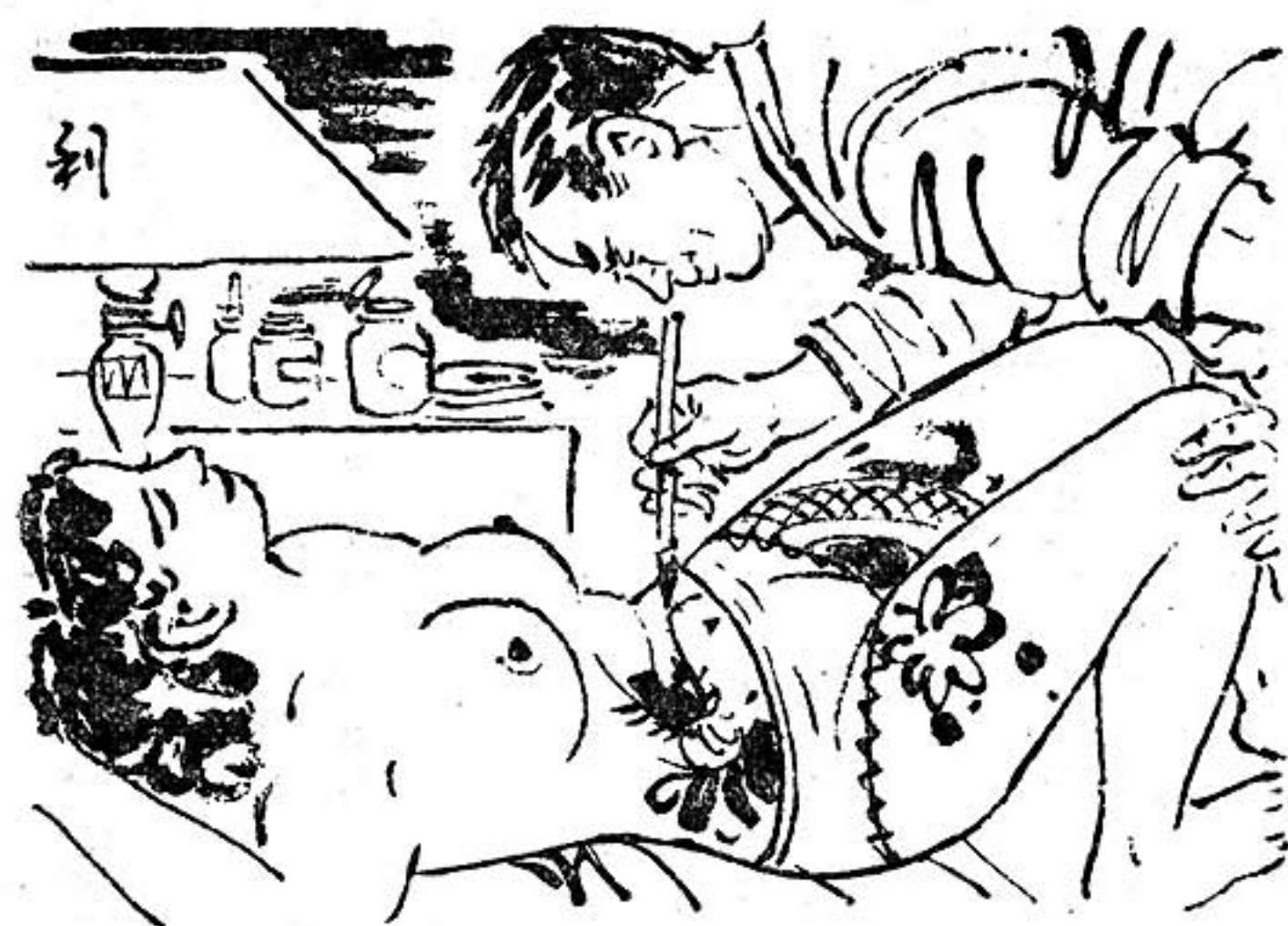
こうして、身体からだの微細なすみずみまで筆を

いれおわったら、次は、いれかわって、女が男の膚はだに、同じように好きな図柄の絵を描く。

赤や青に染めなされた男女の身体は、さながら二匹の妖しい艶獣えんじゆうのようだ。そこで艶獣は、たがいの美しい肌はだ絵にみほれ、その肌はだにふれて、歓をつくすがよい。

次に、この刺青遊びは、たがいの膚はだに絵をえがくことだけでなく、その絵を消すことにも、面白さがある。これには、二つの方法がある。

一つは、脱脂綿に化粧水をしませて、かわるがわる相手の膚はだの絵を消してゆくのであるが、強くこすらないと、インクがおちないから、それは、こすられるほうにとって快いことはいうまでもなく、また消すがわの者にと



ってもなかなか楽しいことは推察できよう。
も一つは、たがいの舌で、相手の肌絵を消
していく方法である。これも強い舌力でなめ
まわさぬと、インクの色は消え去らない。舌
のさきにはげしい力を加えて動かすたびに、
相手はくすぐったさと快さをたえるために、
うめきごえをあげながら、芋虫のようにくね
くねと体をゆりうごかす。

双方にとって、たのしい刺激遊戯である。

変装願望をみたす二つの遊戯

二月の節分の日、花柳界では仮装（京阪
ではおぼけといった）遊びというのをやる慣
わしがあった。芸者が、仮装をして客席に出
て、客の相手をし、さいごまでその仮装を解
かないという風流遊びで、そこからいろいろ
の珍語が生まれたものである。

ここに挙げる仮面遊びは、それとは狙うと
ころが全然違う。男3人、女3人と男5人、
女5人、くらいが集まって遊ぶのであって、
それはたがい未知の者ばかりでもよいし、
また、知り合い同士でも結構である。

集まる者は、それぞれ、好みのお面をかぶ
る。テングの面、オカメの面、ヒョットコの
面、ピエロの面等々、なんでもよい。

身なりも、ほかの者に自分だと知られない
ようなつくりをしなければならぬ。だか
ら、そのためには、全部仮装——つまりテン
グの面をかぶって、テングの衣装を着けると
いうふうにしてもよい。

こうして仮面をかぶった者ばかりが、集ま
る即座にパートナー（もちろん異性）をきめ
て、室内で、面と面をつきあわせながら踊

り、踊りがおわれば、それぞれのパートナ
ーと欲を交わすのである。もちろん、面をかぶ
ったままで、終始無言のうちに遊びを完了す
るところに妙趣がある。

すべての者が、たがいにどの誰かわから
ない。わからないところに、この仮面遊びの
刺激性があることは、読者はじゅうぶん賢察
されよう。

次に、仮面遊びと似て非なるものに、「逆
転変装遊び」というのがある。

これは、男女たがいにその性を逆にした
装い、つまり男性が女性の姿をし、女性が男
装をして遊ぶという趣向である。

この遊戯の心理は、なんびとの中にも多少
はその因子をもっているところの、女装願望
および男装願望をみたすとともに、相手変装
者にたいする魅力をも味わおうというのであ
る。

準備用具は、まず頭につけるカツラだが、
これは、浅草の仲見世あるいは新仲見世通り
辺の小間物屋（洋風の化粧品店ではない）に
行けば、男女両方のカツラを売っている。た
だし、これは、かなり高価なものであるから、
カツラ屋から日本髪なりパーマなり、または
チョンマゲなりザンギリ頭なりのカツラを、

一時的に借りてもよい。

身に着ける物は、これはいちいち買いもとめてはたいへんだから、男は妻や姉妹の物を、女は夫や兄弟の物を、それぞれ下穿き、下着、衣装一切を借用して、着けるほうが簡単であろう。

または、女がチョンマゲ・カツラの昔の股旅者姿で、男がパーマにカケテル・ドレスという現代姿などという組み合わせも面白い。

こうして変装ができれば、位置顛倒の遊びにかかる。言語、態度、行動、すべて両者とりかわって、女の役は男がつとめ、男役は女がつとめるわけで、たとえば、男が女の脇に膝をくずしてすわり、媚っぽい目づかいなどしながら酒の酌をすれば、女が男の頸に手をかけてひきよせる、といったふうに戯れあう。

これは、かりにみずからの変装にはさほど興味の無い者でも、相手たる異性の変装には、おッー、というような新鮮な刺激を感じること疑いなしと、太鼓判を押しておく。

虐・被虐の欲求をみたす遊戯

男性には、本来サディズムの傾向が強く、女性には本来マゾヒズムの傾向が濃いことは、人のよく知るところだが、この欲求を極

度に発現して楽しもうというのが、この「責め遊び」（女性からいえば「責められ遊び」だが）である。

準備用品は、物干し用の綱のように、麻ナワにビニールを巻いたもの二条くらい。石綿の中に細いハリガネをとおして作ったムチ、フルーツナイフのような、刃先を丸くした刃物、同じく先端を丸くしたキリ等々。

遊戯の人員は、虐者（男性）と被虐者（女性）とが同数でもよく、また、男性2人—3人、女性1人というふうに、複数対単数もまた妙である。

男性がわは、まず女を綱で縛りあげる。乳房の上あたりと大腿部辺の二カ所を縛り、横向きにして、床の上に転がすのだ。

そして、その女たちの体を、男性組が、用意の柔軟なムチで打ち叩く。といっても、遊戯者たちは、病膏盲に入ったサディストとマゾヒストではないのだから、女性たちが苦痛を感じるほどに、強く打たないこと。また、ムチ打ちの箇所も、さほど痛覚を感じない豊満なはだかの臀などがよい。

この程度のムチ打ちでも、三、四十分くらいいつづけていると、虐者被虐者ともに、しだいに性的な興奮を覚えて来るものである。

ムチ打ちがおわったら、女性たちをベッドなり畳の上になり横たわらせたいうえ、こんどは刃物を使っての責めとなる。

男たちはそれぞれ、刃先を丸くしたナイフや先端を丸くしたキリなどを持って、女の脂肪の厚い大腿部や臀部などを、傷つけぬ程度に斬ったり突いたりするのだ。これは、ものすごいほどの刺激があるから、不思議——じつは、不思議でもなんでもないのだが——である。

こうして男性組の責めがおわったら、ひとまず休憩ののち、次は、双方いままでの位置を異にして、女性が虐者、男性が被虐者となって遊ぶのも、また妙趣がある。

これは女性にとって、性的な快感というよりも、一種の解放感のようなものを覚えるらしい。

では、男性側はどうかというと、これまた、なかなかたのしいのだから、人間というものには、セックスのうえにおいて、いろいろの面をもっているものだ、いまさらに感心するであろう。

幼児復帰願望をみたす遊戯

前項にも言ったように、人間は、性的にす

こぶる複雑な面をもっていて、いろいろの願望、欲求を内に潜めている。さよう、心の奥底に潜在しているきりで、容易に外部に現われないものが多い。

その一つに、幼児復帰の願望がある。もういちど幼児に帰りたいという願いだ。遠く過ぎ去った幼児時代のパラダイスには、だれしも強い誘惑をもっており、ふたたびそこに戻りたいという願望は、なんびとの内にも潜んでいるものである。

まず実例を示そう。

フロイドの高弟で、最近ことに欧米で高い評価をあたえられている精神病理学の鬼才、ウィルヘルム・シュテークル博士が、自分の著書の中に、次のような症例を挙げている。

ある日、シュテークル博士の診療所に、幼児服を着た屈強な青年が、その母親に付き添われて、診察を乞いに来た。

母親は青年をだいて、椅子にすわらせるとかれに向かって言った。

「坊や、ミルクをお飲み。そうすれば、お話ができるよ」

すると、その大きな「坊や」は、ポケットから、ゴムの乳首のついた牛乳瓶をひきだし、ミルクを飲んだ。それから、ほかのポケ

ットから、ロールパンをとりだして、母親に手渡すと、母親はパンをちぎって、青年の口におしこんでやったのである。

この青年は、強烈な幼児復帰願望から起こった精神性欲発達不全症という病気に罹っているのであった。

だれしもの中にも、潜在する幼児復帰の願望は、もちろん、これほど異常に激しいものではないだろうが、そうした願望が、たとい一時的にも、現実に見たされたら、楽しからうと、思われるに違いない。

そこで、これから申しあげる「幼児ごっこ」という遊びはどうであろう。

幼児ごっこといっても、遊戯者全部が幼児のようになつて、遊ぶのではない。幼児復帰の願望は、父あるいは母の愛情のなかにあつての復帰願望なのであるから、遊戯者の男女が、交互に親の位置となつて、幼児となつた相手とともに遊ぶのでなければならぬのだ。

まず、女性が幼児となり、それにたいして男性が父親の位置をとるとする。

「おしっこ！」

と女性が訴える。そのときは、男は、女をトイレへ連れてゆき、うしろから彼女の両股

を持ってだきあげながら、放尿させてやり、そのあとを拭いてもやる。また、オムツをあててやったりもする。

「お風呂へはいりたい」

と女性がいえば、男は浴室で、女の髪を洗ってやったり、身体のみずみずみまでも洗い流してやる、というふうにするわけだ。

次には、男性が幼児に、その母親には女性が位置する。

「おっぱい頂戴！」

ひげ面の「坊や」は、まずこう叫ぶだろう。そのときには、未婚女性も、まだ突起していない柔らかな乳くびをひっぱりひっぱりしながら、自分の膝にだきあげた男性の口に含ませてやる。

「おんぶして……」

と男性があまえ声を出したときは、女性は、男の重い体を背負って、うしろ手にかかえながら、部屋中を歩き回り、相手の望みによつては、肩車までしてやるのである。

この遊びをいっそう面白くしようと思ふならば、幼児となる側の者が、幼児らしい扮装をするがよい。この場合、父親なり母親なりの立場の者が、相手のきものを着せてやること、いうまでもない。

生きながら焼かれる若い女

目 黒 俊 二

三年目に骨を捨てる

その、白々と続いている敷き石のようなものが、みんな人骨だと聞いて、テッドは、まず度胆を抜かれた。

もう前に何度も、この不思議な島に来たことのあるウィリアムスは、平気な顔で説明する。

一九五九年、夏休みを利用してアメリカのカリフォルニア大学生のテッド・ポーエルは、友人のウィリアムスに誘われて、この奇妙な島を訪れたのだった。――

ところは南太平洋のある孤島「R島」。ウィリアムスは、太平洋戦争に参加した彼の伯父が聞いてきたという噂話をたよりに、何年もかかって捜し当てたところだという。

彼にいわせると、

「おそらく、白人で、この島を訪れたのは、ぼくが最初で、君が二番目だ」という。

「この島にはね、昔から、案外厳しい戒律が守られている。何人男がしようと、夫はただ一人に決められているのだ。決して再婚は許されない。そして、その夫が死ぬと、女は、

夫の体が、三年で骨だけになるまでは、ほかの男を愛してもよいが、三年目に、夫の骨を丘に捨てに行くときに、そのまま、神殿に閉じこもり、ふたたび下界に戻ってはいけな

い^{おきて}て、掟になっているのだ。女たちは、だから、で

きるだけ夫を使わないようにして、遊ばせて長生きさせるようにするが、時には貧乏で、夫以外は持てない女たちなどは、つい精力が過剰になって、夫を殺してしまう。すると、もう、一生、神殿の中に閉じこもらなければ

ならなくなる。この女たちを慰めることの出来るのは、シバ神の支配下でない、われわれのような、汚れた異教徒だけなのだ」

「何か、ゾクゾクしてくるほど凄い話ですなあ、生きて帰れるのかい」

「なあに、いくらすごくても、相手は女ばかりだから大丈夫さ。ぼくは、何度も成功して、帰っているじゃないか」

二人は話しながら、町の通りを突き抜けると、やがて小高い丘が見えてきた。真っ白い丘である。近づく、それがまた、隙間なく並べられた人骨の山であることがわかった。

骨の間の女たち

頭の骨、肋骨、脛の骨、そんな白い骨の山のあいだにつけられた一筋の道を登って行くと神殿がある。

怪奇な神像を形どった、石の柱が並び、黒く、ひんやりとした入り口が、パツクリと二人を飲み込んだ。外の熱気にかかわらず、中はひんやりと冷たい。石の床を歩く彼らの靴音は、天井に反響して、いつまでも残る。

やがて、分厚い鉄の扉がしめられて、奥の拝殿の前に出た。扉には、観音像をもっとグロテスクにしたような仏像や、さんばら髪さんばらの鬼の像のようなものが浮き彫りに彫りこんである。

その鬼のような像の鼻の一つに、大きな鉄の輪がぶら下がっていた。ウィリアムスは、それを持ち上げては扉にぶつけた。

ガーン、ガーン――

と、音が神殿の内部にこだますると、鉄の扉が重々しく中からあけられた。

中を一目見て、さすがに二人もギョッと立ちすくんだ。五十坪ぐらいの広間に、何の仕事もなく、女たちが、ものうく寝転がっているのだ。

若い女も、年よりも、いずれも皆、強烈な男欲しさの体臭を発散し、ギラギラした目で、二人を眺めている。

このところ、しばらく異教徒の訪問がなかったせい、まるで飢えたオオカミのような

目つきであった。もう百歳にもなろうか、中で一番先輩であるらしい老婆が、よろよろと立ち上がってきた。そして、二人を広間の中に案内した。

土人特有のムツとする体臭に、若い女の生理的なおいもまじって、嘔吐を催しそうである。

老婆はたどたどしい英語で言った。

「異教徒の方よ。よく来てくださいました。

このところ、しばらく男の方の訪問がなく、皆、わが身を持てあましていました。どうか、きょうは、この島の自慢の女たちを、じゅうぶんに味わってください」

女たちは立ち上がった、半身を起こしたりして、おのおのの乳房を、臀部を、あるいは秘所を、ほこらしげに見せているようだった。

テッドが、思わぬ歓迎にまごまごしていると、ウィリアムスは、

「誰でもいい、適当な奴を見つけたら、ささと祭壇の陰に引きずりこんでしまえよ。きょうは時間がないから手早くすませないと、後で困ったことになるぞ」

と言って、自分は一番若そうな女を捕え、仏像の陰の薄暗いところへ入ってしまった。

九十五歳の処女

ところが、テッドのほうは、とんでもない結果になってしまった。さっきの百歳になろうかという老婆が、どうしても彼を放さないからだ。

「な、お願いじゃ。あたしはもう九十五になるが、運が悪くて、十六のとき、処女のまま夫に死なれて、ここにほうりこまれて以来、八十年間、まるで男の体を知らないで過ごしてきた。だが、決して肉欲の思いから逃がれたわけではない。年を取れば取るほど思い出はいつそう激しく、あたしの胸をしめつけてくるのだ。あたしの乳房は、もうこんなになびてしまったが、かつては、この女たちの誰にも負けぬほどに、鋭くとがり、空に突き出していたのじゃ。わたしの生命も、もうあと幾年もないかも知れない。このまま、男の体を知らないで、この女たちの中で、死んで行くのは、たえられないのだよ。なんとかあたしを抱いておくれ」

女の頼みは、必死の思いをこめていた。

この切実な願いを、テッドは、無下にこたわることが出来なかった。

「婆さん、それじゃ、ぼくが慰めてやろう。」

だが、その前に婆さんのアノ部分を、ぼくはよく見たいんだが……」

そんな恥ずかしいことを……やっぱりこの百歳の老婆でも、彼の前に、その秘奥の部分にさらけ出すのはつらそうだった。しかし、テッドは、老婆を仏像のある祭壇の上にかがませると、手馴れた冷静な態度で、その仕事にかかった。

老婆のいったことは本当であった。処女膜が確かに存在している。しかし、それを取り巻く部分の、全く水気のない枯れきった筋肉は、処女というものは、若く美しいものだという概念を、まるっきり裏切る無残なものだった。

ほとんど肉質の存在を失った、皺だらけの皮膚と骨だけで構成されている秘部は、切りたった岩壁を見るように非情なもので、彼は目をつぶり、呼吸を整えて、骨だらけの老婆の体を抱いた。だが、それは意外なほど、豊かな情感であった。

ヒーメンが、苦痛のうめき声とともに破れると、生暖かい血があたりを濡らして、しばらく、彼の体にあたえられた、ヤスリにかけられるような鋭く、こわばった皮膚の刺激がゆるめられた。

だが、血が乾いてくると、激しい苦痛と快感が彼をしめつけた。

死臭漂う丘

テッドとウィリアムスが全く疲れ果てて、神殿の裏口から出ると、すでにあたりは夕暮れに近かった。

丘の上からおりようとすると、悲しみに泣きぐずれながら、一人の女が親類にかこまれて、丘を上ってくる。

女の手には、バラバラにされた骨が抱えられ、それが丘のまわりに一本、一本捨てられて行く。女はまだ、せいぜい三十歳ぐらい、若くて美しい。

「あの女も、一生、この神殿のなかで暮らすのか」

とテッドが聞くと、ウィリアムスは返事もしないで、じっと立ちどまっていたが、

「いや、ちょっと違うようだな、もしかしたら、近ごろはこの島でも、めったに見られないというケマンテの儀式かも知れない。とにかく、ついて行ってみよう」

という、テッドの手を引っ張った。

二人は気づかれないように、神殿の廊下から、じっと見つめていた。

親類たちは、マキを裏庭の一角に積むと、火をつけた。

女の付き添いの一人は、泣いている婦人の衣服を全部脱がせて、全裸にした。

ほかの一人が、土ガメに入れてあるベトベトした油を、頸から肩、乳房、腹、股、とくに脇の下や秘所にはベトトリと分厚く塗りつけた。

婦人の涙は、もう枯れ果てたか、目は宙を見つめたまま、じっと黙っている。女の一人が、婦人の目に、黒い目隠しをした。ほかの一人が婦人の両足を大の字型に開かせると、長い木を地面において、その両端にカカトを結びつけた。

一人が、両腕をきつく背中で結び合わせた。内股や秘所に、なおいっそう分厚く油が塗られた。男の付き添いは皆、地面にひれ伏して祈っている。

やがて、女の連中によって、かつぎ上げられた婦人の体は、燃えさかるマキの上に横たえられた。

ジュエツと脂が燃える音がした。

思わずテッドが駆け出そうとするのを、ウィリアムスがとめた。

「もう苦痛で失神している。一番、神経の鋭



い部分に油が塗られて、瞬間に燃えてしまうからだ。後は焼かれるだけだ」

「でも、あんまりだよ。生き身を焼くなんて」

「しかし、あのまま、神殿のなかに閉じこもって、希望のない日を、死ぬまで何十年も送るのと、いま、夫の面影を胸に思いながら、生きながら焼かれて行くのと、当人にとっては、どちらが幸福か、わからないよ」

テッドには返す言葉がなかった。

生きた女の肉は、たっぷりと脂肪に富んでいる。

メラメラと青い強い火を上げて、燃えて行く。

一、二度、激しい悲鳴も聞こえたが、背中
で腕はくぐられ、両足は開かれて、木で固定
されている身では、逃がれようがない。す
ぐ、また失神してしまった。

すでに煙に巻かれて仮死状態にあるのだろ
う、生き身の脂が溶け、皮膚や髪がジリジリ
縮れて燃えて行く。

この生き地獄の凄惨な姿に二人は、とうて
い、それ以上見つめていられず、夕闇にまぎ
れるように、そっと、この死臭の漂う丘を下
りて行った。

裏切りの決算

獅々村 裕

檻の女

夜なか、私はタマミの檻を見にいった。檻の置いてある地下の部屋はまっくらだが、檻の中でいきものがうずくまっている気配が、闇を通してかすかにつたわってくる。

「フフ、タマミのやつ」

私は、その白いからだを連想して、ゾクゾクした。

私は手をのばして、パツとライトを点けた。

夜間撮影のとき使うような、モウレツに明るいやつだった。光のすじは、一直線に檻の中をさしつらぬき、檻の片隅にうずくまっていたタマミを照らした。タマミは強烈な光に射られながらも、反抗的に目をあげて、キツと、こっちを見た。きつい女だった。こんなにされても、いっこうに屈服の気配がない。

私はライトの光源を背にして立ち、

「タマミ」

と呼びかけた。

その部屋は、特殊な防音装置になっているので、声はエコーをよび、不気味に壁にこだました。

「タマミ。私はおまえの一家の危急をすくい、いろいろとつくしてやった。それにもかかわらず、おまえはおれに従わず、おれから逃げようとさえした。おまえを秘書として採用してから今日までの恩寵を思うがいい。からだがいくつあっても、捧げ足りないと思うのがふつうだ。それだのおまえは、おれの意に従わないばかりか、どこの馬の骨だか知らない若い男とくっつき、おれから逃げようとした」

私は口惜しさのため、語尾がふるえるのを感じた。タマミを檻からひきずり出し、叩きのめしてやりたかった。

半年まえ、タマミは、美しい女秘書として、おれのまえに姿をあらわした。ぜいたくなほどよく伸びた四肢をもっていた。誇張なしにミス・ワールド級だった。そして、私のもめてやまない肉質と体臭す

もっていた。

私は夢中になった。彼女の一家の危急を巨額の金を投じて救ってやり、彼女じしんにもずいぶん金をつぎこんだ。豪勢なアパートを借りあたえ、からだじゅうを貴金属や宝石で飾りちらすような溺愛のしかただった。

それにもかかわらず、彼女は、私にそむいたのだ。彼女を完全に私有化しようとする私の夢は破れたのだ。このうへは、檻に入れ、鞭によって調教し、その性根を叩き直して、完全に屈服を誓わせるしかなかった。

私は、タマミの檻に近づいてゆくと、檻の鉄棒をつかんで、ガタガタとゆすった。タマミは、膝をかかえてうずくまり、その膝の上にアゴをのせ、上目づかいに、じっと私をニラんでいる。追いつめられた女豹のような表情だ。

「チキ生。明日は見ていろ。タップリとヤキを入れてやるから」
私はじぶんに言いきかせた。

処刑の日

「タマミ。出るんだ」

私は、アゴで檻の外をしゃくった。

私のうしろには、私が雇った荒くれ男が三人、ニヤニヤしながら立っている。檻の中のすっ裸のタマミに、食い入るような視線をなげながら――。

タマミは、激しい敵意をこめて、私と、それから三人の男の顔を、かわるがわるニラみつけ、それから、開かれた檻の出口のほうへ、す

こしずつからだを動かしてはじめた。すきあらば逃げ出そうという構えだが、冗談じゃない。

この富岡の私の別荘は用心堅固で、とても逃げ出せるものではないし、周囲は深い木立ちにかこまれ、人家も遠いので、呼べど叫べど聞こえるものではなかった。この別荘に、私は、今日の処刑のために、さまざまな大道具、小道具を準備していたのだった。

檻から出されたタマミは、大胆にも、スキをうかがってドアに体当たりしようとしたが、これは、三人の男のうちの一人によって、苦もなくさえぎられた。

「たっ」

男の手刀が、タマミの裸の首すじにとんだのだ。タマミはもんどりうってコンクリートの床にころがった。

「へッ、イカすぜ」

というように、男はニコリした。今日は、私から、どんな乱暴をしてもいいというOKがでているのだ。

タマミは床に叩きつけられたまま、しばらく突っぷしてあえいでいたが、さんばらに乱れた髪をさっとふりあげて顔をおこすと、凄いで私たちをニラみつけた。

「ホウ、べっぴんさんが怒ったぜ。こいっあおもしれえや。タハ」

男の一人がピッとツバを吐いた。

「さあ、ソロソロはじめるか」

私は言った。

私の手には、お気に入りの青柄の鞭がニぎられていた。

ピュッとしてそれにすぶりをくると、私はタマミに言った。

「これからムチがおまえにキッスする。これは百七ツ叩きと言って、

百八ぼんのうの除夜の鐘より一つすくない、ありがたいムチなんだ。ひとつひとつ、ゆっくり味わうがいい。ずいぶんしみじみするぜ」

「ヒッ」

とタマミがうめいて、からだを反^そらせた。

ことばが終わるよりはやく、私のムチがとんだのだ。

だが、それは小手しらべだった。

「うん、調子は上乘だ。ムチがよく肉にからむよ」

それから私は、

「そいつをやツの足にハメろ」

と命じた。

まるで一万トン級の船をつなぐような、すごくがんじょうな鉄のクサリがっぽん、コンクリートの床にのびていて、その先に鉄の輪がついていた。それが、手錠式にガチャツと足首にハマるようになっていた。タマミの右足首に、その輪は非情な音をたててかみついた。

クサリの重さで、タマミはほとんど自由がきかない。それでも、必死でからだをズラせれば、こんどはクサリがいっぱい伸びきり、鉄の輪がグツと足首の肉をかんでくる仕掛けだ。

「タマミ」

と私は言った。

「おれはおまえに、金の足輪をさえハメてやった。それをおまえは、じぶんから、こんな重い鉄の足輪にかえてくれというんだな。とびきり上等の香水より、ムチのほうが、じぶんのからだに似合っているというんだな。おまえは、ものずきな女だ。ものずきの結果を、今は思いきり知らせてやる。ア・ラ・カルト？ それともフル・コース？ 料理はおこのみしだいた。まず、これでもいいかがッ」

「ヒッ」

第二のムチだった。したたかに効いたらしかった。タマミは上半身を弓なりにそらせると、両手をついたまま、

「ホウ」

タメ息のようなものをもらしたが、ひたいからはみるみる汗の粒が噴きだした。それからク、ク、クとノドを鳴らしていたが、いきなり肩をふるわせて動^{どう}哭^きしはじめた。その声が、まるで笑っているようだったので、私たちは、

「狂った？」

一瞬、ギョツとして息をのんだくらいだった。

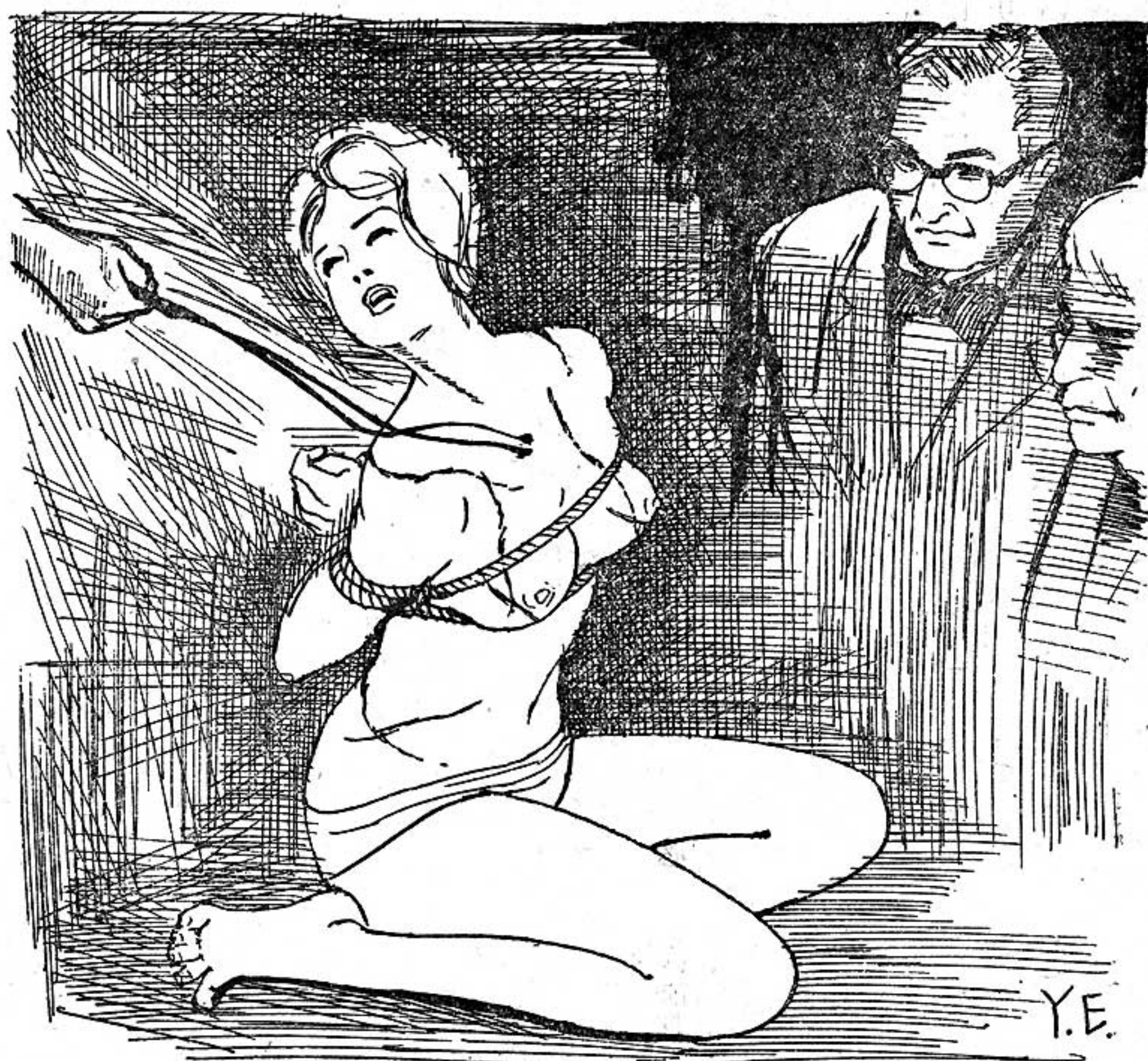
この段階では、タマミの肌はまだムチに対して処女地のようなものだった。肉体のショックも、心理的なショックも、鮮烈だった。だから、ムチをふるうのにも、大して技巧はいらなかった。

私は、三十ばかりムチをくれた。そのひとつひとつに、もっともらしい前おきの文句がついているのだった。この調子で百七ツも叩くとすると、百科辞典をまる覚えしているくらいの知識が必要になりそうだった。

私は、いいかげんなところで、ムチを次の男に渡した。いささか疲れて、ムチの威力がにぶってきてもいたし、このへんで純粋に鑑賞する側にまわりたいとも思ったのだ。前のピッチャーがプレートを降りて、次のピッチャーが出て叫^{こゑ}たようなものだった。

「オッケー」

とさけんで彼は、私からムチを受けとると、なんだか、ひどく曲芸的な身ぶりで、ムチを虚空に一閃させた。この男は、もとサーカスにいて、猛獣使いをやっていたのだった。



ヤツのムチさばきは、ちょっとした見ものだった。一種の技巧派で、けんらんたる演出力をもっていた。とび上がって叩き、走りまわって叩き、そうかと思うと、叩きおわった瞬間、じぶんのからだを空中で一回転させるような、アクロバットもどきの芸当もやった。

「たッ」

とか、

「よッ」

とか、かけ声をかけ、ムチが虚空を切るたびに、タマミの唇からも、ちがった音色の悲鳴がもれた。ヤツはあらゆる種類の泣きどころを心得えていて、要領よくそこをついているのだった。また、目をこらして見ると、ヤツのムチはよく生きていて、肉にからんだりシゴいたり、自由に変化しているのだった。

すぐくビートのきいた攻撃のあと、ヤツがポケットからタバコを出して吸いつけたので、

「やれやれ、一休みかな」

私たちがホッとしていると、ヤツはタマミを横目で見て、くわえタバコで歩きかけたが、いきなり、無言でさッと身をひるがえすと、抜く手も見せずといったかっこうで、ムチを横ざまにふりはらった。剛球投手が、ノー・モーションでいきなり速球をキャッチャーのミットにきめこんだようなものだった。

不意をつかれたタマミの筋肉は、したたかにムチを吸いこんだ。そして、

「オーウ」

という、祈るような、感嘆するような、一種独得のひくい声が彼女の唇からもれたかと思うと、そのからだがおがむようにのび上がりバツタリ倒れて動かなくなった。ヤツは、倒れたタマミのそばにいて、その呼吸をうかがっていたが、

「キマった」

ひくく、つぶやくように言うと、ひたいの汗をぬぐい、それから目を細めて、タバコを大きく吸いこむのだった。

お次の番だ！

タマミは、ていねいに介抱された。

じぶんのコーナーで介抱をうけながら、次のゴングを待っているボクサーのようなものだった。いや、それとはくらべものにならない歩のわるいたたかいだった。よりあらしの攻撃に身をさらし、さらに強烈なパンチで気をうしなうために、介抱をうけているのだった。さらに強烈な、倍加された苦痛を再生産するために、あらたな生命力が注入されているのだった。

ウィスキーをぶっかけられたり、覚醒剤を注射されたり、全身マッサージをうけたりしているうちに、閉ざされていたタマミのマブタがポツカリひらいた。深い海の底で、なにかの植物がひっそりと花をひらいた感じだった。それから、かわいた声で、

「水」

と言った。

私は、タマミに、ヤカンの口から水をのましてやった。そのうけ方

が完全でないの、水はタマミの唇からあふれてダラダラと頬にながれ、彼女はむせてせきこんだ。そのセキが、彼女の意識をいくらかハッキリさせたようだ。ひたいに手の甲をあて、

「ああ」

と眉をしかめた。からだのおく深く、苦痛がうずいているらしい。四人の看病人たちは、

「どうだい。すこしはいいかい」

というように、彼女の顔をのぞきこんだ。

この看病人たちは、はやく彼女がよくなって、ピチピチとした生命感をもって、処刑の座についてくれることを待っている残酷な看病人たちだった。

結局、その日一日は、タマミはつかいものにならなかった。

「しかたがない。骨休めだな。ウィスキーでも飲んでくれ」

私は三人の男に休養を指示し、じぶんは東京へ市外通話し、仕事の打ち合わせなんかをした。広告代理業S社の社長としての私は、世間では紳士で通っている。そのおれが、いま、こんなところで、こんなことをしているのを、世間のやつらは知らないだろう。戸外では、初秋の白昼のひかりが、ギラギラと照りかがやいているのだった。

レス・ボール

あくる日、タマミの回復をまっしてはじめられたのは、レス・ボールという奇妙なあそびだった。

まず、プロレスのリングのようなものが特設され、周囲にはロープがはられる。その二つのロープサイドを背にして、二人の裸の男が向

きあって立つ。そのあいだに、タマミが置かれる。それから、ゴングでプレイがはじまるのだ。レスリングと人体キャッチボールをミックスしたようなものだった。名づけてレス・ボール。むろんボールになるのは、タマミだった。

「ソラ、行くぜ」

タマミを手もとにつれてきた男が、そうさけんで、反対側の男にあいずする。

「オッケー」

と、反対側の男はこたえる。

そのとたん、つきとばされたタマミのからだは、ものすごいいきおいで、マットの上をふっとなで、ぐしゃっという音を立てて、反対側の男の胸にうけとめられる。

「ナイス・キャッチ」

「それほどでもねえさ」

と、いうわけだ。

こうして、タマミという、心臓と足をもったボールが、マットの上をはげしく行ったり来たりするのだった。つきとばしがよく効いたときは、タマミのからだは、百メートル競走のスタート・ダッシュのように物凄いいきおいでとび出し、反対側のサイドに〇・三秒くらいでとびこんだ。

反対側の男がその肉弾をうけとめてくれるばあいはまだいいが、わざとはずしたときが見ものだった。タマミのからだは物凄いいきおいでロープにぶちあたり、その反動で、リングの中央にはねかえると、もんどりうって反転した。このあたりから、レス・ボールはそろそろレスリングの様相をあらわしてくるのだった。

リングの中央にコロがったタマミのからだは、男たちのいい餌食だった。タックルされ、ホールドされ、そしてまた、ぶん投げられた。

「やっ」

とか、

「たっ」

とか、男たちのかけ声がかかるたびに、タマミのからだはふっとなだ。おさえこまれたときは彼女は、必死になって足をバタつかせたが、それは、見た目にはあまりにも非力な、はかない抵抗にしかすぎなかった。男たちは、このホールドをいちばんよろこんだ、思うさまタマミをおさえつけ、その肉の触感をたのしむことができるからだだった。だから、タマミの必死の抵抗も、男たちには適当にこのましい筋肉のけいれんぐらいにしか感じられないのだった。

が、この荒っぽいプレイにも、ルールがないわけではなかった。

タマミをリングの中央でおさえつけると、男たちはおもしろがって、タマミをはずかしめるような、きわどいグラウンド・プレイの体位にもちこんだ。タマミは苦痛に対しては、ほとんどマヒしたようになっただけで、そうされると、女の肉体のおくふかくねむっている自衛の本能が、勃然として呼びさまされるらしかった。

「オホ、やるぜ、なかなか——このおねえちゃんは——」

ほとんど信じられないくらいの死力をふるって、タマミが組みしかれた体位からロープへのがれようとする、男たちは、大げさな奇声を発してはやしたてた。

一センチ、二センチ——ほとんど目に見えないくらい少しずつ、タマミのからだはロープのほうへ動く。汗が、マットの上にしたたりおちた。からみ合う男と女の汗がまざりあって、皮革を煮つめたような

異様な臭気を発した。タマミは、いっぴきのアリが、じぶんの数倍もある昆虫の死骸を背負ってノロノロと移動するように、男に組みしかれたまま、じりじりとロープへ肉迫する。

「おっ、おねえちゃん、強いぞ」

男たちは、面白がって、ワザとタマミにそうさせているのだ。こんなステキなものはない、といったように――

それでも、はるかな死闘のすえ、タマミは、ようやくロープにあと一センチか二センチで指先が届くというところまで接近することに成功する。のびした腕の、その指先の末端が、ロープにふれるか触れないかのところで、ピリピリとけいれんしている。そして、ついに触れそうになる。触れればゲーム・セットで、タマミがにげ切ったことになるのだった。

が、男たちの寛容もそのへんまでが限界だった。タマミの指をわざとロープに触れそうにさせておいて、どっこいとはかりに、ひきもどす。無残に空をつかむタマミの手。

「アッ」

ハラワタをしぼるような絶望のさけび。こうしたスレスレの瞬間が、すでにもうなん度もくり返されているのだった。

ふたたびリングの中央にひきもどされるタマミ。つつ伏したま、炎のように激しい息をしている。

そのときである。

「アッ」

とさけぶなり、とつぜんタマミが立ち上がってロープにラッシュしたのは――。

男たちも一息入っていたところなので、こうしたタマミの発狂的な

動作には不意をつかれた形で、制止するまもなく。アッというまに彼女は、ロープにぶちあたると、もんどりうってリングの外のコンクリートの上に叩きつけられ、口から泡を噴いて悶絶した。そして、彼女の股間からしみ出した一すじの黒い条痕が、すうっと静かにコンクリートの床にのびていった。

蚊 責 め

ながいインターバルが終わり、タマミは正気づく、ふたたび処刑の座にすえられた。こんどは全身が立ったままスッポリと入る、プラスチックの透明な箱に入れられ、その箱の上端にあけられた穴から、首だけが外につき出しているのだった。首を出したあと、穴の大きさが調節できるようになっているので、首はしっかり枷にハメられたように固定され、脱けなくなっている。

そうされたまま、タマミはキョトンと私を見ていた。

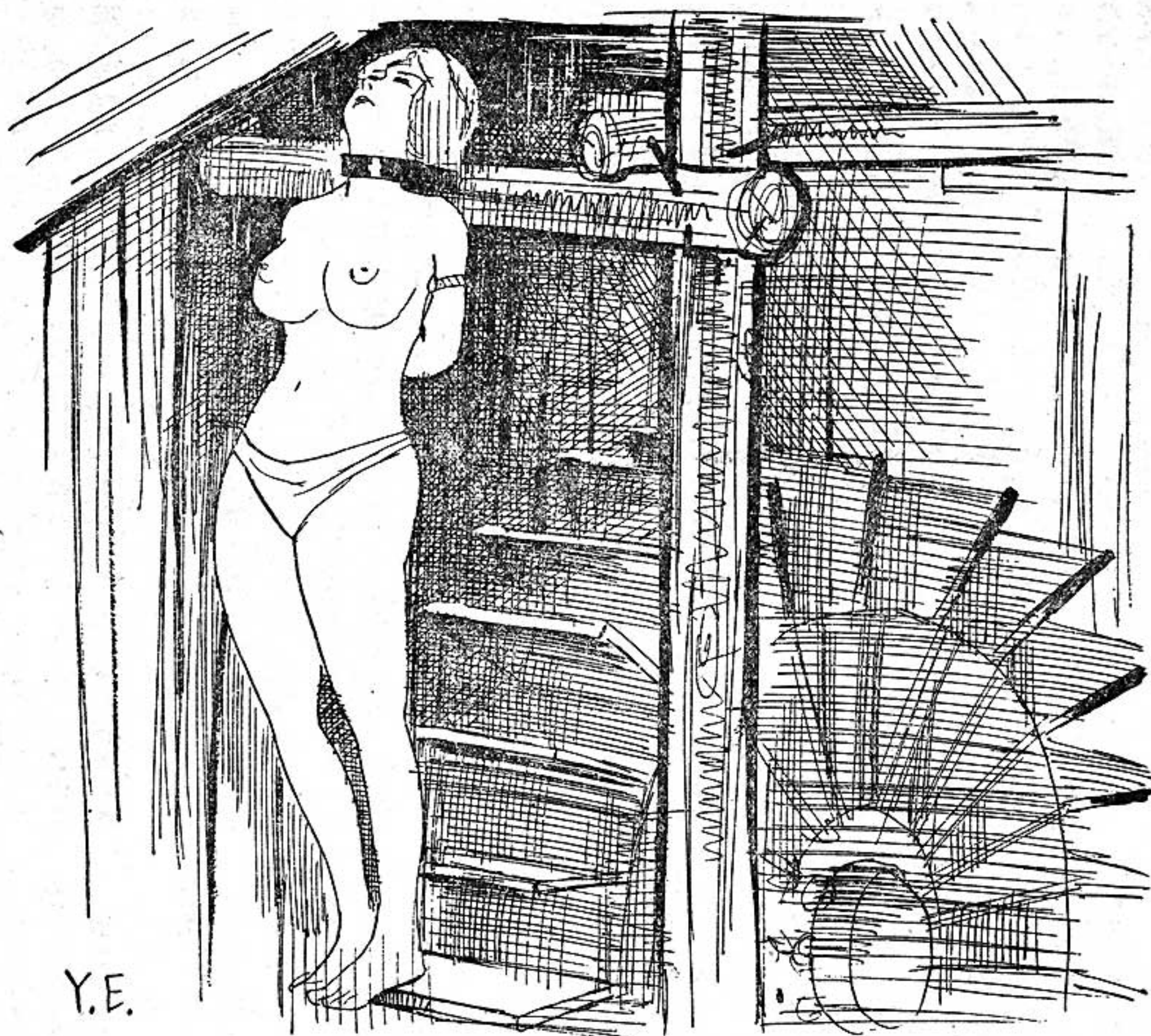
「いったい、このうえあたしに何をしようというの？」

と言うように――。

その目には、もういままでのように、はげしい憎悪と反抗の色はなく、つながれたけもののような、言い知れない畏怖のいろが浮かんでいた。

私ははじめ、ムチ叩きでタマミを攻めた。

つぎはレス・ボールだった。ムチ叩きではタマミのからだはムチの細く鋭い加撃に耐えるだけで、それほどの激しい全身的な動きは要求されなかった。ところが、レス・ボールはちがっていた。タマミのからだはボールであり、叩きつけられる一枚のボロ布だった。そのあげ



くのはて、彼女は一枚のなめし皮のようにクチャクチャになって気を失ったのだった。

こうした質のちがった攻撃と苦痛。次元の異なる恐怖の洗礼が、タミの神経をオカしくしていた。いま加えられている攻撃から、次の攻撃の手口を推測するのは、まったく不可能だった。どんな珍手がとび出すかわからなかった。ムチに耐え、ムチにマヒしたところには、まったくちがう種類の責め道具が、とんでもない角度からとんでくるものだから、全身の神経系統は、名状すべからざる混乱におちいっていた。

タミは、いまや、憎しみや反抗といった統一した意志をうしない、ただ次の攻撃の予感にうちふるえる、みじめな一匹の動物と化したのだった。それこそ、意識的に組み合わされた私の攻撃のプログラムだった。要するに、オードブルやスープや魚やミートが、いとも順序よく配列されているというわけだった。

つぎの攻撃は「蚊責め」だった。箱の上に出ているタミの顔に酒をぶっかけ、その上からやはりプラスチックで出来た透明な、頭がスッポリ入るフタをかぶせる。潜水服の、頭の部分くらいの大きさだった。

そして、その中に、裏のヤブで採集してきたヤブ蚊の大群が放たれたのだった。

蚊の攻撃がはじまると、箱の中のタマミの全身が、奇妙にくねるスネーク・ダンスをはじめた。その中には蚊は入っていないのだが、顔中を蚊の攻撃にさらされ、しかも掻くことができないので、反射的にからだのほうが必要な運動をはじめめるのだ。

いっぽう顔のほうはどうかというと、これはもう、すさまじい百面相だった。口をモグモグ、目をパチパチ、そして、蚊を吸いこんだ鼻の穴は、奇妙なふうにくらんだり、つぼまったりしていた。そして、そんな状態が十分もつづいて、やっと箱から解放されたとき、タマミの顔は、デコボコに腫れ上がって、ひとまわりも大きくなり、見わけがつかないくらいだった。

檻のうちそと

ディナーもすすんで、いちばんパンチのきいた一皿が、出る番になった。

これには、ちょっとした大道具小道具を要するので、準備にちょっとした時間が、かかった。

私は、男たちを指揮して、舞台装置にかかったが、そのとき、フト異様な気様な気配を感じた。

黙々としてはたらいっている男たちのあいだに、一種の不穏な反抗の気配がうごいているのを嗅ぎつけたのだった。

「こんなはずはなかったのだが……」

二日間の風変わりな労役に対しては、十分な報酬を約束してある。それに、この労役は、きやつらにとっても、そんなに不愉快なものではないはずだが――

「疲れたのだ。きつと疲れたのだ」

私は善意に解釈した。

じっさい、こんな刺激の強い調教は、たのしい反面、ひどく疲れもするのだ。

やがて準備がととのった。

まず、幕なきの情景から説明しよう。

舞台の中央に、直径二メートルほどの水車が据えつけてある。これは、すばらしく回転がよくしてあった。そして、その水車の中段を踏むかっこうで、タマミが立っている。

立っているというより、首枷くびかぎで首からブラ下がっているといったほうがいい。

いまのところは水車に齒ドメがしてあるので、タマミの足はまだそれに支えられていたが――

タマミのコスチュームが見ものだった。頭には当世流行のカンカン帽がチョコンとのっかっている。裸の首には赤いネッカチーフが、ポリースカウトのように結びつけられ、あとは乳房の部分を覆う黄色のブラジャーと、真紅のパンティー。足にはタイツのように深いグリーンで、奇抜な踊り子スタイルだ。

顔には仮面をつけていた。不気味に凍結したピエロの微笑。そしてその口は、火の点いた葉巻きをくわえているのだ。その葉巻きがおちないように、セロテープでしっかり止めてある。

水車の齒ドメがはずされ、ゆるやかな伴奏につれて、それがまわりはじめる。

足の支点が落下する恐怖で、タマミの足が反射的にそれを踏む、さ

らに回る、踏む、このくりかえしのうちに、水車の回転は徐々に速度をましてゆく。

踏むことをやめたとたんに、タマミは首を支えた首枷に全身の体重をかけ、宙吊りになることになる。その苦しみからのがれるためには、しだいに回転をますます無限軌道のステップを、休みなしに上りつづけなければならぬのだ。それは、あの二十日ネズミの無限地獄のいとなみそのままだった。

しだいに水車の回転がますますにつれ、青いストックキングのタマミの足は、疾走するように目まぐるしく動き出す。伴奏もだんだん早くなる。しかし、ピエロの仮面は微笑をうかべたままだ。

それだけに、その下に隠されているタマミの、しずかな死の苦悶を連想させるのだ。

葉巻きからプカリ、プカリと煙が出はじめた。それは、マスクの下にいるタマミの呼吸がはげしくなったことを意味していた。のんびりと道化た仮面の下で、いま、死との惨憺なたたかいがいとなまれているのだった。

そして、伴奏が、昔の無声映画の活劇で追跡場面によく使われた『天国と地獄』の、たたみかけるような急速調にもりあがったとき、タマミの足の動きはクライマックスに達した。それは、微笑するピエロのマスクをつけた断末魔の体操だった。見ている私の歓喜は絶頂に達した。

そのときである。後頭部に、ガンと激しい衝撃を、私が受けたのは――。

そのまま私は意識を失った。

どのくらい時がたったのだろう。私はフト意識をとり戻した。いきなり、目の前に鉄棒が見えた。檻の鉄棒だった。じぶんが、檻の外にはなく、檻の中にいるのだと気がつくまで、たっぷり三十秒はかかった。

「どうしておれが檻の中に――」

その疑問に対しては、そのとき、檻の外に、すっかり身支度をしてあらわれたタマミが、明快にこたえてくれた。

「いま気がついたの、社長さん。あなたより、あの荒くれ男たちのほうが、まだ人間味があったわね。最後のドタン場には、あたしを助けてくれたもの。もっとも、やっぱり報酬は必要だったわ。二階の金庫にあった社長さんの十万円、あの男たちにやったの。喜んでたわ。じゃあ、サヨウナラ、社長さん。ゆっくりおやすみなさいね。檻の中で――」

「タマミ！」

と呼んだが、そのときは、彼女はもう、スカートの裾をひるがえして、地下室の階段を上ってゆくところだった。あれほどの拷問にたえたとも思えない、かるやかな足どりで――。

「タマミ！」

ともう一度呼んだが、不気味なエコーが返ってきただけだった。まだズキズキ痛む後頭部をおさえ、私は絶望のあまり、檻の中に倒れた。

タマミ、タマミ、タマミというエコーが、まだ、あざ笑うように聞こえるようだった。

無人の別荘に――しずかに夕闇がひろがっていった。

読者

サロン

—投稿自由—



▼九月号、手に取ったときからゾクゾクしましたが、読了して少なからず失望したのは、私だけではありますまい。それは、せっかく特集とうたいながら、関係記事の少ないこと。それに、せめて本号くらい、写真をオール女装マニアで埋めてほしかった。つまり、テッテイした特集であってほしかったのです。それで、編集室にお願い。近いうちに、今度こそ、本当のオール女装マニア、男装、ゲイ・ボーイ特集号をフンパツしてください。そのときの希望として、東西競艶録と銘うって、東京、大阪を中心とした姐さん(?)の方のアダ姿を、出来るだけ多くをのせてほしいこと。名前住所も記してください。女形の全身塗った裸体の責め縛りをも

のせてください。お願いします。次に、かびやかずひこ先生へ、大阪のマニアのクラブで某氏別荘とありましたが、場所、入会方法を教えてください。また、神戸のマニアの鈴木さん、住所なり、連絡方法をご通信乞う。

(大阪 Y・S生)

▼八月号の写真のなかで、だいたんに男性緊縛写真をとり上げてくださった英断に感謝します。小生は、若く逞しい肉体の男性をがんじがらめにして責める絵や写真を好みますが、どうも、この種の風俗雑誌には、どれも同じような女性のものばかりで失望していましたが、御誌が早くとり上げてくださったのをみて、欣喜しました。対女性のマゾの構図がありました。

むしろ男性単独のものが好ましいと思います。または、男同士のものも賛成です。欲といえ、うしろ向きでない、顔の写ったものがないと思いますが、男は女とちがって、モデルを仕事にする人がいないので、自然顔をうつすのが嫌われていると思います。

1. 勤皇志士の侍が新選組に捕えられ、全裸または褌一本で逆吊りの拷問をうけているところ
2. 吉田御殿で、千姫の面前で若い僧侶が全裸で、奥女中たちのナギナタで責められているところ
3. 美しい妖婦が、若い逞しい男を全裸縛りにしてムチを振って打ちすえているところ。周囲にはならず者たちがあぐらをかいて眺めているところ
4. 軍事探偵が馬賊に捕えられて、むごたらしい拷問をうけているところ。この場

合馬賊のなかに女がまじっている、いっそうよい

5. 警官が、やくざの巣窟につれて行かれ、私刑をうけているところ
6. 高校教師が、退学させられた不良生徒たちの手に捕えられてリンチをうけているところ

などで、吊責め、逆さ吊り、海老責め、木馬責め、炎責めなどが利用されると、いっそう面白い。被害者は全裸がのぞましいのですが、六尺褌、越中褌、サポーターなどの姿も、魅力があつてよいと思います。すべて女性的な美男でなく、逞ましい男性的な風貌がのぞましいと思います。

私以外にも、きっと希望するものが多いと思いますから、御誌の編集の幅をひろげる意味においても、ぜひ実行してください。おねがいします。(神田ソフエ)

▼八月号のグラビアで、男の六尺褌一本での就縛責めに接し、他誌では見られぬものであるが欲を言えば、少し体格が落ちる。隆々たる肉体美で、褌も、

角力のまわしのような太いのでなく、細目のピッタリ腰に締まったのがよい。雨の庭で水浸しになって赤い腰巻き一つの日本的な妖婦にムチ打たれたり、足で踏み付けられたりするプレイがぜひ欲しい。パンティーの女や、棒で、つかれたりするのはピンと来ないし、凄惨さが無い。六禪一本で女に責められたいM党も多いし、生ぬるいモデル写真でなく、前述のような妖婦の前で水浸しになってノタ打つ男の禪に魅力を感じると言う演出を希望する。

物語的に順を追って、七、八種撮影するのもいい。チョンマゲ・カツラを付けて時代物に、妖婦姫のお百のワナに落ちた男が、しびれ薬で苦しむのを裸にされ、禪一本、雨の庭へ蹴落とされて、うしろ手に縛られ、裸になったお百のムチを尻へ受けてノタ打つ。踏み付けられて、ミミズばれになった男の尻、木に釣られた男の腰から尻へ、長いムチがギリギリ巻き付いているが、引き絞られて、食い込むムチ、なお、M党には正に憧れのプレイと思う。

初秋号には、禪責めが一枚もなく寂しい。編集長へよろしくご配慮を乞う。

(東京 百田生)

▼自称サド・マニアの一ファンです。待望の「悪徳の栄え」を紹介していただいて、大変ありがたうございました。ひごろから、いろいろサドの極致を妄想して、私も、今度こそは御誌によって、じゅうぶん満足しました。つきましては、次号にもぜひ続編を載せてください

(北陸路)

▼私は、三十九歳の一美容師ですが、先日、書店にて、ふと御誌をみて、つれづれに買い求めました。

そのなかで、非常に残酷な小説や、同性の縛り写真をみて、終戦時、私がいた吉林での、いまわしい夜のことを思い出しましたので、なにか小説の材料にでも参考になればと、思い出すままに書き止めました。

私は当時、吉林でA少佐の官舎に女中として働いておりました。A少佐は、関東軍の情報関係のお仕事をしていたようで、終戦直後、暴徒による襲撃は、

ただうらみの一言につきるような残酷さでした。A少佐はすぐソ連軍に逮捕されたらしく、姿を見せませんでした。八月二十

二日の夜でした。奥さんと私の二人が、嚴重に戸締まりして恐怖におののきながら応接室にいますと、突然五、六名の暴徒が裏口を破って侵入してきました。奥さんと私は、声も出ずに腰が抜けて立てません。そのうち、一人の男が、私たちの前にやって来て、部厚い包丁を突きつけて、奥さんに、「お前がA少佐の細君か」と聞きました。

「A少佐のために仲間が殺されたから、お前を殺す」といって、五人がかりで、うずくまって両手を合わせ奥さんを、私の見ている前で、着物を脱いで裸にし、さんざん暴行のかぎりをつくしました。うめく声もとだえ、ただヒィ、ヒッとのを鳴らすだけの、あれが断末魔というのでしょうか。目を空に向け、口からは血のまじった泡を出し、両手を赤ん坊のようにイヤイヤをする格好で動いていました。次は、私だと、かんねんしてしましたら、私には目もくれず、奥

さんの両手を縛り、笑いながら竹の棒を××に入れてひきずりながら応接室を出てゆきました。

まもなく、窓の下でグッ、という悲鳴と、なにか切り裂くようなにぶい音がして、なんともいえない奥さんの悲鳴が聞こえました。

男たちの笑い声と、そうして、しばらくたって、またギャーッという悲鳴、私には、とても長い時間のように思えました。

と突然、窓ガラスが割れてとび込んできた一かたまりの肉塊をみて、私は気を失ってしまいました。

翌朝、犬がひどく吠えたので気がついて庭を見ますと、どうでしょう、ところどころ犬に食いちぎられ、白い骨がみえましました。もう人間の形はなく、ムクロと化した一塊の無残さで転がっているのです。

あれから十五年経ちます。ふと御誌を見て思い出したことを書きしたためました。

(三次・花)

妖美凄絶の迫真緊縛写真数十葉と、悦虐名画数十点を一堂に会した、豪華絢爛の、目で見る変態風俗絵巻！



画報・風俗奇譚② (一八〇円)

第1グラビア・鴨居づり他
第2グラビア・美囚六態他
第3グラビア・犬になれ他
百数十葉の緊縛特写真写真満載
多色口絵・池畔の愉悅
写真口絵・陶酔する女体
マゾヒスティック絵画館
アブノーマル秘画展
写真物語・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
凄惨目を覆う殺人現場
人間ステッキ・ほか



画報・風俗奇譚・秘蔵版 (二〇〇円)

多色刷写真・まひるの艶肌ほか迫
力緊縛による豪華版
多色刷口絵・空中はりつけ、白肌
の執念ほか
豪華色彩図譜
第1グラビア・二人無残ほか
第2グラビア・竹で責めるほか
第3グラビア・異虐図絵ほか
責め絵画集・三人力作集
アブチック絵画館
コルセットをする女たち
男をしいたげる女たち
ザッヘル・マゾッホの小説
・永遠の美と若さの泉ほか



画報・風俗奇譚④ (一八〇円)

色刷写真・五輪石塔の前でほか四
葉の極彩緊縛写真特別発表
多色刷口絵・田上恵子・江馬美久
小田利美の傑作無残画
第1グラビア・水車縛りほか
第2グラビア・青い無残絵巻
第3グラビア・お灸責めほか
絵物語・悪徳の栄え
街の野獣たちほか
世界名作秘画誌上展覧会
リチャード・ミューラー
グロテスク画集
裸女緊縛30態ほか

既刊各号の残部が残り少なくなりました。バック・ナンバーの御注文はお早くお申し込みください。

創刊・臨時特集号 (売切れ)

艶妖特集号 (二〇〇円)

多色刷写真口絵多数

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理

白肌を切り裂く男の愛情

回教残酷譚

女の黒髪に埋もれて死にたい

犬によって快楽を求める女他

悦虐特集四月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア口絵豊富

特集・鞭打の心理と実相

焼け火箸の快楽死

人間と蛇との交情

女の死体に憑かれた男

地獄尼僧院

ピストルを持ったサディスト

変態名画館——ほか

春の臨時増刊号 (二五〇円)

(妖異猟奇艶笑特選25編)

特写グラビア精巧写真口絵

変態性欲考

猫の怨霊

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブ

魔の十三号室

吸血鬼譚——ほか

耽美法悦特集五月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア多数

特集・同性愛の種類と実際

マゾッホの被虐待契約書

女の切腹とその心理

女の肉を食べた男

性的イレズミ考

マゾヒストの美酒

ベルトの魅惑——ほか

嗜虐陶酔特集六月号 (二二〇円)

多色口絵グラビア16頁ほか

特集・フェチズム(淫物症)

マゾヒストの手紙から

浣腸に魅入られた女

マゾ妻、二代目矢作ヨネ

八十七個の洗濯バサミ

レスボスの日

変態見世物——ほか

夏の臨時増刊・薫風特別号 (一八〇円)

多色刷特写真口絵・無残石燈

グラビア・荒縄と岩、首つり

とくすぐりをはじめ百数十

葉におよぶ凄絶緊縛写真は

愛好家待望のコレクション

特集・怪奇残酷秘話

十代の悪の女王

白肌責め絵図

肉体壁面を彫る男

男性チョン切り事件史

尼僧強姦魔・大米竜雲

マツチの火で毛を焼いて

サド男マゾ女の無理心中

写真物語責め写真家とモデル

絵物語・無法狼、娘しぼり

そのほか変態性欲犯罪実録集

怨羞無残特集七月号 (二四〇円)

多色口絵II落花図絵・女のプ

リズムほか

グラビアII恋慕受縛・姐上の

白魚・吊られる女ほか数十葉

特集・食人症

サディズムの極「食人症」

食人国物語

人肉料理を食べた人びと

ソドム族の告白記

幻妖異虐特集八月号 (二四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏

グラビア・スタンドの美女、

竹責め・男性緊縛ほか数十葉

口絵・江馬美久傑作集

特集・レスビアンの生態

サディストとマゾヒストの往

復書簡

東西レスビアンズの愛の技法

美少年の家探訪記

あたしの悦虐プレイ

殺した女の怨霊に招かれた男

亡霊に復讐された男女ほか

艶美悶悦特集九月号 (二四〇円)

多色口絵・空中鞭打

写真原色・巖頭の裸女・つるさ

れた白魚・女をポーズほかグ

ラビア・裸女無残・二人しば

り・投げ出された女ほか数十

葉

特集女装する男たち

女性的男子について

女装する男たちの生態

女装マニアその魅せられるも

の

浣腸のいけにえ

マゾヒストの手紙から

奇妙な再会

暗黒街の処刑室ほか

▼原稿募集▲

創刊以来本誌では毎号読者のみなさまに投稿原稿を御依頼してまいりましたが、いよいよ10月号を期して画期的な原稿募集を企画決定しました。

つきましては、全国のファンみなさまよりの力作、傑作をふるって御投稿くださるようお願いいたします。

応募規程

◎告白、体験記 (四百字詰) 20枚

◎アブ創作 (四百字詰) 30枚

サディズム・マゾヒズム・ホモ・フェチズム・浣腸・切腹・男性緊縛等、異色の世界をえぐる小説を期待します。

◎風俗資料

お手もちの変態風俗資料をお送りください。買い取り、拝借どちらでも結構です。

◎読者写真

採用の節は規程の稿料を差し上げます。

編集だより

▼読者サロンへのご投稿の愛読者のかたから、いろいろとご教示やご意見をいただいて、編集上大変ありがたと思っていますが、なかには、モデルの紹介や撮影会の地方開催など、具体的にお問い合わせの方がおられますが、当誌と致しましては、ここ当分、そのような企画、紹介などは考えておりませんから、ご了承ください。

▼風奇の誇るわが緊縛師、立石祥一氏より、全国のファンのみなさまに、女性、男性緊縛のアイデアを、ぜひお送りくださるようにとのことでしたから、ふるって、どんな縛り方でも、けっこうです、また小道具などお知らせください。スバラシイもののなかからえらんで、立石氏に緊縛していただき、誌上にてご期待にそいたいと思います。

▼本格的なサド小説、暗黒街の処刑室の青山三枝吉氏は、近々発表する五〇枚の力作の構想を練っています。次号をご期待ください。

▼次号はまた戦争残酷物語特集号として着々企画を進行していきます。現在、ポーランドにおいて話題になったユダヤ人虐殺の記録「決して忘れはしない」の集録写真をふくめて、戦争と性についての特集は、風奇が総力をあけての躍進号です。

▼風奇が誇るわが緊縛師、立石氏は、月刊二冊の撮影に、日夜涙ぐましい努力を重ねています。が、さすがに猛暑と、加えて、よる年波のなんとかで、少々バテて来たようです。当編集室員一同、ひごろの立石氏の功労に報いるために、先日、熱海のS亭にて一席もうけ、東京よりかけつけたモデル嬢をはさんで、にぎやかに酒宴となりました。

本誌月ぎめご購読のお知らせ

風俗奇譚

(いずれも送料とも)

一月分(1冊)	一四〇円
三月分(3冊)	四二〇円
六月分(6冊)	八〇〇円
一年分(12冊)	一六〇〇円

画報・風俗奇譚(いずれも送料とも)

一月分(1冊)	一八〇円
三月分(3冊)	五四〇円
六月分(6冊)	一〇五〇円
一年分(12冊)	二〇〇〇円

風俗奇譚・十月号

定価 一四〇円

昭和35年9月20日印刷
昭和35年10月1日発行

編集発行人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区

神田神保町一の一三五

発行所 文献資料刊行会

電話東京(291)二四三〇番